

「貴方は儲けますとも。」と言つて彼は身體を揺りながら再び指を輕蔑するやうに舉げた。

「ステベルコフ！ 指をそんな風にしないで話して下さい。でなきや僕失禮しますよ。」

「公爵はアンナ・アンドレイヴナと結婚するかも知れませんね。」と彼は左の眼を釣り上げながら言つた。

「お聞きなさい、ステベルコフ！ 貴方の話はそんな汚れた……どうしてアンナ・アンドレイヴナの名前などを強いて口になさるんです！」

「そんなに怒るものぢやありません。」

「僕は聴いてゐますよ、氣には入りませんがね。何故つて貴方の袖には何かしら隠れてゐる物があるとはつきり解つてゐるからです。それが何かを僕は發見したいのです。……然し貴方は僕に我慢出来かねますよ、ステベルコフ！」

「怒らないで下さい、威張らないで下さい。今少し謙遜にしてよく聴いたらいいぢやありませんか。そして又威張つたらいいんです。餘り虚勢を張り過ぎますよ。貴方は、無論、アンナ・アンドレイヴナのことを御存知だ。公爵が挑戦した……といふことは、無論知つてゐますね……。」

「そんなことも無論聞きました。みんな一つてゐますよ。然し、僕はセルゲイ貴方に、そんなことを微塵も話したことなんか無いんです、そんな噂は老ソコルスキイ貴方が原因だといふことを僕はただたつてゐるきりですよ。今は老公爵も病氣ですがね。が、僕はあの人にそのことを話したこともなく、又、そのことで僕のしなければならぬ事は何もなかつたのです。このことを單に事情を明らかにして置きたい

ために、お話ししますよ。それで第一に訊きたいと思ひますがね、一體、そんなことを僕にお話しになる貴方の目的は何なのです？ そして第二に、セルゲイ公爵が、その問題に就いて貴方のやうな人に話すなんてことがあるのでせうかね？」

「公爵は僕とそのことを話しましたよ。——といふよりも、實は公爵は僕に話したくはなかつたのですが、僕の方から切り出したのです。而も公爵は聴きたくないのです、今朝は僕に嘔鳴り付けました。」

「さうだらうと僕も思つたんだ！ セルゲイ公爵に僕は敬意を表しますよ。」

「老ソコルスキイ公爵はアンナ・アンドレイヴナに澤山の持參金を遣ることとせう、あの女はお氣に入りますからね。で、公爵があつた女と結婚すれば、負債の全部を返して了へるのです。よ、その負債も返して了へますよ。屹度拂ふに相違ないのです。が、今のところでは一文たつて拂へはしないのです。」

「貴方は僕にどうして貰ひたいのです？」

「大した質問ですね。その返事は……貴方は至る處で知られてゐる、至る處に行く、何でも嗅ぎ出すことが出来る。」

「ああ、何ていふことだ……何を嗅ぎ出すんです？」

「セルゲイ公爵がその結婚を望んでゐるかとか、アンナ・アンドレイヴナが望んでゐるかとか、老公爵が望んでゐるかとかを。」

「すると貴方は僕が貴方の間諜にならなきやならんとおつしやるんですか、——而も金のために！」

私は憤慨してかう呶鳴つた。  
 「威張つてはいけない、威張らないで下さい。もう少し謙遜になつて、僅かに五分間でもいいんだから。」  
 彼は又私を椅子に腰を卸させた。

彼は明らかに私の言葉だの表情だのでは、びくともしなかつた。然し私は終りまで聞かうと心を決めた。

「僕は至急に喚ぎ出したい、至急に喚ぎ出したいのです。何故と言ふに……直ぐに手廻れになるからです。今朝、あの士官さんが男爵とアマコフ夫人とのことを言ひ出した時に、セルゲイ公爵がどんなに丸薬を呑み込んだが、貴方も御覧になつたでせうね。」

元來ならば今少し聞いてから何とか言ふべきだつたらうが、私の好奇心は止め得ない程に湧き起つた。

「御聞きなさい、實に貴方は失禮な人間だ！僕は此處に坐つて聴きながらさうした人たちのことを貴方が話すのを黙つてゐる……そればかりか、貴方にかうして返答さへしてゐる、けれども、ちつとも貴方がさうする権利を認めてはゐないので。僕は唯その中に惡漢の片割れを見てゐるんですよ……で、第一にお訊きたい、セルゲイ公爵はそのカテリナ・ニコラエヴナのこと何か望みがあるんですかね？」と私はきつぱりと切り出した。

「何にもありやしない。けれども公爵はむしやくしやするんです。」

「そりや嘘ですよ！」

「嘘だもんですか。アマコフ夫人は昔も今も駄目なんです。セルゲイ公爵はその極を無くしたので、今はアンナ・アンドレイヴナしか頼らうとする女はないんですよ。僕は貴方に二千留差し上げませう……無利子で、而も借用證書もなしで。」

かう言つてから彼は、きちんとした鹿爪らしい顔付きをして椅子に身體を埋めながら、ちつと私を睨めた。私も眼を瞬つてゐた。

「貴方はボルシアイア・ミリオナから洋服を一揃ひ取りましたね。だから金が要るでせう、金が欲しいでせう。僕の金の方があの人の金よりも宜ごさんすよ。二千留の上差し上げでもいい……。」

「然し何のために？何のためにです？糞！」と私は床を踏み鳴らした。彼は身體を私の方に延ばすやうにして強く、「貴方の妨害しないためですよ！」と叫んだ。

「でも僕はあり干ままで干渉なんかしませんよ。」私も呶鳴り返した。

「貴方が黙つてゐることを僕は知つてゐる。それは結構なことですよ。」

「僕は貴方の許可を得ようとは思ひません。僕のことほ僕自身で心配しますからね。然し僕はそれが自分の仕事だと考へると同時に、實際干渉するなんてことは僕の柄にありませんよ。」

「貴方は解つてゐる、解つてゐる、柄にないとはね！」

「何が解つてゐるんです？」

「柄にないことが……はつは！」と彼は俄かに言ひ出した。「彼には解りました、解りましたよ、貴方の

柄でないだらうつてことが。然し……差出ないつもりですか？」  
彼は瞬きをした。その瞬きの中には實に傲慢な、賤しい、嘲るやうな或物にさへ含まれてゐた。――  
明らかに彼は私にある事を臆測して、それを考へてゐたのだ。それは明瞭だつたけれども、その内容の意味には私は氣付かなかつた。

「アンナ・アンドレイヴナも矢張り貴方の御姉妹でしたね。」と彼は諷刺するやうに言ひ出した。

「そんなことは言はないで下さい。それに全く、アンナ・アンドレイヴナのことなど、一切止して下さいよ。」

「餘り威張らないで、今一分間だけ！ ね！ セルゲイ公爵は金を得れば誰にも彼にも金の用意をすることせう。誰にも、彼にも。解りましたか？」とステベルコフは強く方を籠めて言つた。

「ちや僕も公爵から金を貰ふと言ふんですから」

「今でも貴方は貰つてゐるぢやありませんか。」

「僕の貰つてゐるのは僕自身の金ですよ。」

「どうして貴方の金なんです？」

「だつて、それはヴァシロフの金ですからね、公爵はヴァシロフに二千の負債があるんです。」

「ちやヴァシロフの金で、貴方の金ぢやない。」

「ヴァシロフは僕の親父です。」

「いや、貴方はドルゴルキイで、ヴァシロフぢやない。」

「それは同じことです。」

さうだ、實際その時はそんな風な理窟を言ふことが出来た。が、それは同じことでないことを私は知つてゐた。それ程自分も愚かではなかつたものの、そんな理窟を言つたのは又しても例の「微妙な氣持」からであつた。

「もう澤山だ！ 僕には貴方の言つてゐることが解らない。それにまあよくもそんな愚問を連發しますね。」

「本當に解らないなんてことがあるかしら？ 故意とですか、故意とぢやないんですか？」とステベルコフは、私を穴の開く程瞞めながら、疑はしさうな笑を浮べて、ゆつくりと言つた。

「誓つて言ひますよ、僕には解らないんです。」

「セルゲイ公爵は誰にも彼にも金の用意をすることだらうと言ふんですよ。公爵はただ差出ないでさへおればいい。あの人を説服しようなどとしてはいけない。」

「本心で物を言つて呉れなきや困りますね。何故その『誰にも彼にも』を矢鱈に持ち出すんです？ 貴方がヴァシロフのために金を用意するといふ意味ですか？」

「貴方のためばかりでもなく、又ヴァシロフのためばかりでもない。……他にも人がありますよ、例へばアンナ・アンドレイヴナだの、その程度で貴方の妹さんのリザヴェタ・マカロヴナなどのやうな！」

私は眼を睜つて彼を睨めた。彼の氣だるさうな瞳の裡には、私に對する憐れみといった風な或物が俄かに現れた。

「貴方は解らないんですか。それなら尙更結構です！ それでいい、非常にいい、貴方に解らないといふことはね。頗る賞すべきことですよ……若し本當に解らないんだとしたならば。」

私は全くむしくしやして了つた。

「賤しい謔言と一緒に地獄に行つちまへ！ 狂人め！」と私は帽子を掴んで喚いた。

「賤しい謔言ぢやないからね！ それでお歸りになるか、然し御存知の通り又貴方は引き返して来るでせうよ。」

「誰が来るもんか！」

私は戸に駆け出した。

「貴方は又やつて来るでせうよ。その時には違つた話をしませうね、本當の話をね。二千留ですよ、覚えておらつしやい！」

二

彼は實に賤しい混亂した印象を私に與へた。それで私は外に出ると全然それを思ひ出すまいとした。セルゲイ公爵が私のことと、例の金の事とを彼に話したといふことは、考へても胸を針で刺す思がした。

「今日金を得て公爵に返して呉れよう。」と私は決心した。時間を氣にしながら時計を見ると、まだ二時にはなつてゐなかつた。それで訪問してもよかつた。さうでもしなければ三時にならない内に興奮のため疲れ切つたかも知れなかつた。私は姉妹のアンナ・アンドレイヴナ・ヴァシロフの處に行つた。少し以前、私は老公爵の處で、(老公爵が病氣の間のことだつたが)彼女と會つたことがある。老公爵が三四日私の會ひに行かないのを何とか思つてゐることは、私の良心を苦しめた。けれども私はアンナ・アンドレイヴナに信頼してゐた。——老公爵は最近極めて彼女に愛着を持つやうになつて、私に、彼女は自分を看護する天使だとさへ言つたことがある。そして序に述べて置くが、彼女をセルゲイ公爵に嫁かさうといふ考は、實際老公爵の頭にあつたのだ。そのことは私にも一度ならず、無論秘密にはあるが、老公爵が洩らしたものである。私はこのことをヴァシロフにほめかした。何故と言ふに、ヴァシロフは凡て、實際的生活の事件には實に無頓着だつたけれども、私がアンナ・アンドレイヴナに會つたといふ話をする時には何時にても特殊の興味を起すらしかつたから、——それに私は氣付いてゐたからである。老公爵の考を私がヴァシロフに言つた時、彼はこんなことを話して。アンナ・アンドレイヴナは自分の常識を持つてゐて、難局をも第三者の援助なしに切り抜ける能力を持つてゐると、ステベルコフの言つたこと、——老公爵が彼女に持參金を遣る氣だといふことは無論本當であつた。然しステベルコフがその持參金から何かを敢て得ようなどとどうして考へられるのだらう！ セルゲイ公爵は彼の背後から、彼を少しも恐れないと今朝嗚り付けた。屹度ステベルコフが書齋でアンナ・アンドレイヴナのこ

とを彼に實際話したのではなからうか？ セルゲイ公爵の立場に立つたならば、どんなにむしやくい、やるか、私は想像することが出来た。

私は最近度々アンナ・アンドレイヴナと會つてゐた。然し私の診問に就けて一つ奇妙なことがあつた。といふのは、——何時も私の訪問する度に、彼女は私のために準備をして、確かに私を待つてゐたのだ。然るに私がいざ部屋に這入つて行くと、彼女はきまつて、意外にも私が訪問した、全く偶然だといふやうな風を装つた。これを私は彼女の特性だと氣付いたけれども、それに係はらず更に彼女に惹き付けられるやうになつた、彼女は養女として、無論祖母アナリオトフ夫人と一緒に暮してゐたが、(ウアシロフは彼女の養育費として何物をも送らなかつた) 而も普通名のある婦人が寄食してゐる場合の描寫、例へばプウシユキンの「スベードの女王」中にある老伯爵夫人家の一人のやうな位置にはゐなかつた。それとは遙かに違つてゐた。

アンナ・アンドレイヴナは、さうした伯爵夫人その人以上の位置にゐた。彼女は家内で全然獨立して暮してゐた。——即ちアナリオトフ一家の人として同じ建物、同じ階段に住んではゐたけれども、彼女は全く離れた二室を占領してゐて、例へば私のやうな人間でも、その部屋に入つたり出たりする時に家族の誰とも出會はなかつたものである。彼女は自由に自分の好きな客を入れてゐた。そして思ひのままに時間を過してゐたのだ。

彼女が二十三歳だつたことは事實である。彼女は最近の社交界に出入することを殆んど断念してつ

たが、それは勿論、彼女をひどく可愛がつてゐるといふ噂のあるアナリオトフ夫人がその孫娘のためのお金を惜しんでゐたわけではなかつた。而も私が特にアンナ・アンドレイヴナに就いて好きなところは、如何なる場合にも彼女がおとなしい服装をしてゐて、且つ何かを、讀書か針仕事かをしてゐるからであつた。彼女の周囲には何となしに尼僧的な空氣があつたが、それを私は非常に嬉しく思つた。

彼女は夫として話し好きの方ではなかつたが、常に判断をして物を言ひ、如何にして耳を澄まして他人の話を聞くべきかを知つてゐた。このことには私は全然缺けてゐることである。顔に共通の點はないが、貴女はウアシロフを思はせますよと私が言ふ時、彼女は何時もちよつと顔を染めた。彼女は顔を染めることがよくあつたが、それは極めて一瞬の間で、且つ殆んど氣付かれない程度であつた。私は特にこの彼女の顔に現れる特殊性を好いてゐた。

彼女の前では私はウアシロフのことをウアシロフとは呼ばないで、常にアンドレイ・ペトロウイッチと呼んでゐた。これのために幾らか彼女の顔を赧めることは少くなつた。實際私はアナリオトフ家の人とかウアシロフのことを恥しく考へてゐるに相違ないと思つた、勿論それはアンナ・アンドレイヴナの態度から推察したに過ぎなかつたけれども。然し兎に角、そんな風な感じがあつた。

私は亦セルゲイ公爵のことをも彼女に話した。彼女は熱心に傾聴してゐて、私の想像するところに依ると、私が彼のことを話すのに興味を持つてゐたらしかつた。然し、何れにしても、セルゲイ公爵のこととは私自身が進んで話し出したのだが、彼女は彼のことについて何一つ訊くことをしなかつた。彼等二

人、セルゲイ公爵とアンナ・アンドレイヴナとの結婚に就いては強いて何も言はなかつたが、私は屢々さうなるだらうと思つた。何故と言ふにその考が私を惹き付けないでもなかつたからだ。然し其處、彼女の部屋には敢て言ふことの出来ない極めて多くの物があつたが、而も一方私は其處にゐて非常な氣樂さを覺えた。今一つ、彼女のことで私の好きな點は、彼女が實に立派な教育を受けて居り、多くの——而も眞の本を讀破してゐることであつた。實のところ、彼女は私よりも多くを讀んでゐた。

彼女は自分から進んで始めて私を招いた。私は當時でも、彼女が何時か私から何等かの消息を嗅ぎ出さうとしてゐるのかも知れないと氣付いた。ああ！如何に多くの人々が、當時あらゆる種類の消息を私から嗅ぎ出し得たことか！「然しこれは何のためだらう？ 彼女が自分を招いたのは單にそれだけのためではない。」と私は考へた。實際、私は彼女のために自分が役に立つならばと、それを明らかに喜んでゐたのだ。……そして私は彼女と對座してゐる時、常に自分の傍に姉がゐるやうに感じてゐた。とは言へ私たちが血族關係を持つてゐることは言ひもしなければ顔に現しもしないで、そんな關係など全然ないものやうに振舞つてゐたのだ。彼女と向ひ合つてゐると、そんなことを言ふことは絶対に考へ得られなかつたし、又、實際彼女をぢつと見てゐると、彼女が私たちの關係をまるで知らないのかも知れないといふ馬鹿げた考に打たれるのであつた。——それ程彼女は私に對する態度に於て、全く姉弟といふことを外視してゐたのである。

## 三

私は部屋に這入つた時、リザが彼女と一緒にゐるのを見た。これは私を殆んど喫驚させて了つた。彼女等が以前會つてゐることは、僕もよく知つてゐた。即ち彼女等は「赤ん坊」の件で會つてゐたのだ。

私は後章に於て、若し餘白さへあれば、如何なる場合にも氣位が高く微妙な心持を持つてゐるアンナ・アンドレイヴナが如何にしてその赤ん坊を見ようといふ狂恐的慾望に支配されてゐたが、又、如何にして其處でリザに會つたかを知らうと思つてゐる。然しアンナ・アンドレイヴナが嘗てリザを遊びに来るやうにと招くことがあらうとは夢にも思はなかつた。これは私にとつて愉快な驚きであつた。

然し言ふまでもなく私はそんな素振りを見せないでアンナ・アンドレイヴナに挨拶をした。そしてリザには暖い握手を與へながら、その傍に腰を卸した。二人共に忙がしさうに何かしてゐた。——卓子の上と二人の膝に廣々と擴がつてゐるのはアンナ・アンドレイヴナの夜會服で、整潔なものではあつたが、三度も着たので流行遅れになつてゐた。アンナ・アンドレイヴナはそれを直さうと考へたのだ。さうした仕事に掛けて、リザは「名人」だつた、本當の趣味をも持つてゐた。で、所謂「賢い婦人がたの鹿爪らしい會合」が開かれてゐる譯だつた。私はヴァシロフの言葉を思ひ出して笑つた。そして實際非常に浮々と氣持よかつた。

「今日は大層御機嫌でゐらつしやいますね、嬉しうございますよ。」とアンナ・アンドレイヴナは、眞面

目に、そしてはつきり言つた。彼女の聲は豊かた柔い中音で、何時も靜かに、ゆつくりと言ふのが癖であつた。さう言ふ時、彼女の眼は垂れて俯目となり、蒼白い頬には、幽かな微笑が漂つた。

「私が上機嫌でない時には、どんなに間の抜けたことを言つたりしたりするか、リザはよく知つてをりますよ。」と私も快く答へた。

「多分アンナ・アンドレイヴナも御存知でせうよ、そのことはね。」と、意地悪のリザは私を揶揄した。可愛い者よ！ 若し私がある時彼女が何を思つてゐるのかを知つてゐたならば！

「今何をしてゐらつしやいますの？」アンナ・アンドレイヴナは訊いた。(私は彼女がこの日自分に來いと言つて招いたことを言つて置く)

「僕は此處に坐つてゐながら、何故何時も僕は貴女が針仕事をしてゐらつしやるよりも本を讀んでゐらつしやる方が氣持いいか、それを不思議に考へてゐますよ。さうだ、本當に針仕事は貴女に似合ひませぬわ、何にしても。その點で、アンドレイ・ペトロウイツチに同意します。」

「貴方はまだ大學に這入らうといふ氣にお成んなさらないですね。」

「以前お話ししたことを忘れないでゐて下さるのは有り難う。それで今に身のことを思ひ出して下さる。然し……大學のことに就いては、僕は考がはつきりしてゐないので……それに僕自身の計畫も持つてゐますしね。」

「この人は秘密を抱いてると言ふわけなんですわ。」とリザが口を入れた。

「冗談をお止し、リザ。或賢い方が先日からいふことを言つたよ、過去二十年間の吾々の進歩的運動の結果、吾々は何よりも吾々の無教育であることを證明したのだと。それは亦大學の連中に向つて言へることだよ。」

「それはお父さんが言つたことだわ、たしかに。貴方は時々お父さんの言つたことを受賣りすることがあるんですね。」とリザは言つた。

「リザ、お前は僕が自分自身の精神を持つてゐないと思つてゐるらしいね。」

「今日では、聰明な方の話を聞いて、それを繰り返すのは結構なことですよ。」とアンナ・アンドレイヴナは一寸ばかり私の肩を持つて言つた。

「さうですとも、アンナ・アンドレイヴナ、私は暖い氣持で用意した。現在の露西亞の位置を思はない人間は愛國者ぢやありませんよ。僕は稍々特殊な見地から露西亞を考へてる者です。——吾々は韃靼人の侵入を経、その後二世紀間の奴隸生活を経て參りました。言ふまでもなくこの二つが吾々の趣味に合つてゐたからなのです。今や吾々には自由が與へられました。吾々は自由を以て進まなければならぬのです。が、吾々は如何にすべきかを知つてゐるでせうか？ 自由も亦吾々の趣味に合ふでせうかどうか？ これが疑問だと思ひますよ。」

リザはさつとアンナ・アンドレイヴナの方に眼を遣つた。と、アンナ・アンドレイヴナは直ぐに眼を伏せて、何かを探し始めた。私はリザが自分自身を制しようと努力してゐるのを見た。が、不意に彼女と

私の視線がぱつと出會つた。——彼女は發作的に笑ひ出した。私はかつとした。

「リザ、お前は許せない人間だね！」

「勘忍して下さい！」と彼女は不意に、笑ひを止めて殆んど悲しさうな聲で、「神様は私がどう思つたか御存知ですわ……。」

その聲には涙に近い顔へを帯びてゐた、私はひどく恥しくなつて、彼女の手を執つてそつと暖く接吻した。

「大層よくなさいますね。」アンナ・アンドレイヴナは私がリザの手に接吻するのを見て優しくかう言つた。

「今度はお前の笑ふのを見て僕は非常に嬉しいよ、リザ。」と私は言つた。「本當だとお思ひになりますかアンナ・アンドレイヴナ、最近僕がリザと會ふ時、何時も彼女は變な眼をして僕に會釋するんですよ。」

その眼は「何か發見しましたか？ あらゆる事が皆正しいんですか？」と訊いてるやうに僕には見えるんです。本當にそんな風なところがリザにはありますね。」

アンナ・アンドレイヴナは彼女を鋭く、ちつと見廻した。と、リザは俯向いた。けれども私は、彼女等二人が私の想像し得る以上に親密になつてゐることを、極めて明瞭にすることが出来た。さう思ふと私は愉快であつた。

「貴女は今、僕がよくするとおつしやりましたね、貴女は本當とはお考へになりますまいが、アンナ・ア

ンドレイヴナ、彼女と會つてゐると、僕がどんなにより、良く一變するか、そして、その貴女と會つてゐるのがどんなに嬉しいことであらう。」

「私は氣持よくさう言つた。」

「今さうおつしやるのは私も大變嬉しく思ひますよ。」

アンナ・アンドレイヴナは特別の意味を以て答へた。此處で言つて置かねばならぬが、彼女は昔から私のやつてゐるやうな輕卒な態度或は、私の陥つてゐる深さから口を利いたことがなかつた。それ故、これは今、さうした問題に於いての最初の暗示とも言ふやうな或物であつた。そして私の心は前よりも熱く彼女に惹き寄せられた。

「御病人は如何ですかしら？」と私は訊いた。

「大變よろしいんです。起きましてね、昨日は馬車に乘りましたし、今日もさうなんですのよ。貴方は今日あの方にお會ひにならないといふつもりではごさいますまいね？ あの方は熱心に貴方に會ひたがつてゐらつしやいますよ。」

「僕は大變失禮ばかりしました。が、今は貴女が看護なすつて僕の代りをしてゐらつしやる。あの方は氣持のいい瞞し手なんで、僕を見棄てて貴女の方に入らつしやいましたね。」

彼女の顔には眞面目な表情が現れた。それは恐らく私の言葉が餘りに輕卒だつたからであらう。

「僕は今セルゲイ公爵の處に行つて参りました。」と私は呟いた。「それで僕は……おお、ついでだが、リ



「ザ、お前は今朝ダリア・オニシモヴァに會つたかね、え」

「ええ、」リザは顔を擧げないで短くかう答へて、「ですが、貴女は毎日御病人の御見舞をしなさいませんが、してゐらつしやるでせうね、え？」と突然訊いた。恐らく何かを言ひ出すためであらう。

「うむ、會ひに行くのは行くんだが、會へないんだ。」と私は笑ひながら、「這入つて行つて左へ曲るんでね。」

「老公爵も貴方がカテリ・ニコラエヴァに度々會ひにゐらつしやることを氣付いてお出ですよ。昨日もさう言つて笑つてゐらつしやりましたわ。」アンナ・アンドレイヅナが言つた。

「何で、何で笑つたんです？」

「冗談をおつしやりましたの。あの方のやり方は貴方も御存知でせうね。——反對に、若く美しい女が貴方位の年輩の青年は與へる唯一つの印象は、憤慨だけだらうと、かうおつしやりました。」

アンナ・アンドレイヅナはそれと一緒に俄かに笑ひ崩れた。

「お聞きなさい……老公爵の言葉としては餘り鋭い言ひ分ですね。僕の考へるに、これはあの方の言葉ぢやなく、貴女があの方に言つたんぢやありませんか。」と私は叫んだ。

「何故？ いいえ、あの方がさうおつしやりましたよ。」

「成程、然し考へて御覽なさい、——若い美しい女がその青年に氣を引かれたとしたならば。たとひその青年が詰らない人間で、隅つこに立つてをり、ちつぽけな子供のやうに思はれてをるとしても。又、

その女がその周圍に群る雲のやうな讀夫者の中から、不意にその青年を選んだとしたならば。——その場合はどうでせう？」と私は大膽に挑み掛るやうに訊いた。頭の中は渦を捲いてゐた。

「ぢや貴方は立派に役に立つ方なんでせう。」とリザは言つた。

「役に立つ、いや、僕は役には立たないさ。それは嘘だと僕は信じる、若し一人の女が僕の行く前を横切つたとすれば、その女は必ず僕の後を附いて来るよ。僕は僕の道以外に顔を外向けるつもりはないんだ……」

リザがすつと後になつて話したのを記憶してゐるが、それに依ると、この時私は、この言葉を頗る妙な風に一生懸命になつて、而も深く考へ込んだ様子で話したといふことである。そして同時に實に馬鹿げてゐて笑はないでは居れなかつたと言ふのであつた。實際アンナ・アンドレイヅナは又笑ひ出したのだ。

「お笑ひなさい、お笑ひなさい、」と私は昂然として叫んだ。と言ふのは、その全體の話とその調子とが私には愉快だつたから。「貴女の笑聲を聞くのは僕にとつて愉快です。僕は貴女のお笑ひになるのが好きですよ、アンナ・アンドレイヅナ！ 貴女が全く靜かにしてゐたかと思ふと不意に笑ひ出すのは特別のものですね。それがあつと言ふ間なんですからね、つい前でも、何が貴女の顔に現れてるか想像も出来ませんよ。僕はモスコウで或婦人を知つてゐましてね、何時も隅つこに坐りながら、その人を遠方から見守つてゐました。その人は貴女のやうに綺麗でしたが、然し貴女のやうな笑ひ方を知りませんでした

顔は貴女の顔位に魅力を持つておましたけれど、笑ふと全く打つ壊して了ふのです。貴女が特に人を惹き付けるのは……その有力な資格を持つてゐらつしやるからですね。……それを僕は以前からお話しようと思つてゐました。」

「このモスコウの婦人のことを話して「その人は貴女のやうに綺麗でしたが」と言つた時に、私は全く正直だつたとは言へなかつた。私はその言葉が自然に、自分でも氣付かないで出たといふ風を装つた。――私はさうした「無意識の」言葉の方が、最も洗練されたお世辭よりも女に喜ばれることをよく知つてゐたのだ。で、アンナ・アンドレイヴナは或は氣恥しかつたかも知れないが、この言葉が彼女を嬉しがらせたことは私にも解つた。そして實を言へば、その婦人といふのは私が拵へたものなのだ。モスコウにゐる時、夢にも私はそんな婦人を知つてはゐなかつた。それは單にアンナ・アンドレイヴナへのお世辭として、又彼女を喜ばさうとして話しただけのことである。」

「全く貴方は、と彼女は人を惹き付けるやうに笑ひながら、「この二三日、誰か綺麗な女の方の感化を受けてゐらつしやいましたね、そんな風に思へますよ。」

「私は我を忘れて……何かを喋らうとし掛けた。……然しそれを制した。」

「ついでながら、つい先日貴方はカテリナ・ニコラエヴナのことを、ひどく厭な氣持でお話になつたぢやございませんか。」

「兎に角、僕があの人を悪く言つたとします。然し、と私は眼を輝かしながら、「それは僕が悪いんぢや

ありません、あの人に就いての恐ろしい悪口、――つまりあの方がアンドレイ・ペトロウィッチの敵だといふ世間の悪口がいけないんですよ。アンドレイ・ペトロウィッチのことでも實に厭な噂がありますからね、彼が彼女に戀しただけの、結婚の申込みをしただけの、さうした種類の馬鹿げ切つた噂が。カテリナ・ニコラエヴナが夫の生きてゐる頃、寡婦になり次第セルゲイ公爵と結婚しようと思つて置きながら、後になつて、その約束を實行しない、といふ噂も矢張り、他の馬鹿々々しい噂と同様、實に不都合な話なんです。然し、全然さうぢやないといふことを、つまり全然冗談だつたといふことを僕は直接に聞いたんですよ。直接に知つてゐるんです。實を言ふとあの方が外國にゐた頃、ふさげ氣分で公爵に「多分將來は……」と言つたことだけは事實ですが、無論これは冗談の範圍を一步も出てはゐないんですよ。公爵自身でも、その約束を當てになんかしてゐなかつたことは僕はよく知つてゐます。そして又實際さうしようと思つてゐなかつたんですね。」

かう言ひながら少し考へて「セルゲイ公爵はずつと違つた考を持つてゐたらうと僕は思ひますよ。」と皮肉に私は附け足した。「ナスチョキンが今朝セルゲイ公爵のところへ、カテリナ・ニコラエヴナがピユリン男爵と結婚することになつてゐるのだと話しましたが、公爵はその消息を平氣で聞いたに相違ないと思ひますよ。貴女もさうお考へでせうね。」

「ナスチョキンがセルゲイ公爵の處にゐまして？」とアンナ・アンドレイヴナは眞面目に力を籠めて、見たところ驚いた風に言つた。

「ええ、おましたよ。上流の、尊敬に値する人らしいですね……。」  
 「ナスチヨキンが公爵に、そのピユリンとの結婚問題を話したんですか？」  
 急に興味を起したと見えて、アンナ・アンドレイヴナはかう訊いた。  
 「結婚のことやありません。さうなるだらうといふこと、——つまり世間の噂を話したんですね、至る處の奇聞でその噂が問題になつてると言ふのです。僕に言はせると、全く愚にもつかぬことですがね。」

アンナ・アンドレイヴナは一寸思索したが、又俯向いて針仕事を始めた。

「僕はセルゲイ公爵が好きなんですよ。」と私は咄嗟に暖い氣持になりながら附け足した。「無論あの人は間違つてもゐますかね、そのことは以前貴女に話したこともありすが、殊に或一つの思想に熱し過ぎる傾向を持つてゐますね……が、あの人の間違ひは、その精神の寛大なことを示してゐるんだと考へますが、如何でせうね？」と言ふものの僕は今日あの人と喧嘩とまでは行かないが言ひ合ひをしましたよ。  
 「あの人の意見に依れば、名譽のことを論ずるならば、論ずるその人が先づ名譽ある人間でなくてはならぬ、若しさうでないならば、その人間の論ずることは凡て虚偽だと、かう言ふのです。さあ、これが果して理に合つてゐるでせうか？ 而もこれは誠實、義務の高い標準を、又、あの人の魂の中の眞實をよく現してゐるものです、さうぢやありませんまいかね？……ああさうだ、今幾時でせう？」  
 私は不意にひよいと柱時計を見上げながら訊いた。

「三時十五分前。」と彼女は時計を眺めて靜かに答へた。私がセルゲイ公爵のことを話してゐる間中、彼女は伏目になつて、どちらかと言へば、するい、然し魅力のある微笑を浮かべながら耳を澄ましてゐた。彼女は何故私が彼を讀めるか、その譯を知つてゐた。リザは針仕事をするので顔を伏せて聞いてゐるきりで、先刻から話の仲間には這入らなかつた。私は沸湯を注がれたかのやうに立ち上つた。

「何かの御約束がございましたの？」

「ええ……いいえ……遅れましたが、兎に角お暇いたしましたせう。たつた一口だけ言はせて下さい、アンナ・アンドレイヴナ、」と私は情を籠めて話し始めた。「今日は非ともお話しなきやならないことなんですよ！ 僕は度々貴女の御親切と僕を招いて下さつた氣持とを有難く思つてゐる、といふことを打ち明けたいんです。貴女と付き合つたことは、僕に何よりも強い印象を與へて呉れました。……貴女の部屋にゐると僕は、言はば精神的に純化されて了ふんです、全くですよ。つまり貴女と向ひ合つてゐますと、悪いことを言ふのは無論、悪い考さへ頭に浮かんで來ないので。そんなものは貴女の前では影を消して了ふので、若し貴女と會つた後で何か悪いことを思ひ出すと直ぐにそれが恥しくなつて内心眞赤になり俯向いて了ふのです。それに御存知ですか、僕は妹が今日貴女と一緒にゐたことが特に嬉しいんですよ。……そのことは貴女の氣持の寛大なことを現してゐますし……それにそんなにいい態度を……一日に言へば貴女は——思ひ切つて言はせていただけるならば、それ程姉妹らしい或物を現してお出でしたよ……」

かう私が言ふと、彼女は席を立つて、益々眞赤になつた。然し突然、針仕事の綿が變な風に亂れたので、それに何か喫驚したらしく見えた。そして慌しく私を遮つて言つた。

「本當に、私は貴女の氣持を心から有難いと思つて居ります。……そのことはずつと昔から言葉には理しませんが、よく存じておりましたの……。」

彼女はどぎまぎしながら口を噤んで、私の手を抑へた。彼女に隠れてゐるリザは不意に私の袖を引つ張つた。私は暇乞ひをして部屋を出た。が、リザは次の部屋で私に追ひ付いた。

## 四

「リザ、お前は何故僕の袖を引つ張つたんだね？」と私は訊いた。

「あの人は恐ろしい、するい人なんです。貴女の言ふやうな値打ちのある方ぢやありませんよ……あの人は貴女から何か探り出さうとして引き留めてるんですものね。」

リザは早口に、むつとした小聲で呟いた。私はまだ彼女の顔にさうした氣色を見たことがなかつた。

「リザ、神に賭けて、あの人は僕の言ふ通り愉快な女だよ！」

「さうですか。ぢや私が厭な女です。」

「お前どうかしてるんぢやないか？」

「私は賤しい女ですとも。あの人は多分愉快な方で、私は賤しい女なんでせうよ。それで澤山、うち

やつて置いて下さい。が、よく耳に入れて下さいませよ、お母さんは或事に就いて貴方に願はうと思つてゐらしたんですけれど、どうしても口に出すことが出来なかつたとおつしやいましたよ、アルカアデイ！ お止めなさい、賭博を。ね、お願ですわ……お母さんも……」

「リザ、僕は知つてるよ。が……これは哀れな臆病だと知つてはゐるが……然し、何でもないことだよ、本當に！ お前も知つてるね、僕が愚かにも借金してゐることをね、それで僕はただその借金を返したいんだ。儲けることは出来るつもりだ。何故と言ふに、今までは氣まぐれに、冗談半分にやつてたんだからね、馬鹿のやうに。然しこれからは一留毎に顛へるだらうよ。……若し勝たなければ僕ぢやないね。誓つて言つて置くが、僕は止めようと思つて止められぬ程に弱い人間ぢやないよ。僕は金を返して、それからお前と一緒に暮さう。で、お母さんに言つて置いてくれ、お前と何時も暮すやうになるだらうと……。」

「今朝の三百留は何かになりましたでせう！」

「どうして知つてる？」と私は喫驚して訊いた。

「ダリア・オニシモヅナが今朝みんな聞きましたの……。」

然しさう言ひ掛けて彼女は私を帷の後に押し込んだ。其處は所謂「燈籠」と言はれてゐる部屋で、周圍に澤山窓のついた小さな圓形の部屋であつた。おやと思ふと同時に私はある聲、聞いたことのある聲と、拍手のからんからんと鳴る音と、これも矢張り聞き覚えのある靴音とを耳にした。

「セルゲイ公爵だね、」と私は囁いた。

「ええ」彼女も囁いた。

「何故そんなにびくびくしてるんだね？」

「何でもないの。あの人と會ひたくないだけなんです。」

「お前、公爵がお前にふさげようとしてるからといふ意味ぢやないだらうね？」と私は笑ひながら、「さうなら僕が言つて上げよう。これから何處に行くつもり？」

「参りませう、貴方と一緒に行くわ。」

「さよならを言つてゐないだらう？」

「言つたわ。外套は廣間に。」

二人は部屋を出た。階段まで来て私は不圖思つた。

「リザ、どう思ふね、セルゲイ公爵は結婚申込をしに來たのかも知れないよ。」

「い……いいえ、……あの人に申込みはしないでせう……」と彼女は、小聲ではあつたが、きつぱりと言つた。

「お前は知るまいが、リザ、僕は今日公爵と口論したけれど（そのことはもう話したね）本當にあの人は好きさ。そしてあの人の成功するのを祈つてゐるんだよ。僕たちは幸福な時實に善良なものだ……誰でもあの人が澤山の美點を持つてゐることを知つて、……それに人間らしい氣持もある……で、アンナ。」

アンドレイヅナのやうな強い賢い女の手に這入ると、あの人は彼女の高さまで昇つて幸福になるだらうよ。僕は時間がないんで残念だが、……少しばかり一緒に歩くとしよう、是非話しいことがあるから……」

「いえ、行らつしやい、私この道を参りませんから。食事には入らつしやいますか？」

「行くつもり。約束通り行くつもりだ。リザ、例のステベルコフといふ賤しい動物のやうな男がね、セルゲイ公爵のやることに對して妙な力を持つてゐるんだよ……借用證書でね……簡単に言ふと、あの男は

自分の意のままに公爵をして實にひどい壓迫を加へるんだね。で、セルゲイ公爵は卑屈になつて了つて、それを免れるためには、アンナ・アンドレイヅナに結婚の申込みをするより外に道がないといふ始末になつたんだ。それでね、本當にアンナ・アンドレイヅナには、馬鹿々々しいけれども警告して上げなきやならないと思ふよ。後になると正しいことがすつかり解るだらうからね。然しお前はどう思ふね、あの人は申込みを拒絶するだらうか？」

「さよなら。私遅くなりましたから。」とリザは呟いた。彼女の顔の、その瞬間の表情には實に憎らしい色が浮んでゐた。私は思はずかつとして呶鳴つた。――

「リザ、何だ、それは？」

「私、貴方に向つて怒つてるんぢやありませんよ。ただ賭博をしないで……」

「ああ、そのことを言つてるのか。しないつもりだよ……」

「今おつしやいましたわね」僕たちは幸福の時に」云々と。して見ると今はひどく幸福なんですか？」

「恐ろしい位だよ、リザ、恐ろしい位に幸福だよ！ ああ、何故三時過ぎなんだろうね！ ……さよなら、リザ。女を待たして置いていいものかね、リゾツチカ。そんなことをしては許せないだろう？」

「女が貴方を待つてるといふ意味ですか？」とリザは幽かな微笑を浮べて言った。その微笑は生氣のを、顔へるやうなで微笑であつた。

「縁起のために手をお貸し。」

「縁起のため？ 私の手を？ いやです。何のためでもいやですよ。」

彼女は急いで歩き去つた。そして彼女はその言葉を實に熱心に叫んだのだ。私は櫓の中に飛び込んだ。さうだ、さうだ、これが「幸福」であつた。そして何故私が土鼠のやうに盲目で、私自身のこと以外には眼もなく理解もなかつたかといふ主な理由であつた。

#### 第四章

さて私は全く自分の物語をするのが恐ろしい。それは凡て遠い昔に起つたことで、今は私にとつて曇氣樓のやうに思はれる。そんな婦人が、當時の私のやうな賤しい頑固な子供と會ふ場所を約束するなどといふことが果して有り得たらうか？ 而も私には彼女（カテリナ・ニコエツナ）が約束したやうにも思はれたのだ。

リザと別れて私は氣もそぞろになつて櫓を急がせた。實際私は狂氣したのではないかと思つた。この會合を彼女が私に約束したといふ考は實に明らかな間違ひだと不意に思はれたりした。私にとつてそれは信じられないことであつた。それにも係はず私はそれを少しも疑はなかつたのだ、彼女が私と逢引しようといふ約束をしたんだと信じ切つてゐた。それが明らかに間違ひであると思はれば思はれるだけ私は無我夢中にそれを信じたのだ。

もう三時を過ぎてゐるといふ事實が私に氣になり出した。

「會ふ約束がしてある以上、どうして遅れたのなんか出来よう。」と私は考へた。馬鹿々々しい考、例へば「どんな風な態度を執つたらよからうな、大膽にやつつけるか、それとも臆病にしてるがいいか？」などといふ考も心に浮んだ。然しかうした考はほんの一寸心頭を掠めたきりであつた。何故ならば、私は明言することは出来ないが内心に眞に價值ある或物を持つてゐたからである。

その前の晩、彼女が私に言つたことは「明日の午後三時に、私タチアナ・バヴロツナのところにゐますよ」といふ唯これだけの言葉であつた。これだけの言葉を以て私は彼女がタチアナ・バヴロツナのところで私と逢引しようといふ意味だと考へてゐたのだ。然し、第一に、彼女は何時も單獨に彼女自身の部屋で私の訪問を受けてゐたし、又其處で彼女は言ひたいことは何でも言へるのだ。従つて何もわざわざタチアナ・バヴロツナのところにまで出掛けて行つて私と會ふ必要はなかつたのだ。すると、何故彼女は會ふ場所をタチアナ・バヴロツナの家と指定したのだらう？」

第二にかういふ疑問もあつた。——果してタチアナ・バヴロヅナは家にゐるだらうか、留守だらうか？ 若し其處が會ふ約束の場所ならば恐らくタチアナ・バヴロヅナは留守だらう。それにこんな約束をするのにタチアナ・バヴロヅナに豫め相談しないであらう。それともタチアナ・バヴロヅナには内証かな？——そんな考が無茶苦茶に頭に浮んで来た。

で、實際彼女は單にタチアナ・バヴロヅナのところに行くつもりだつたのかも知れない、それで私に前の晩、明日の三時に行くと、大した意味もなしに言つたのかも知れない。然し私は彼女の言葉を自惚れて誤解したのだ。而も實際それは實に偶然に、さつさと、且つ極めて退屈な訪問の後で言はれたことなのだ。私は或理由があつて一晩中馬鹿をしつづけた。坐つて口訥りながら、内心は腹立たしくても、何と言つていいか解らなかつた。そして恐ろしくびくびくしてゐた。後で知つたことであるが、彼女はその時何處かに出掛けようとしてゐたので、私が暇乞ひをして立ち上つた時には、たしかにぼつと安心したのだ。——そんなことが次々と思ひ出されて来た。遂に私は、行き着いたら先づ呼鈴を鳴らさうと意を決した。と、料理番が戸を開けて呉れるだらう」と私は空想した。

「そして俺は訊くんだ、タチアナ・バヴロヅナはゐらつしやるかつて。若しゐなかつたら、確かに逢引の場所なんだ。」と。然し、ああ、私は少しも怪しむことをしなかつたのだ！

階段を駆け上つて、戸口に達した時、凡ての心配は消えて了つた。料理番が戸を開けて、冷淡に、タチアナ・バヴロヅナは留守だと吐き出すやうに言つた。然し誰か他の人があるだらう！ 誰かが歸りを

待つてゐるだらう？」と訊きたかつたが、それは止して、少し待つてゐるからと私は言つた。——私は皮の外套を脱いで部屋の扉を開けた……

「カテリナ・ニコラエヅナは窓側に坐つてタチアナ・バヴロヅナを待つてゐた。」

「留守でせう？」と彼女は私の姿を見ると同時に不快な調子になつて訊いた。そしてその顔と聲とは、私の豫想とは全然相違したもので、思はず私は戸口に立ち止つて了つた。

「留守つて、誰が？」と私は呟いた。

「タチアナ・バヴロヅナがですよ！」だつて、私は昨日貴方にお願ひして置いたちやありませんか、今日の三時に来るからとタチアナ・バヴロヅナに傳へて下さつて。」

「僕は……僕はタチアナ・バヴロヅナに會ひませんでしたもの。」

「お忘れになつたんですか？」

私は全く壓迫され切つて腰を卸した。さてはそんな意味だつたのか！ 殊に悪いことに、これは二と二と掛けて四になるといふ以上に明白なことである。

「彼女に傳へて呉れと僕にお頼みでしたかね、覚えてゐませんよ。又實際お頼みになりはしなかつたんだ。ただ、三時に此處にゐますよとおつしやつたきりだ。」

私は溜らなくなつてさう呟鳴つた。そして眼を外らした。

「おお！」と彼女は不意に叫んだ。「けれど若し私が此處に来ることを承知してゐながら傳へるのをお忘

「それになつたのなら、何で貴方は此處に入らしたの？」

私は顔を擧げた。彼女の顔には嘲笑だの憤怒だのの影は少しもなくて、單に華やかな快活な微笑と、平生よりも悪戯氣のある氣色とが見えるきりであつた。實際彼女の顔には如何なる場合でも、殆んど子供に近い悪戯さうな表情が浮んでゐたのだ。

「そら御覽なさい、貴方は私の捕虜になつたでせう。で、今何をおつしやるつもりなの？」と彼女の顔全體が訊いてゐるやうに思はれた。

「私は答へたくなかつたので又伏目になつた。三十秒ばかり沈黙が続いた。

「今お父さんの處から入らしたの？」彼女は訊いた。

「アンナ・アンドレイヴナの處からです。無論ニコライ・イワニツチ公爵に會ふたのぢやありませんが、そのことは御承知でせう？」と私は附け加へて言つた。

「アンナ・アンドレイヴナの處で何事かありまして？」

「僕が氣でも觸れたやうに見えるとおつしやる意味ですか？」それにしたつてアンナ・アンドレイヴナの處に行く以前から、僕は氣でも觸れてるやうに見えてゐたんですよ。」

「其處で正氣になつたぢやないんですか？」

「ええ、正氣になりませんでしたね。それどころか、貴女がピュリン男爵と結婚なさるつて噂を聞きましてよ。」

「あの人が貴方に話したんでせうか？」

彼女は急に興味を起して訊いた。

「いや、僕があの人に話したんです。僕はナスチヨキンが今朝セルゲイ公爵に話してゐるのを聞いたんですよ。」

私は依然として伏目になつたまま彼女を見なかつた。彼女を見るといふことは、光明と欲望と幸福とに浸されるといふことを意味する。然しこの場合、私は幸福になりたくなかつたのだ。胸の奥底まで癩に觸つて溜らなかつた。で、一瞬の間に私は恐ろしい決心をした。それから自分でも何を言つてゐるか解らなかつたが、どんとどんと喋り始めた。私は呼吸切れがして口訥つてゐたが、それでも思ひ切つて彼女の顔を眺めた。心臓の鼓動が高くなる。私は或ことを變な風に、然し矛盾だけはしないで喋り出した。初めの内、彼女は、眞面目な、黙許するやうな微笑を浮べて傾聴してゐたが、(その微笑は何時までも消えなかつた。)次第に意外といふ表情が見え、次には驚愕した表情が現れた。微笑は矢張り續いてゐたけれど、それも時々顫へを帯びてゐた。

「どうなすつたんです？」

彼女が顔へてゐるのに氣付いて私は訊いた。

「私、貴方が恐ろしい。」と彼女は狼狽して答へた。

「ぢや何故お逃げになりませんか？ タチアナ・バヴロヴナは留守ですよ。留守だと承知してゐらつしや



るなら、立つてお歸りにならなきや——」

「私、待つてゐたかつたんだけれど、これでは……本當に……」

彼女は立ち上らうとした。

「いや、いや、まあ坐つてゐらつしやい。」と私は止めながら「そら、又顔へてゐらつしやいますね。が貴女の微笑は顔へながらも浮んでゐる。……何時も笑つてゐらつしやいますね。それ、又笑つてるぢやありませんか……。」

「まるで狂人のやうな物言ひをなさるのね。」

「ええ、さうなんです。」

「私は恐ろしい……」彼女は又呟いた。

「何が恐ろしいんです？」

「貴方が壁を打ち壊しはしないかと思ひましてね……」

彼女は矢張りびくびくしてゐたが、又かう言つて笑つた。

「貴女の微笑は溜りませんよ……！」

私は再び喋り出した。向う見ずにやつた。恰も何物かに背後から推されてゐるかのやうに。そんな風に彼女を相手に喋つたことは嘗てなかつた。私は極端に臆病だつた癖に、彼女の顔の傍で喋り続けたことを記憶してゐる。

「もう貴女の微笑は溜らない！ 何故僕はモスコウにゐた頃でさへ、貴女を、悪意のある尊大な、毒々しい應接間的の言葉のやうな人間と考へてゐたんでせう？ さうです、モスコウを去る前でも、貴女のことをマリ・イワノヅナによく話して、矢張りそんな風な人間に相違ないと想つてゐたんです。……マリ・イワノヅナを覚えてゐらつしやいますか？ 貴女はあの人の家にゐらつしやいましたね。此處へ来る途中で、僕は一晚中汽車の中で貴女の夢を見つづけました。貴女がゐらつしやる前の一ヶ月間、僕は貴女のお父さんの書齋で、貴女の寫眞を讀めてゐたものです。そのために何にも出来ませんでしたよ。貴女の表情は子供らしい悪戯と限りない善良さとを現してゐます。さうだ、僕は貴女に會ひに来て何時もそれに驚いて了ふんですよ。ああ、そして貴女はどうすれば偉く見えるか、どうすれば一目で惱殺するかを知つてゐらつしやる。僕は覚えてゐるが、貴女がモスコウからお着きになつた時に、貴女のお父さんの家で、どんなに僕を御覽になつたか……僕もその時貴女を眺めました。然し若し僕がどんな風にして部屋を出て行つたか、貴女が、どんな恰好をしてゐらしたか、それを訊かれるとお答へすることが出来ないのです。——貴女の背が高かつたか低かつたかさへも言ふことが出来ないのです。つまり貴女を見るが早いか僕は盲目になつて了つたんですよ。貴女の寫眞は少しも貴女に似てはゐませんね。——貴女の眼は暗くはなく明るい、ただ長い睫毛が暗く見せるのです。貴女は肥えて、背は高くもなく低くもなく、田舎娘のやうな健康な皮膚をしてゐらつしやる。顔も全く田舎的と言つていいか、兎に角田園美を持つたお顔ですね。——どうか怒らないで下さい。實にそれがいい、それがいいんですよ、同味を帯

びた、蒼微色の、鮮やかな、大膽な、笑つてゐる、そして……恥ぢらふ顔！ 本當に、恥ぢらふ顔、カテリナ・ニコラエヴァ・アマコフの恥ぢらふ顔ですよ！ 恥ぢらひながら清いのです。清いと言ふよりも——さうだ子供らしい！ それが貴女のお顔です！ 僕は始終それに驚いて自問して來ました、女といふものはそんなものだらうかと。今は貴女の非常に賢くてゐらつしやることを知つてゐますけれど、實を言へば初めてお目にかかつた時には、間抜けではないかと思ひましたよ。貴女は明るい生々とした氣分を持つてはゐらしても、何等飾るといふことをなさないから……。その他僕の好きなのは、何時も浮んでゐるその微笑です。——それは僕の極樂ですよ！ 貴女の靜かなところも好き、穩やかに滑らかに殆んどのろのろとお話になる調子も好きです。足下の橋が墮落したとて、屹度貴女は平氣で何か靜かにゆつくりとお言ひになることだらう、僕はさう思ふんです。……僕は傲慢と情熱との人として貴女を考へてゐました。それに過ぐる二月の間、貴女は學生が學生に物を言ふやうな調子で對して下さいました。僕はそんな顔を貴女が持つてゐらつしやらうとは夢にも思つてゐなかつた。——金髪の下影の類のやうに低い額、然し柔らかな、大理石のやうに純白な顔です。胸は高く、足取りは輕快でゐらつしやる。實に貴女は美しい、而もそれを誇つてゐらつしやらないんです。そのことを僕はやつと信じるやうになつたんですよ。長い間信じてゐなかつたんです！」

この亂暴な雄辯を彼女は眼を腫つて聽いてゐた。そして私の顔へてゐるのに氣付いた。三度も四度も彼女はその手袋を嵌めた手を恰好よく舉げて「お止めない」といふ意味を傳へた。然しその度に彼女は

喫驚してどぎまぎしながらそれを引つ込めた。時は少しばかり身體を引いたりした。二三度微笑が彼女の顔を明るくしたが、直ぐに彼女は眞赤になつた。そして最後には全く恐れて眞蒼な顔色になつてゐた。私が口を閉ぢると同時に彼女は手を差し出して、それでも相變らず落ち付いた聲で、然し哀願の調子を帯びながら言つた。

「そんなことをおつしやつてはいけません。……そんなことをおつしやることは出來ません……。」

そして突然彼女は襟卷だの黒の暖手套だのを、ゆつくりと寄せ集めて席を立ち上つた。

「お歸りになるんですか？」と私は聲を掛けた。

「私本當に貴方が恐ろしい。……失禮な方だ……。」

彼女は憐れむやうに咎めるやうに一語一語區切りながら言つた。

「まあ待つて下さい、決して亂暴しやしませんから。」

「でももう亂暴なすつてるぢやありませんか。」と彼女は溜らなさうに笑ひ出した。「私を歸して下さるかどうかも怪しいものです。」

「そして彼女は實際私が歸さないだらうと思つてゐるらしかつた。」

「扉は僕が開けて差し上げますがね、まあ言はせて下さい、僕は恐ろしい決心をしたんですよ。で若し僕の心に光明を與へてやらうといふ氣持があたりでしたら、兎に角坐つて、たつた二言だけ聽いて下さい。然しそれもお厭ならお歸んなさい、扉は開けて差し上げますからね！」

彼女は私を腫めてゐたが又腰を卸した。

「婦人の方に依ると怒つて歸るかも知れませんね。それに貴女は坐つて下すつた！」私は興奮してさう叫んだ。

「貴方はこれまでそんな風におつしやつたことはありませんね。」

「僕は何時か臆病でびくびくしてたんです。今はそれに何と言つていいか解らなくなりましたよ。貴女も臆病ぢやないと思つてお出でせう。さうですとも。然し僕は恐ろしい決心をしました。それを實行するだらうと思ふんです。で、その決心をすると同時に、僕は我を忘れて、こんなことをべらべらと喋り出しました。……お聴きなさい、僕の言はなきやならぬことは、一體僕は貴女の探偵なんでせうか？これに答へていただきたいんです！」

彼女の顔がぼつと赧くなつた。

「答は今少し待つて下さい、カテリナ・ニコラエヅナ。何も彼もお聴きになつた上で、すつかり本當のところを聞かせていただきたいんです。」

私は一切の障礙を打ち破つて無茶苦茶に喋り立てた。

二

「二月以前、僕は此處で、この帷の背後に立つてゐました。……それは御存知でしたね……そして貴女

はダチアナ・バヴロヅナに、例の手紙のことを話してゐらつしやいました。その時僕は飛び出して、夢中になりながら本當のことを明かしましたね。貴女は直ぐに僕が何かを知つてゐることを見破つておひになりました。……見破らないではをれなかつたのです。……貴女は大切な手紙を探してゐらつて、そのことを心配なすつてる最中でしたからね。……まあ、お待ちさい、カテリナ・ニコラエヅナ、もし黙つてゐて下さい。僕も貴女その疑念には根據のあることを認めなきやなりませんよ。何故と言ふに、その手紙は存在してゐる……いや存在してゐたんですからね。僕は拜見しましたよ、——そのアンドロニコフに宛てた貴女の御手紙を、それなんでせう？」

「あの手紙を御覧になりましたつて？」と彼女は困つたらしくおどおどして口を挿んだ。

「何時御覧になりましたの？」

「拜見しましたよ……クラフトの處で……御存知でしたね、例の自殺した男です……」

「本當ですか？ 貴方自身で御覧になつたんですね？ その手紙はどうなりました？」

「クラフトが破つて了りましたよ。」

「貴方の眼の前で？ あの人のお會ひになりましたの？」

「さうなんです。あの男は破つて了りましたよ、多分死ぬつもりだつたからです。……無論僕はその時

あの男が自殺する氣だつたとは知りませんでしたけれど……」

「ちや、あの手紙は亡くなつて了つたんですね、有り難う。」

「彼女は深い吐息を洩らして十字を切った。」

私は彼女に嘘を言ったのではなかった。即ち嘘は嘘だつたけれど、それは、その問題の手紙が私の掌中にあつて、決してクラフトの處にはなかつたからである。然しそれは單なる事實で、實際のところ嘘を吐いたのでないといふのは、その時、その手紙を晩に焼き棄てて了はうと決心してゐたからだ。誓つて言ふが、若しこの日私がポケットにその手紙を持つてゐたならば、取り出して彼女に與へただらうと思ふ。然し手紙は宿にあつてポケットにはなかつた。又ポケットにあつたとしても、その時、自分の持つてゐることを、持つてゐて彼女に返す日を長い間待つてゐたことを、話すのは、たしかに氣恥しいに相違ないから、或は渡さなかつたかも知れない。何れにしても結局同じことで家に歸つたら早速焼き棄てなければならぬ。従つて嘘を言ったことにはならないのだ！その時の自分の氣持は清純なものだつたと誓つてもいいのだ。

「そんなわけなんですから、」と私は殆んど我を忘れて話し續けた。「打ち明けて欲しいんです、貴女が御自分の應接室で僕を歡喜して下さつたり、僕に惹き付けられたりなさるのは、僕が手紙のことを知つてゐるかも知れないと思つてぢやないんですか？ まあ、ちつとしてゐらつしやい、カタリナ・ニコラエヅナ、もう一分間、黙つてゐて、おしまひまで言はせて下さい。僕は始終貴女をお訪ねして、やつと今そのために僕を大切になさるんだらうと疑ひました、——手紙を僕の手から探り出さう、手紙のことを僕に言はせようとお考へになつてですよ……も少し待つて下さい。さう疑つて僕は苦しみました。貴女の表

裏が違つてゐることが僕には堪へられません。何故と言ふに貴女の高潔な方であることを知つてゐるからです。正直に打ち明けて申します。——僕は嘗て貴女の敵でした。けれども貴女の高潔な方であることを知つたのです！僕は全く參つて了ひましたよ。然し貴女の表裏が反してゐること、反してゐるだらうと疑ふことは實に惱ましい。……さあ今は凡てを片附けなければ、凡てを説明しなければなりません、その時なんです！が、もう一寸待つて、口を利かないで下さい、僕がそれをどう思つてゐるか言はせて下さい、今、丁度この時に。——正直に言ふと、若しさうだとしても僕はそんなに無念に思ひはしません。つまり怒りはしないといふ意味ですよ。何故かつて、それはそれ程自然だからです。御承知の通り僕には解つてゐます。それに何の不自然なことも、悪いこともないぢやありませんか。貴女は手紙のことを心配して、これこれの人間がそのことを知つてると疑つてゐらした。それで極めて自然な結果としてそのこれこれの人間に話させようとお考へになつたんですよ。……これにも別に何の悪意もない、全然ないのです。僕は眞面目に言つてゐます。而も今貴女は今何かをおつしやらなければなりません。……(かう言ふのを許して下さい)白状なさらなければなりません。僕は實際のところを掴まなければならぬのです。ある理由があつてその真相を知りたい！さあ話して下さい、何故貴女は僕を大切になさいました？手紙を僕の手から探り出さうとなさるためですか……え、カタリナ・ニコラエヅナ？」

私は高所から墜落したもののやうに話し續けた。顔は熱く燃えてゐた。彼女は今は恐れる氣色もなく

て耳を傾けてゐた。寧ろ反對に顔には熱情が溢れてゐた。然し何かしら、きまりの悪いやうな、恥ぢてもゐるやうな表情があつた。

「そのためでした。」と彼女は靜かに低い聲で言つた。「許して下さいませぬ、悪かつたら。」

かう附け足して軽く手を私の方に差し延ばした。こんな態度を私は豫期してはゐなかつたのだ。彼女を既に知つてはゐたけれども、この二語以外の何物かを期待してゐたのだ。

「で、悪かつたからおつしやるんですね！ ただそれきり「悪かつた」だけおつしやるんですね！」と私は嘖鳴つた。

「おお、長いこと私は貴方に正直に接しなかつたと覺えてゐます。……で、全く、このことを打ち明けることが出来て嬉しうございます。」

「長い間さうお感じになつてゐたとおつしやるんですか？ ちや何故それを前にお話し下さらなかつたんです？」

「どう言つていいか解らなかつたんですもの。」と言つて彼女は微笑した。「つまり、その方法を知らなかつたんですの。」と言つて又微笑した。「けれども、しよつちう私は恥しく思つてゐましたよ……。何故と申せば、はじめは全く、貴方のおつしやる通り「貴方に惹き付けられた」のは、そのためなんですものね。でも直ぐ後になつて、厭な氣持になり、そのだましてゐるのが苦になつて参りました。本當でございますよ！ それにこれはみんな退屈な仕事でございますからね。」

彼女は厭な氣持になつてかう附け加へた。

「ちや何故——何故正直に僕に要求なさらなかつたんです？」「貴方は手紙のことを知つてゐらつしやる何故隠してゐらつしやるの？」とおつしやる必要があつたんです。さうすれば僕は直ぐに話したでせう直ぐに打ち明けた筈ですよ！」

「おお、私は……少し貴方が恐かつたのです。實を言へば貴方をも信じてゐなかつたんですもの。で結局私が隠してゐても、同じことだつたんです。」彼女は笑つて言つた。

「さうです、さうです。僕は賤しい人間でした！」と私は壓迫された形で言つた。「ああ、貴女はまだ僕が深い墮落の淵に墮ちたことを御存知なかつたんですね。」

「もう深い淵に！ 私、貴方の伊達な服装で解りますわ。」と彼女は軽く笑つた。そして寂しさに、「その手紙は私のこれまででしたことの中で一番悲しい一番無分別なものでした。そのことを思ふと何時も氣が咎めて來るのです。いろんな事情だの誤解だののために、私の懐しい寛大な父を疑つて了ひまして。……その手紙がどなたかの、どなたか心の悪い方の手に這入ることを考へますと……そして又さう心配するには相當な譯がございました。」と彼女は熱心に言つた。「それを手に入れた方がそれを利用しはしないか、父に見せはしないかと考へて私は顔へましたの。……さうなるとそれが父に恐ろしい影響を與へないものでもないんですもの……その身體に、その健康に……そして父は私を見棄てるかも知れません。……さうですわ。」

彼女は卒直に私を見ながら、そして恐らく私の表情の中の或影を捕へながら言つた。

「さうですわ。で、私の未来のことも心配になつて参りました。父が……病氣に影響することですから……私を愛しなされるかも知れぬと心配いたしました。……と同時にこんな氣持にもなりました。——無論私は父に罪なことをいたしましたもの、父は屹度私を許して呉れるだらうと思はれる程、親切で、而も寛大なんだと。それだけのことです。けれども私、決して貴方をあんな風に遇してはいけなかつたと思ひますわ。」と言つて彼女は不意に恥ぢらふやうな風を見せながら、「貴方は私を恥しい氣持になさいました。」

「いいえ、何の恥ぢる處も持つてゐらつしやらないぢやありませんか。」と私は叫んだ。

「私はたしかに貴方の……感情に騙られるといふ點に頼つてゐました。……そのことを認めますわ。」

彼女は伏目になつて打ち明けた。

「カテリナ・ニコラエヴナ！ 誰がそんな告白を僕になされるやうに強ひたんです？ おつしやつて下さる。」と私は酔漢のやうな調子で叫んだ。

「貴女にとつては立ち上つて、そして最も巧妙な言葉を以て、これはさうだつたけれども何でもないとだといふことを、二とこと掛けて四になるといふ以上に明瞭に僕に證明なさる方が容易ぢやありませんでしたか。——貴女がたの世界に住んでゐる人々のやうに貴女も真相をどう處理すべきかの方法を御存知なのだから。僕は野卑で愚かなこと、御承知の通りです。だから貴女が何をおつしやつたところで

直ぐに貴女を信じるに相違ない、貴方から出る何事をも信じるに相違ありませんよ。従つて無論そんな風な態度にお出になる必要はなかつたんです！ 貴女は全く僕を忘れてはゐらつしやらない。それに僕のやうな厚かましい間抜けの生意氣な少年に向つて、どうしてわざわざそんな風に卑下なさることが出来たんですか？」

「私、別に貴方に向つて卑下はいたしませんよ。」と彼女は、見たところ私の言葉が解らなかつたらしく威厳を保つて言つた。

「いや實際、全く反對で、僕の言はうとしたことは……。」

「ああ、これは實に悪うございました。不注意でございました！」と彼女は顔を隠すやうに手を當てながら、「昨日私は氣恥しく思ひました、何故貴方と一緒にゐる時に私は變な風になるんだらうと思ひました……實は、あの不吉な手紙に就いての真相を探り出すことが遂に私にとつて全く肝要なこととなつて了ひました。でなければそのことを忘れ掛けたでせうから……と言ふのは、私が貴方をお招きしたのは單にそのことのためばかりぢやなかつたものね。」と彼女は不意に附け足した、私の心臓の鼓動が高くなつた。

「無論そのことのためばかりぢやありません。ありませんとも、と彼女は巧みな微笑を浮べた。「私は……貴方は容易にお氣付きになつたことでせう、私たちがよくお互ひに學生同志のやうな調子でお話したことを。ね、アルカアデイ・マカロウィッチ。私は時々人様と交つてゐるのが堪らなく厭になることが

あるんです。殊に外國にゐてから、そしてこんな家庭のごたごたがあつてから、さう思ひますの……私は殆んど何處にも出掛けませんが、それも實は臆怯だからではありません。私はよく田舎へ參ることがあります。田舎では長いこと放擲つて置いた自分の好きな本、再び讀むことの出来ないでゐた本を繰り返して讀むことも出来ました。そのことはもう何時かお話したことがございましたね。貴方は覚えてゐらっしゃいますか、私が露西亞の新聞を平均一日に二日づつ讀むといふのでお笑ひになつたことを。」

「僕笑ひはしませんでしたよ……。」

「無論さうです。だつて貴方も新聞がお好きだつたから。それで私ずつと前に、私が露西亞人で而も露西亞を愛してゐると申上げたことがありましたね。覚えてゐらっしゃるでせう、貴方の言葉を借りて言へば私たちは常に『事實』を讀んでゐましたことをね。」と言つて彼女は微笑した。「貴方は時に何だか……變なところがおありですが、而も時に全く熱心になつて旨いことをおっしゃるのが始終ですし、それに丁度私の興味を持つてゐることに矢張り興味を持つてお出でですね。貴方は學生でゐらっしゃる頃には魅力のある獨創的な方でした。何よりもそれが一番よく貴方に似合ひますわね。」と言つて彼女は皮肉の交つた美しい微笑を見せた。「覚えてゐらっしゃいますか。私たちが一時間に亘つて唯人物のことばかりを話し、考へ、比較して、露西亞に學校がいくつあるだらう、どんな方面に改革が行はれてゐるだらうといふことを大層心配したことがありましたわね。それから殺人罪だのその他重大犯罪を總計して氣持のいい箇條と對比して見ましたね。……私たちは如何なる方向に進むべきか、最後にはどんなことになる

かなどといふことをも知らうとしましたわね。貴方の中に私は誠實を見出しました。現代の世の中では男と言ふものは私たち、つまり婦人に向つてそんな風に物を言つて呉れる方はありませんよ。前週でしたか、私はX公爵にピスマルクのことを話しましたの。何故つて非常に面白かつたし、彼のことと決心しないではられませんでしたから。それにまあX公爵の方では私の傍に坐りながら、彼のことをべらべらとお話しになりましたが、それは皆皮肉な調子を帯びたもので、私には辛抱の出来兼ねる、そして私どもが『女の世界を超越した問題』に就いて口を出す時に何時も『偉い男子』の方のお執りになる、例の恩人ぶつた慇懃さを帯びたものなのです。……貴方と私とがよくピスマルクのことで殆んど喧嘩までしたことを覚えてゐらっしゃいますか？ 貴方はピスマルクよりも自分の方がはつきりした自分自身の思想を持つてゐるとおっしゃいました。」

此處まで来て彼女は不意に笑つた。「私はこれまでに全く眞面目に話をして呉れる男子の方を唯二人きり知りません。——私の夫と今一人は非常に聰明な、尊……尊敬すべき方で、」と彼女は力を籠めて言つた。「貴方の知つてゐらっしゃる方……。」

「ヴァシロフ！」と私は叫んだ。彼女の一語一語に私は呼吸も殺してゐた。

「さうです、私はあの方のお話しになるのを聞いてゐるのが好きでした。で到頭打ち明けて……恐らく打ち明け過ぎる位に打ち明けて接しましたが、それでもあの方は私を信じなさいませんでした！」

「貴方を信じませんでしたつて！」

「ええ、私を信じた人はまだありません。」

「でもヴァシロフは、ヴァシロフは—」

「あの方はただ私を信じなかつたばかりぢやありませんの。」

と彼女は眼を伏せて變に微笑しながら、

「私が罪を澤山持つてゐるとお考へになつたんですよ。」

「罪なんか一つも持つてゐらつしやらないぢやありませんか！」

「いえ、幾つか持つてゐますわ。」

「ヴァシロフは貴女を愛しなかつたから、貴女といふものが解らなかつたんですね。」

私は眼を輝かして言つた。彼女の顔が痙攣した。

「そのことはもう言はないで下さい。あの方のことは話さないで下さい、と彼女は熱心に強く、「でもそれだけで充分ですもの。私歸らなきやなりません。」

「—彼女は立ち上つた。「私を許して下さいませうか、え？」と私を見た。

「僕…許しますよ。…一寸、カテリナ・ニコラエヴナ、怒らないで下さい、—本當ですか、御結婚なさるといふのは？」

「まだきまつてはをりません。」

彼女は何かに着せられたらしくまごつきながら答へた。

「その人はいい人ですか？ お許し下さい、こんな質問をして失禮です。」

「ええ、非常に。」

「もう御返事は入りません、御返事はしないで下さい！ 僕からこんなことをお訊きするのは不可能だつてことを知つてゐます！ が、僕はただその人が貴女の夫として恥しくない人かどうかを知りたかつたんですよ。」

「まあ、聴いて—」

「いや、聴きますまい、聴きますまい、耳を塞ぐつもりです。…ただ一言僕に言はせて下さい、—貴女の選擇に従ふあらゆる幸福を神がお許し下さるやうに、…この一時間を貴女は實に僕に多くの幸福を與へて下さいましたからね！ 貴女の面影は永久に僕の心に刻まれてゐます。僕は寶を、つまり貴女の完全といふ考を得たのです。表裏の反してゐること、野卑な嬌態、それに下劣なことを僕が豫想してゐたといふのは、その考を貴女に結び付けて置かなかつたからのことです。僕は近頃朝から晩まで考へてゐました。そして俄かに一切のことが眞晝のやうに明らかになつたのです！ 此處に來た時、僕は屹度ジエスイツト的の狡猾と詐欺と検査官的の蛇との面影を得て歸るに相違ないと思つてゐました。それに僕は名譽と莊麗と學生とを發見しました。—貴女はお笑ひになりますね。笑つてお了ひになるがいい！ 御承知の通り貴女は神聖です、神聖なものを言ふことは出来ません…」

「いえいえ。私が言つたのは、ただ貴方がそんな言ひ方をなさるからなんですよ。…でもその『検査



「官的の蛇」といふのはどんな意味でございますか？」と彼女は言った。

「貴女は今日溜らなく旨い言葉をおつしやいます、」と私は夢中になつたやうにつづけた。「僕の面前で、そんな貴方の感情に驅られるといふ點に頼つてゐました」などといふことがどうして言へたんでせう？ よろしい、貴女を神聖なものとして、その貴女が何等かの意味で自分の罪を認めて、そのために自身を罰しようといふので、そんな告白をなすつたと假定しますよ……けれども其處には何等の過ちもないのです、何故つて、過ちがあつたとしても、貴女から出たものなら凡てが神聖なものだからなんです！ 然し兎に角丁度そんな風な言葉を、そんな風な言ひ方をなさる必要はありませんでしたよ……そんな不自然な正直な告白は單に貴女の高い清純と僕に對する尊敬と信頼とを證明なさるばかりです！」と私は四離減裂して言った。「おお、顔を赧めないで下さい、赧めないで！……どうして、どうして貴女を罵り得る人間があらう、そして貴女を多情な女だと言ひ得る人間があらう？ ああ、お許し下さい、お顔に御迷惑さうな色が浮んでゐますね。聞き苦しい言をいふ狂氣のやうな子供を大目に見て下さい！ それに今の場合、言葉などが何の役に立つでせう？ 貴女は言葉に表現され得る以上の方ぢやありませんか？ ヴァシロフが嘗て申しました、オセロがデステモナを殺さないで後に自分自身を殺したのは、嫉妬のためではなく、自分の理想を奪はれたためだと……僕はこれが解りますよ。何故と言ふに今日僕の理想は僕に回復されましたから！」

「貴方は餘りに私を讀め過ぎて下さいます。私、そんな立派な女ぢやございませんよ。」と彼女は感動を現して言った。「何時か貴方の眼のことを申し上げたことがありましたが、覚えてゐらつしやいますかしら？」

彼女はかう冗談のやうに附け如へた。

「眼のための顯微鏡を持つてゐる、それで一匹の蠅も駱駝位に廓大されるとおつしやつたんだ！ いやこの場合は駱駝ぢやありませんよ……どうなさいました、御歸りですか？」

彼女は暖手套を持つて部屋の真中に突つ立ち、頸巻を手にしてゐた。

「いいえ、貴方のお歸りになるのをお待ちしませう。その後で歸るとします。タチアナ・パヴロヴナに一寸書き残して置くことがありますから。」

「僕は直ぐに歸りますよ、直ぐに。然しもう一口だけ。——貴女お一人、或は貴女のお選びになつた方と御一緒に幸福にお暮しになるやうに、そして神の恵みをお受けになるやうに祈つてゐます。僕の必要とする凡ては僕の理想です！」

「親しいアルカアデイ・マカロウイチ。私を信じて……私の父はよく貴方を『親しい少年』と呼んでゐましたが、私は覚えてをりますよ、貴方が貴方の寂しい少年時代のことだの、見知らぬ人々の間に乘てられたことだの、怱びしい夢のことなどをお話になつたことを……」と言ひながら彼女は詫びるやうな恥ぢらふやうな微笑を浮べて私の手を抑へた。「貴方とは以前のやうに會ひつづけることは出来ません。それは……無論貴方にも意味がお解りでせうね？」

「會きなSOPHIE」

「ええ、會へません。何時までも會へません……それは私の間違ひですの……これは問題外のことだと今思ひますれど……時には父の家でお目にかかりませうね。」

「貴女は僕の『感情に驅られること』を、僕の氣持を恐れてゐらつしやる。僕を信じてゐらつしやいません。」と僕は呼ばうとした。けれどもそれを口に出せない程彼女は羞恥を顔に現してゐた。

「待つて、」と彼女は私を直ぐに戸口の處で引き止めた。「貴方御自身で……例の手紙の破られたことを御覽になりましたの？ それを間違ひなく覚えてゐらつしやるんですね？ その時どうしてそれがアンドロニコフに宛てた私の手紙たといふことが解りました？」

「クラフトは何が書いてあるかを話して呉れました。そればかりか見せて呉れました……さよなら！僕は貴女の書齋に御一緒にゐれば貴女の探偵です。が、貴女がお出になれば本當に地に伏して、貴女の足が床を踏んだ處を接吻する氣でをりますよ……」

「咄嗟にそれだけのことを、無意識に、どうして言つたか、何故言つたかを知らず言ひ切つたまま、私は彼女を見もしないで一散に部屋を駆け出した。

私は家の方へ足を向けた。心は狂喜して頭は渦を捲き胸は一杯になつてゐた。母の家に近づくにつれて、アンナ・アンドレイヴナに對するリザの悪評、その朝の残酷な恐ろしい言ひ草を思ひ出した。そしてそんなことが一緒になつて胸は急に痛み出した。

「皆は何てひどい心を持つてゐるんだらう！ それにリザも亦一體どうしたんだらう？」と階段に立つた時思つた。

私はマトヴェイ（駁者）を歸して、九時に私の宿の方へ来るやうにと命じた。

## 第五章

私は食事に遅れてゐた。けれども皆はまだ卓子に坐つてゐないで私を待つてゐた。恐らく皆と一緒に食事をするのは私として少なかつたからだらう、献立には私のために特別の皿が加へられてゐた。セイヴォリイだけの鯛だのの類であつた。然し彼等が皆、どちらかと言へば疲れたやうになつて不機嫌だつたことは、私にとつて驚かれもしたし、残念でもあつた。リザは私を見て微笑を洩らさないでむつとしてゐたし、母は一目見ても解る位に不安になつてゐた。ヴァシロフは私に笑顔をしたけれども、それは理にした笑顔であつた。

「皆は喧嘩でもしたんだらうか？」と私は怪しんだ。が、最初の内は萬事調子よく行つた。燒團子（譯者註、肉或は果物等を中味としたもの）の這入つてゐる肉汁にヴァシロフは一寸顔を覆めたが、肉を野菜に捲いた蒸煮料理を渡された時には厭な顔をした。

「特別の皿は僕は嫌いなんだよ。」

「でも別に工夫した譯ぢやないでせう、アンドレイ・ペトロウイチ？ 大して工夫した新しい料理と云ふ譯ぢやあるまいに。」と母はおどおどして言った。

「君の母は或新聞とは全然反対だね。その新聞といふ奴にとつては新しいものは何だつて善いんだからね。」とヴァシロフは更におどけた愛嬌のある聲で冗談にしてはうとした。が、それも兎に角失敗で、ただ母を餘計にまでむつかせるに役立つたきりである。母は自分自身を新聞に比較することなんか全然出来ないで、困つたらしく身のまはりを見廻した。丁度そこへタチアナ・バヴロヴナが這入つて来た。彼女は食事が済んだといふので、母と並んで長椅子の上に腰を卸した。

私はまだ嘗て婦人の厚遇を受けたことがなかつた。それ處か事實は全く反対であつた。例へばタチアナ・バヴロヴナは以前もさうであつたが、最近殊に事毎につけて悪く言ふやうになつてゐた。彼女の不快が益々甚しくなつて来たのだ、つまり彼女には私のしやれた服装を見るに堪へなかつたのだ。彼女は私が馭者を連れたり華やかな外出をしたりするのを聞いた時、もう少しのことでも發作を起すところだつたと、何時かりザが話して呉れたことがある。到頭私は彼女に出来る限り會ふのを避けるやうになつた。二月以前、即ちヴァシロフがその問題になつた遺産をセルゲイ公爵に與へた時、私はヴァシロフのやつたことを話さうと思つて、彼女の處に駆けつけたことがある。ところがタチアナ・バヴロヴナは少しの同情の影も見せないで、いや、反対に恐ろしく怒つて了つた。——彼女は特に、半分でなく金額を與へたといふことをいけないといふので、鋭い調子でこんなことを言つた。——

「たしかですよ、貴方は參つちまつたんですよ、ヴァシロフが單にアルカアデイ・マカロウイチの機嫌をとるため、財産を諦めて、公爵に血闘の申込をしたといふのでね。」

そして實際彼女の言ふことも殆んど正しかつた。私は事實當時それに近い或感じを持つてゐたのだから。

彼女が這入つて来ると同時に、私は彼女が間違ひもなく私を攻撃に来たのだらうと見て取つた。確かにその目的で来てゐたに相違ないとさへ考へたので、直ぐに思ひ切つて自由な氣輕な態度になつた。それは大した努力でもなかつた。と言ふのは先刻あつた事件のために私はまだ輝かしい愉快な氣持を持つてゐたからである。私は此處で一度注意して置くが、その自由な氣輕な態度といふ奴は決して私には正しくない、言葉を換へて言へば私に似合はないで常に身苦しい恰好になるのだ。で、この場合もさうであつた。私は直ぐに何の惡意もなく、單に不注意のために悪いことを言つて了つた。リザがひどく沈んでゐることに氣付いたので、不意に、自分が何を言つてゐるのかをも考へず、こんな冗談を言つた。——

「僕は長年此處に来て食事をしなかつたね。それで今来たんだが、まあどうしてお前さんは困つたらしい顔をてゐらつしやるんだね、リザ！」

「私、頭痛がするの。」とリザは答へた。

「おやおや！」と其處へタチアナ・バヴロヴナが言葉尻を掴まへて口を入れた。「頭痛だからつて何ですな？ アルカアデイ・マカロウイチが食事をしようと思つて入らしたんですよ。お前さんは踊つて賑

やかにして上げなくつちやなるまいに。」

「貴女は全く僕の一生の悩みですよ、タチアナ・バヴロヴナ。貴方が此處にゐらつしやる以上、僕は二度と此處へ参りませんよ。」

かう言ひながら私は本當に癪に觸つて卓子に手を下した。母はぎよつとし、ヴァシロフは變な眼をして私を眺めてゐた。——私は直ぐに笑つて詫びた。

「タチアナ・バヴロヴナ。僕は『悩み』と言つた言葉を取り消します。」と矢張り自由な調子で彼女を振り返つた。

「いいえ、反對だと言ふよりも悩みだと言ふ方がまだお世辭ですよ。貴方もさうに違ひないでせう。」と彼女は吐き出すやうに言つた。

「ね君、人間は人生の些々たる悩みは忍ばなきやいけないよ。」とヴァシロフは微笑して呟いた。「人生といふものは悩みがなくては生きる價值のないものさ。」

「貴方は時々厭に保守的におなりですね、お氣が付いてゐらつしやいますか。」

私は神經的に言つて了つた。

「それは大したことぢやないよ、君。」

「いや、大したことですよ！ 若し相手が驢馬なら、何故驢馬に鈍い眞理をお説きにならないんです？」

「まさか君自身のことをさう言つてるんぢやあるまいね？ 第一に僕は他人を裁くことが出来ないし、裁きたくもないよ。」

「何故裁たくないんです、又出来ないんです？」

「退屈で面白くないからさ。或賢い女が何時かこんなことを言つたことがある。僕は如何に苦しむべきかを知らないから他人を裁く権利がない、他人を裁く前に人間は先づ苦惱を通して裁く権利を得なければならぬと言ふのだ。少し烈しいが僕に應用すれば恐らくそれは眞理なのさ。それで僕は批評を受け入れる充分の覺悟を持つてゐるよ。」

「そんなことを言つたのはタチアナ・バヴロヴナぢやありませんか？」と私は訊いた。

「おや、どうして知つてるんだね？」

ヴァシロフは幾らか驚いて私を瞞めた。

「タチアナ・バヴロヴナの顔に書いてありますからね。一寸喫驚なすつたやうだから。」

私は偶然に察し得た。後に解つたことだがその言葉は實際タチアナ・バヴロヴナが前晩の烈しい議論の時に話したことであつた。そして實際繰り返して言ふが、私は歡喜と膨脹とに充たされてゐたので、この凶兆のある瞬間に、即ち皆が銘々の苦の種を持つてゐて憂鬱になつてゐる時に彼等に掴みかかつて行つた。

「僕には解りませんよ。」と私は續けて言つたのだ。「何故と言ふに、それは皆抽象的だからです。それに

しても貴方が抽象的議論をお好みになるのは實に甚だしいと思ひますよ、アンドレイ・ペトロウイツチ。それは自己主義の證據です。自己主義者のみが概括を好むのです。」

「悪い言ひ草ぢやないが、僕を苛めないでくれないか。」

「でも訊かして下さい、その『裁く権利を得る』といふのは何のことですか？ 誠實な人間ならば裁判官となり得るといふのが僕の考です。」と私は益々反抗して行つた。

「その場合、裁判官は澤山はゐないだらうよ、」

「兎に角一人は知つてゐます。」

「誰だね、それは？」

「その人は今腰を卸して僕に話してゐますよ。」と私は答へた。

ヴァシロフは變な風に笑つて、私の耳許に屈みながら、肩越しに囁いた。——「その男はね、始終君に嘘を吐いてるんだよ。」

私は今日になるまで、彼が何と思つたのかを知ることが出来ない。然し明らかに彼はその時或激情に支配されてゐたのだ。(後に解つたことながら、それには或原因があつた。)それにしても、その「その男は始終君に嘘を吐いてゐる」といふ言葉は、私をぶるぶると震はせて了つた程に意外な、そして熱を籠めて言はれた言葉である。それには冗談とは受けとれない奇妙な調子を帯びてゐた。私はぎよつとして彼を穴の開く程瞞めた。が、ヴァシロフはふと笑ひ出した。

「まあ有り難い！」と母は不安さうに彼を見てゐたが、私に囁いた。「私はもう少しのことです……アルカアシャ、私たちに腹を立てないでお呉れな。お前は私たちを離れても結構なお友達をお持ちだらうけれど、私たちが愛し合はないで、誰がお前を愛しようとするものかね？」

「血縁の愛は不道德なものですよ、お母さん、何故つて、それに憤しませんからね。愛といふものは克ち得らるべきものなんです。」

「後になつたらお前も克ち得るでせう。が、此處では何も愛されてゐませんよ。」

皆は不意に笑つた。

「お母さん、貴方は撃つたつもりはないでせうけれど、御自分の小鳥をお打ちなさいましたねー」と私も笑ひながら應じた。

「それで貴方はそのために愛されるやうな或物を自分で持つてると本當に考へてるんですね、」とタチアナ・パヴロヴァは又私に突つかかつて來た。「貴方は愛される何物をも持つてゐないばかりか、却つて厭なところがあるに係はらず愛されてるんですよ。」

「少しもそんなところは持つてませんよ、」と私は氣輕に言つた。「御存知ですか、今日ある人は僕が愛されてゐると話して呉れましたよ。」

「それは貴方を笑つて言つたことでせうよ！」とタチアナ・パヴロヴァは不自然な惡意に近い調子で不意に言つた。それは言ふ機會を待つてゐましたといふ風であつた。「さうですとも。微妙な氣持を持つて

ゐる人、殊に婦人ならば、貴方の魂の汚れてゐるのを見て胸を悪くして了ひますよ。貴方の髪は綺麗に分けてあり、美しいシャツと佛蘭西仕立の洋服とを貴方は召してゐる。けれども本當は汚れてゐるのです！一體誰が洋服屋の勘定を拂ひました？ 誰が貴方を養ひ、さうして賭博狂ひの金を呉れました？ そんな恥知らずに頼つてゐるのは誰です？ それを考へて御覽なさい！」

母は惱まし氣に顔を赤くした。嘗てそれ程の羞恥が彼女の顔に現れたのを見たことがない。

「若し僕がお金を使つたとしても、それは僕自身の金ですよ、他人にその計算を示さなければならぬといふことなんかちつともありません。」と私は眞赤になつて吐き棄てるやうに呶鳴つた。

「誰の？ 貴方御自身のどうしたお金？」

「たとひ僕自身のものでないとしても、アンドレイ・ペトロウイッチのものですよ。彼は僕に拒みはしなかつたでせう……僕はセルゲイ公爵がアンドレイ・ペトロウイッチに負うてゐる金の中から借りたのです……。」

「君、その金の内一厘だつて僕のものぢやないよ。」と、ヴァシロフはきつぱりと俄かに私を遮つた。

その言葉は恐ろしく意味の深いものであつた。私は晒然としてゐた。ああ、勿論、その場合の自分の矛盾した不注意な態度に省みて、私は寛大な氣持乃至は高潔な言葉或は何かを言ひ表現することが出来たかも知れない。然るに私は咄嗟にリザの顔の中に、怒りつばい答めるやうな表情、嘗て私の受けたことのない表情、それは殆んど嘲笑に近い、そして私をそそのかすやうに見える或惡意を發見したので。

私は不意に振り向いて言つた。

「お前はダリア・オニシモワナを度々セルゲイ公爵の住んでる家に訪問するらしいね。だからお前が今朝あんなに呶鳴り付けたこの三百留を彼女に返して来て呉れると有難いがね。」

私は金を引き出して彼女に差し出した。然し、信じられないことかも知れぬが、私はこの言葉を全然動機なしに言つたのだ。つまり何かに對する微塵の諷刺もなしに言つたのだ。又實際さうした諷刺などのあるべき筈もなかつた。何故かと言ふに、その時、私は全く何も知らなかつたのだから、ただお前はそんなに干渉好きな事だから、若い男たちの仕事にさうまで口を出して見たいだらうよ、だからセルゲイ公爵は、あの美しい青年でベテルスブルグの士官さんの公爵にお金を自分で返して行きたくはないかね。」と言ふ代りに、比較的最も無邪氣な何かで彼女を苛めてやりたいとつい先刻思つてはゐた。然し實に驚いたことに、母は不意に立ち上つて憎々しげな身振りをすると同時に叫んだ。——「まあお前は何といふ……何といふ！」

彼女からそんな喋舌を訊かうとは思ひも掛けなかつたことである。で、私も椅子を離れた。それは吃驚したからではなく、或苦痛を——、心を刺すやうな傷手を感じたからであるが、それと同時に私は何か恐ろしいことが突發したのを感じた。然し母は自分自身を制し得ないで兩手に顔を埋めると、直ぐに部屋を飛び出して了つた。リザは碌に私の顔を見もしないで後を追つて行つた。タチアナ・パヴロワナは三十秒位黙つて私を顧めてゐた。

「貴方は本當に罵る氣になれたんかね？」と彼女は呆然として矢張り私を眺めながら謎のやうに言つたけれども私の返事を待たないで彼女も皆の方へ部屋を走り出た。ヴァシロフは同情の氣持もなく、寧ろ立腹した面持で卓子を離れて隅の帽子を執つた。

「君は無智といふ程馬鹿ぢやないだらうと思ふ、」と彼は皮肉に呟いた。「皆が歸つて来たなら、菓子に僕を待たないで済まして呉れるやうに言つてくれないか。一寸僕は出て来るから。」

私は一人で居残つた。初めは途方に暮れたが、やがて腹立たしくなつた。けれども最後には明らかに自分に責があると思つた。とは言へ、如何に自分が責めらるべきものかといふことがはつきり解つたわけではなく、唯單にさう感じただけのことである。私は窓側に坐つて待つた。十分間も待つてから、私も亦帽子を掴んで、以前私の部屋だつた例の屋根裏の階段を昇つて行つた。彼等、つまり母とリザとが其處にゐて、タチアナ・バヴロヅナが歸つたことを私は知つてゐた。その通りで二人は長椅子に掛けて何か小聲で話し合つてゐた。

私の姿を見ると同時に彼等は話を止めたが、私の吃驚したことに、私を見ても、二人とも少しの怒りをも見せなかつた。母は兎に角私を微笑して迎へた。

「お母さん、僕は残念です。」と私は口を切つた。

「心配おしでないよ！」と母は簡單に言つて退けた。「ただ互ひに愛し合つて決して争ひますまい、さうすれば神様は喜んで下さいますよ。」

「この人は決して私たちに對して意地悪ぢやありませんの、お母さん、乾度ですよ」とリザは信念と感情とを面に現して言つた。

「タチアナ・バヴロヅナさへゐなかつたなら、何にも起りはしなかつたんでせうに。」と私は叫ぶやうに、

「あの人は恐ろしい！」と附け加へた。

「お解りになりました？ お母さん、お聞きになりました？」

リザは私の方に進んで言つた。

「僕のお二人に言つて置きたいと思ふことは、若し世の中に汚れたものがあるなら、その汚れたものは僕で、他の凡ての人々は喜ばしい方なんだといふことですよ！」

「アルカアシャ、怒らないでね。でも若しお前が本當に止めて……」

「賭博をとおつしやるんでせう、ね？ 止めますよ、お母さん、ただ最後の打ち切りとして今日だけは參るつもりです。——殊にアンドレイ・ペトロウイチが自分で、あの金は全部自分のものぢやないと断言なすつたんですから。どんなに僕が恥しかつたか、お察しも出来ますまい……彼と一緒にそれに頭を突き込まなきやなりません、が……お母さん、此處にゐた一番おしまひの日に、僕は何か聞き苦しいことを申し上げましたね、……あれは下らないことなんですよ、お母さん。僕は信仰を持たうと本當に思つてゐますし、あれはただ法螺を吹いた言ひ草に過ぎなかつたんです。僕は基督を愛し……」

私が最後に母を訪ふた時、宗教に關する話があつて、母は非常に悲しみ周章であつた。それで

今、私の言葉を聞くと母は、まるで私が小さな子供でもあるやうに相好を崩して嬉しがつた。

「基督は何も彼も許して下さるよ、アルカアシャ。お前の悪い行も、お前よりもつと悪い行も許して下さる。基督は私たちの父です。私たちを見棄てはなさらなで、暗い夜に光明を示して下さるんですよ……」

私は二人に暇乞ひをして部屋を出た。ヴァシロフはその日中に會ふ機會はないかと思ひながら。彼に言はねばならぬことが澤山ありながら、その午後は駄目であつた。私の宿に來て待つてゐはしないかといふ氣が意外に強くして來たので、私は宿に向けて歩き出した。段々寒く冷え始めて來た。そして歩くのは非常に氣持がよかつた。

## 二

私はゾオズネセンキイ橋附近の、中庭を望んだ大きな棟に住んでゐた。丁度門を這入らうとする處で私は門から出て來るヴァシロフと打つかつた。

「何時もの通り散歩に出掛けて一寸君の家まで來てピオトル・イツボリトウィッチの處に寄つたが、この上君の歸りを待つのは疲れて了つたといふところさ。君の家の下宿人は何時もながら喧嘩ばかりしてゐるね。それに今日は、あの男の細君が何だかちつとばかり悲觀してゐてね、僕は一寸寄つて出て來たんだよ。」

或理由があつて私は氣苦しさを感じた。

「貴方は僕とピオトル・イツボリトウィッチとの外に誰の處にも入らつしやらないんでせうね。つまりペテルスブルグ中で御行きになるところは外にないんでせうね」

「それは君……だが、そんなことは大したことぢやあるまい。」

「これから何處に入らつしやるおつもり？」

「君のところへ引き返すまいよ。よかつたら一緒に散歩しないかね。散歩には持つて來いの晩だよ。」

「若し貴方が抽象的議論でなしに、人間らしく僕に話をして下さつて、例へば例の賭博のことに就いてもほんの一寸暗示して下さつたならば、僕はこんなに馬鹿みたいに墮落の淵に引き摺り込まれはしなかつたんでせうに。」と私は突然こんなことを言つた。

「君は引き摺り込まれたことを悔ひてるのかね？ それはいいことよ。」と彼は氣の進まない調子で答へた。「僕は始終考へてるが、賭博は君に大した影響を與へはしないよ。一寸した一時の迷ひなんだ……か君の言ふことは正しい賭博といふものは不潔なものでなり、その上金を失なふものだ。」

「且つ他人の金をも失はせたことがあるかね。」

「他人の金を失はた事があるからね？」

「貴方のお金を失ひましたよ。僕はセルゲイ公爵が貴方に借りてる金のうちから借りましたからね。それは無論僕の恐ろしく馬鹿な、滑稽なことですが……つまり貴方の金を僕のものだと考へるなんてこと



はね。けれども僕は何時も勝つてお返ししようと思つてゐますよ。」

「今一度注意して置かなきゃならぬが、僕はちつともセルゲイ公爵に金を貸してはゐないんだ。青年といふものは自分自身のことと難儀をするものだから、たとひ約束があつても、僕は何にもそんなことを當てにはしてゐないのさ。」

「それで僕の立場が二重に悪くなります。……僕の立場は滑稽なものですね！　すると、公爵が僕に金を貸すといふ理由、そして又僕が公爵に金を借るといふ理由は何處にあつたんでしよう？」

「そいつは君の問題だ。……然し君にとつてあの人から借りる理由は少しもないわけだね、さうだらう？」

「二人が友人である場合は例外で……」

「外に理由はないのだらう？　あの人から借りることが出来るよと君を思はせるやうな何かがあるだらうか？　何かの因縁があるかしら？」

「何かの因縁とおつしやるのは？　僕には解りませんが。」

「解なきや解らない方がいいね、君、僕はたしかにさう考へるよ。それで何とかして賭博を避けるやうにやつて見給へ。」

「ただ以前におつしやつて下さつたならば！　今でも、この問題に就いては餘り誠意をお持ちになつてゐないやうですね。」

「若し僕が以前にこのことを話したとすれば要するに二人喧嘩しなければならなかつたんだ。そして君もそんなに氣持よく、夜の僕に訪問をさせて呉れなかつたらうよ。それで僕に言はせるならば、凡てさうした人を救はうとする忠言だの警告だのといふものは相手の良心に向つての、又相手の浪費に對する單なる邪魔物となるだけのものなんだよ。僕も他人の良心に干渉し過ぎる位干渉したが、長い經驗の間で得たものは何時にもありはしない、ただ嘲罵を受けたり拒絶されたりしたのが關の山さ。無論、嘲罵されたり拒絶されたりするのは何でもないことだ。要はその方法では目的が全然達しられないといふことなんだ。どんなに君が干渉したつて、相手は聽いては呉れないよ……そして皆が君を好かなくなるのが落ちだ。」

「抽象的議論以外に、さうやつて何かを僕にお話しになり始めたのは嬉しいと思ひます。僕は一つお訊きしたいことがある。それはずつと前から訊かうと思ひながら會へば何時も訊けなくなることなんです。僕たちが往來にゐるのは都合のいいことです。貴方は覺えてゐらつしやいますか、貴方のお家で僕が寝起きしてゐた一番おしまひの夜、つまり二ヶ月前ですね、どんな風に二人が例の屋根裏の僕の「箱」のやうな部屋で向ひ合つてゐたか、そして僕がお母さんとマアカア・イワノウイツチのことをお訊きしたかを。その頃貴方に對しては僕がどんなに自由で氣輕に振舞つてゐたかも覺えてお出でですか？　よくも貴方はこの若い間抜けが、その母のことでそんな風なことをお訊きするのを黙つてゐらしたもんですね。而も貴方は微塵も異議を立てることをなさらなかつた。それどころか、御自分をもその

中に入れて僕を前よりも悪くしてお了ひになつた。」

「ね君、そんな……そんな氣持を君から聞くのは實に愉快だよ。……さうさう、僕もよく覚えてゐる。——實を言へば君が頼を頼めるのを豫期してゐたんだ。で、若し僕が君の調子に合したなら、それは別でもない君の話に切りをつけさせようと思つてのことなんだ。……」

「その時、貴方は僕をお欺しになつたばかりで、僕の魂の中の常に純な泉を益々お苦しめになりましたよ。さうだ、僕は不幸な生意氣な少青年で、時々何が善なのか、何が惡なのか解らないんです。正しい路への暗示を少しでも貴方が示して置いて下さつたならば僕は事物の區別を知り、そして一意正路を辿らうとしたに相違ありません。けれども貴方は僕を邪道に追ひ込んでお了ひになりました。」

「僕は何時も、何かの點で吾々が理解し合はなければならぬと初めから解つてゐた。赤面することは僕の助力なしにその本體を現したもので、たしかに君にとつてより、いいことなんだ。……氣の付いたことが、君は最近さうくなくなつたと思ふよ。……」

「讀めないで下さい、僕は厭ですから。貴方が眞實の如何に關せず僕にお世辭を言つて僕を喜ばせようとしてゐらつしやるんだといふ心苦しい疑惑を感じさせないで下さい。そんな氣もしますからね。成程最近に……お察しの通り……僕は婦人を幾人か訪問しました。そして卸承知でせう、歡待されましたよ。アンナ・アンドレイヴナなどに。」

「そのことはアンナ・テンドレイヴナから聞いて知つてゐる。さうだ。あの女は大層綺麗な而も賢い人

間だ。……今日は何につけても氣が病むが妙だな、憂鬱症なんだらう、痔のためかも知れなへね。ところで家の方のことはどう？ 旨く行つてるだらうね？ 僕は皆のところへ歸つて行くのが時々厭になつてね、それも極端に氣持の悪い散歩の後でもさうなんだから弱つて了ふ。實際僕は時に雨のさんさ降る中をその上におらつくことがある、ただ家族の者に歸つて會ふ時間を延ばさうといふだけの目的でね。……で、どんなに僕は家の中がうるさいことだらう！ 本當に、厭になつてしまふよ！」

「お母さんは……」

「君の母は最も完全な嬉しい人間さ……一口に言へば僕はあの連中に恐らく慣れないよ。序だけれど、一體今日の連中はどうしたといふんだらう？ 先日來彼女等は何だか不機嫌でゐたんだ。……御承知の通り僕はさうしたことを常に氣にしまいとしてゐるんだが、今日は何か新しい物が交り込んでゐたよ。……それに氣が付いたかね？」

「はつきりは少しも氣が付きませんでしたかね、で、實際厄介なタチアナ・パウロヴナの件さへなけりや全然注意もしなかつたでせうよ。貴方のおつしやることは確かです、何か變なことが潜んでゐますね。僕は今朝アンナ・アンドレイヴナの處でリザに會ひましたが、彼女は……實際僕を見て吃驚しましたよ。無論貴方は彼女がアンナ・アンドレイヴナを訪問したことを御存知なんでせう？」

「知つてるよ、君。それで君は……君が今日アンナ・アドレイヴナの處に行つたのは幾時頃？ 一寸理由があつて知りたいんだけど。」

「二時から三時の間です。それに意外なことに僕が歸らうとする、丁度そこへセルゲイ公爵がやつて参りました。……」

それから私はその訪問の詳細を説明した。彼は黙つて傾聴してゐた。——彼はセルゲイ公爵とアンナ・アンドレイヴナとの結婚が成立する云々の噂に就いては何等の註解をも加へなかつた。そしてアンナ・アンドレイヴナを私が熱狂的に讚美した、その答として彼は再び「あの女は大層綺麗な人間だよ。」と呟いたきりであつた。

「僕は今日アンナ・アンドレイヴナをひどく喫驚させましたよ、最近社交界の話題になつてゐる、例のアマコフ未亡人とビュリン男爵との結婚の噂を話して聞かせたんです。」

「へえ？ 眞逆と思ふか知れないが、あの女はすつと前に、君があつた女を吃驚させるよりもすつと前に『噂』として、そのことを僕に話したことがあるよ。」

「何ですつて？」と私はただ呆れ返つた。「誰から一體彼女は聞いたんでせう？ が、まあこんなことを調べる必要もない、無論彼女は私の話した以前にちやんと聞き知つてゐたのかも知れません。けれども先づ考へて御覺なさい、僕が話した時、彼女は全く耳新しい消息に接したといふ風で耳を傾けたんですよ！ が、……それが何だらう？ 『寛大』のところがある難い！ 人間は他人の人格に就いては度量に考へなければなりませんかね？ 例へば僕はそのことを直ぐに吐き出してさふ、然るに彼女は煙草入れの中に收ひ込んでさふ。……それで結構、それで結構、それでも矢張りアンナ・アンドレイヴナは最も驕

しい人間、極めて立派な人格者ですよ！」

「ああ無論人間は各自の道を踏んで行かなきゃならない。獨創的な或物……この立派な人格者は時として他人を全く啞然とさせることが出来るんだよ、——想つても見給へ、このアンナ・アンドレイヴナは今朝こんな質問を出して僕の呼吸の根を止めて了つたよ。『貴方はカテリナ・ニコラエヴナ・アマコフと愛し合つてゐるんですか、どうですか？』といふのだ。」

「何といふ亂暴な、嘘としか思へない質問なんでせう！」と私は再び呆氣に取られて叫んだ。實際私の眼前にはぼろとした霧がかかつた。私は嘗てこんな問題を彼に結び付けたことがなかつた。で、此處で初めて彼の方からこれに觸れ始めた、……。

「どんな風に訊いたんです？」

「どんな風もあるものかね、全く。煙草入れは又直ぐに閉ぢて了つたさ、それも前よりはもつと固くね。それに僕はそんな質問が僕に向つて發しられることがあり得ようとは思ひも染めなかつたよ、彼女にしても……尤も君はかう言ふかも知れない、——彼女をよく知つてゐるから、そんな質問までが特徴だといふことを察し得ると。……それに就いて偶然に何か聞いてはゐないかね？」

「僕も貴方同様、全く譯が解りませんよ。多分好奇心か、でなきや冗談でせう。」

「いや反對だ。極めて眞面目な質問、反問を許さない程に手厳しい質問なんだ。而も明らかにこれには頗る大切な確實な理由があるんだよ。君は彼女に會ひに行く氣ぢやなかつたかね？ 何かを發見し得な

かつたかね！ どうだらう。」

「でも一番不思議なことは貴方がカタリナ・ニコラエヴナと戀し合つてるといふことを彼女が考へ得たことです！ お許し下さい、僕は驚かないではをれませんか。僕なら決して、決してこの問題、或はこれに關した問題を、貴方に訊かうとはしなかつたでせうに。」

「そこは君の非常に感覺的のところだよ。」

「過去に於ける貴方の情事、關係は、——成程無論、この問題は僕たちの間の問題以外です。そしてこれは實際僕が間拔けたつたんでせうが、然し最近、最近の数日、僕は貴方が若し嘗てあの人を愛したことがありなら、たとひそれがほんの一瞬にしても、貴方は決して貴方のなすつてゐるやうな恐ろしい誤解をあの人にお浴せになるわけがないと幾度も考へましたよ。僕はどんな出来事があつたかを知つてゐます、貴方の敵意と嫌厭とを知つてゐます。聞きました、聞き過ぎる位聞きました。モスコウを去る以前から聞いてゐました。けれども、さう鮮やかに浮き出してゐる事實は強い敵意、強い憎悪、つまり愛とは正反對のものです。而もアンナ・アンドレイヴナが卒直に「彼女を愛してゐらつしやるのか？」と突然貴方に訊いたとおつしやる。彼女がこのことを、そんな風に訊く程知らないでゐるなんてことがあり得るでせうか？ これは亂暴です！ 彼女（アンナ・アンドレイヴナ）は冗談に訊いたんですよ、乾度笑つてお訊きましたんですよ！」

「然し君はこの問題で熱心過ぎる位熱心だね。」とヴァシロフは言つた。その聲には彼として珍らしく他人の肺腑を突く神經的な誠實な或物を含んでゐた。「君はつい今、婦人連を訪問したことを話したね……無論僕にとつては君に……君の表現に依ればその問題に就いて訊くためだが……「あの女」は君の新しき知り合ひぢやないかね？」

「あの人は」……と言ひ掛けて私の聲は震へた。「お聞きなさい、アンドレイ・ペトロウイチ。あの人は貴方が今朝セルゲイ公爵と話してゐらした所謂「生きた生命」ですよ。覚えてゐらつしやいますか？ 貴方はおつしやいましたね、生きた生命とは、非常に明白な、非常に簡單な或物、自分の顔前に眞實に現れる或物で、その非常に明白で簡單なため、吾々はそれが一生を通じて吾々の苦心しながら探し求めてゐるその物に相違ないとは信じてゐることが出来ないのだよ。……さうした思想を持つてゐる貴方は理想との中に「あらゆる悪」を御覽になつたんぢやありませんか。これが貴方のなすつたことですよ！」

讀者は私の氣持がどんなに亂れてゐたか察しることが出来ると思ふ。  
「あらゆる悪！ ああ！ その言葉を僕は認めるよ。」とヴァシロフは叫んだ。「で、若し事がそんな程度にまで、即ち君がそんな言葉を語る程に進んでゐるなら、僕は君をお祝ひすべきぢやなからうか？ それを恐らく君が青年には殆んど不可能な謙讓と沈黙とに對する信用を受けるに足る人間だといふ程の親しみを示してゐるよ。」

彼の聲には、甘い調子と親しい情熱的な笑ひとが含まれてゐた。……彼の言葉と輝いた顔には、挑むやうな魅力のある或物が含まれてゐた。それは夜目にも氣付かれる位であつた。彼は異常に興奮してゐ

た。私は自分の氣持に逆つて聲を高くした。「謙讓、沈黙！ いやいや！」と叫んで私は先刻から執つて無意識に掴んでゐた彼の手を握り占めながら顔を赦めた。「いや、貴方のおつしやることには理由がありません！……實際そのために祝つていただくやうな物を何にも僕は持ち合してをりません。そんな物は常にある筈がないんですよ。」

「私は呼吸を殺してゐた。そして自分を解放して了つた。解放したくて溜らなかつた。さうするのが實に氣持がよかつた。」

「貴方は知つてらつしやる……で結局僕は……貴方は僕の愛する立派なお父さんです。お父さんとお呼びするのを許して下さいませう。息子にとつて、その父親の婦人との關係を、父親自身に話すことは（いや全く誰に話すことも、第三者に話すことも）實に論外です。たとひその關係が最も清いものであるとしても。實際彼等か清ければ清いだけ、益々沈黙する義務があります。それは下劣で野卑です、簡単に言へば打ち明けられることは論外です！ 然し何事もなかつたとすれば、全然何事もなかつたとすれば無論話してもいいのぢやありませんか？」

「君の思ふ通りにしたらいいね！」

「考のない、實に考のない質問です。僕の想像するところでは、貴方はこれまでに幾人もの婦人を知つて親しくお成りになつたことを思ひますが、……僕はただ一般的、一般的の意味でお訊きするんです、特別の場合を少しもお訊きしてゐるぢやありませんよ！」

私は顔を架めた。そして喜びのために窒息しさうであつた。  
「破戒もあつたと假定して置かうよ。」  
「それで、お訊きたいんですが、經驗をより多くお積みになつた方として、御意見を聞かしていただきたいものです。——或婦人が不意にかう言つたとします、貴方と別れようとして、偶然に振り返りながらですね、「明日の午後三時に私は何處其處……例へば、タチアナ・パヴロヴナの處にゐますよ」と、かう言つたとするんです。」

「私は最後の突進をしたのだ。胸は鳴つた。話すのを止めさへした、續けて喋ることが出来なかつたのだ。彼は耳を澄ましてゐた。」それで翌日午後三時に僕はタチアナ・パヴロヴナの處に出掛けました。その時かう考へるんです。「料理番が戸を開けて呉れた時に、——貴方はあの料理番を御存知でしたね、——先づ第一に、タチアナ・パヴロヴナは在宅かどうかを訊くでしょう。で若し不在だが、彼女の歸りを待つてゐる他の婦人客があると料理番が答へたならば……」どう僕は結論したらいいでせう。若しそれが貴方だつたらどうお考へになります。……簡単に言へば若し貴方が……」

「約束は君にされたんだと思ふきりさ。これは實際の出来事だね。而も今日の出来事ぢやないか、え？」  
「ああ、いやいや、さうぢやありません。そんなもんぢやないんです！ 出来事は出来事です、けれどももちつともさうぢやないんです。約束は約束です。けれどもちつともそんな意味の約束ぢやないんです。そしてこのことをこんなに急いで申し上げるのは、でないと思口を言はれなきやなりませんからね。出

來事は出來事です、けれども……」

「君、これはこれは非常に興味のある……」

「僕は何時も金を乞はれると、この連中に十留と二十五留とを呉れてやるんです。酒のために！ 丁度

「三人の巡査がゐますね、貴方の前に中尉、退職の中尉が施しを乞うてるぢやありませんか！」

行手が突然背の高い乞食、恐らく事實退職中尉なんであらうが、に依つて塞がれた。最も不思議なことは、彼は立派に軍服を着てゐながら而も乞食をしてゐることだ。

三

私は故意とこの不幸な中尉の些々たる事件を除かないで此處に記すのである。何故と言ふに、わがヴァシロフの面影は、この時の小事件なしでは完全に描き出せないから。これは彼にとつて實に重大なことである、而も私はそれを知らなかつたのだ！

「君が立ち去らなきや、直ぐに巡査を呼ぶよ。」とヴァシロフは突然不自然な聲を擧げて矢張り中尉の前に突つ立ちながら嗷鳴つた。私はまだ嘗てさうした哲學的な人間から、而もさうした些々たる原因に對して、そんな怒りを想像することが出来なかつた。それに考へて見れば、彼が今言つた通り、彼に最も興味のあるところで二人の話は途切れて了つたのだ。

「何だつて、君たちは五コベツクの端くれ金も持つてゐねえのかえ」と中尉の乞食は手を宙に振りなが

ら亂暴な調子で嗷鳴り返した。

「今はどんな野郎だつて五コベツク位はちやんと持つてるぞ！ へつぽこ野郎め！ 碌でなしめ！ この野郎海狸の皮を着込みやがつて、こんなことを巡査に相談しやがる！」

「巡査！」とヴァシロフは嗷鳴つた。

然し嗷鳴る必要はなかつた。傍の隅に一人の巡査が立つて中尉の罵るのを聞いてゐたから。

「この侮辱の證據を擧げるんだ。警察へ来て貰ひたい。」とヴァシロフは言つた。

「僕は平氣だよ。君なんか証明出来るものは何にもありやしないからな！ 君はそんなに懶巧さうには見えないよ！」

「この男を黙らせて下さい、巡査。僕たちを警察へ連れてつて下さい。」とヴァシロフは強く言ひ切つた。

「無論警察まで行くつもりぢやないでせう？ うるさい奴だ！」と私は彼に囁いた。

「無論行くんだよ、君。往來での亂暴な振舞は實に辛抱し切れないからね。皆が銘々の義務をつくせば、それが吾々全體のために改善されることになるんだ。」

およそ百歩ばかりの間、中尉は傲慢に威張り散らして歩きながら熱心に喋つてゐた。「こんなことは何でもないぢやないか」つまり「高が五コベツクのことぢやないか」と言ふ風なことを彼は言つた。然しなうとう彼は巡査に何かを囁き始めた。巡査は賢こさうな男で、見たところ街上で「勇氣」を振り廻すことを好まないらしく、ほんの僅かな程度に於てではあるが彼の味方をしてゐるやうであつた。そして

低い聲で呟くやうに返事をしてゐた。「それにはもう遅すぎるよ」だの「餘り来すぎてゐるよ」だの「今直ぐにお前が詫言をすれば、この方も聞いて下さるだらうよ。それで……」だのといふやうなことを。「おい、その方、一體俺たちや何處に行くんだね？ 何で急いでるんだ、何の洒落だ、訊きたいね。」と中尉は不意に呷鳴り出した。「落ちぶれた人間が喜んであやまらうとしてるのに……實際、君がこの男をやつづけたいんなら、……養生！ 此處は應接間ぢやねえや、往來だからな！ 性來なら、こんなあやまり様で結構さ……」

ヴァシロフは立ち止つて突然笑ひ出した、私はそれを彼が興味を催したからだと思像したが實はさうでなかつた。

「彼は君の謝罪を全部容れるよ、士官君。そして君が出来る人間だといふことを認めるよ。此處に二十コベツク金があるからね、勝手に飲んだり食つたりし給へ。失禮、巡査君、厄介を掛けましたね、君の骨折に對してはもつと本質的なものを以てお禮してもいいんだが、然し君は立派な人格を具へてゐらつしやるから……ところで君、」とヴァシロフは今度は私の方に向き直つた。「この近所に食事をする家がある。全く恐ろしい溝のやうな家だがね、お茶位は飲めるよ。……こちらだ、近いよ、來給へ。」

繰り返して言つて置くが、彼の顔は輝きに充ちて快活だつたけれども、嘗てこんなに興奮したのを見たことがなかつた。而も私は氣が付いたが、彼が財布から士官にやる金を取り出さうとする時、その手は震へて、指は言ふことを聞かなかつた。で、遂に彼は金を取り出して士官にやつて呉れと私に頼んだ

のだ。そのことを私は忘れ得ない。

彼は水邊にある小さな料理店の階下に私を連れ込んだ。客は少なかつた。聲高の筒琴が奏せられて、

其處には汚い食事ナブキンの臭氣が漲つてゐた。二人は隅つこに腰を落し付けた。

「多分君は知らないだらう。僕は時に實に疲れる、恐ろしく魂の疲れを覚える……それでこんな臭い穴みたいな處に來たくなるんだ。かうした周囲のもの、溜らないやうな音楽、不體裁な、非露西亞的な給仕、安煙草の煙、玉突場からの騒ぎ、——いささか、これは狂氣に近い程野卑で散漫なんだ。……さう

だ、君、あのマアズ（軍神）の息子め、話の邪魔をしてつたね、而も最も面白くなり掛けた時だつたよ。……さあ、茶だ。僕は此處の茶が好きさ、……考へても見給へ、今日ピオトル・イツポルトウイツチはね、不意に自分の處の下宿人、小さな痘瘡のある男だつたよ、その男にこんなことを話し出したのさ。前世紀のことだが、英國の議會に或特別法律委員が任命された。それは主教の前で基督の審判を調査するもので、この判決は現代の法律に照らしてどんな風になるかを發見しようといふ目的だつたといふ、そして訊問は莊重に行はれ、求刑その他に對する辨護士も附いてゐたといふ……陪審官は元の評決を保持しなければならなかつたといふことだ……驚くべき話ぢやないか！ その馬鹿な下宿人はこれに就いて議論を戦はせて機嫌を害ね喧嘩をしまつた擧句、宿を出なきやならんと切り出した始末さ。……主婦は室代を貰へなくなるといふので泣き出したよ。……かうした小料理屋には時々蠶を持つてるものだが、君はピオトル・イツポルトウイツチに就いてのモスコウでの昔話を知つてたかね？ 或モス

コウの料理屋に鶯が鳴いてゐたのさ、其處へ一人の商人が這入つて来て、「いくら高からうと、俺の望を叶へなきやならぬ」と、この商人は言つた。「その鶯はいくらだね？」「百留ですよ」と店の人間が答へた。「焼肉にして呉れ」そこで焼肉にして出されたが、商人は「俺に二厘位切つてくれ」と言つたといふ。この話をピオトル・イツボリドウィツチに何時か僕は話したが、あの男は本當にしないで、ひどく怒つてゐたことがあるよ。」

まだまだ彼はいろんなことを喋つた。彼の喋り振りの見本としてこの断片を此處に示したばかりである。私が自分の話をしようとして口を開き掛けると、その度に彼は幾度でも手を舉げて遮つた。そして何時も獨特の全く見當違ひの馬鹿話を喋り出した。その話し振りは快活で興奮してゐた。何を笑ふのか解らないが笑つたり、時には嘗て彼に見たことのない見苦しい偷み笑をくすくすとしたのだ。彼は一氣に茶を飲み干しては又一杯を注ぎ差した。今、私には理解し得るが、私は恰も、大切な、面白い、待ち集れてゐた手紙を受け取つた人間が自分の前にその手紙を置きながら故意と開かないで、手の中で表をかへしたり裏にかへしたり、封筒だの封印だのを眺めたり、隣りの部屋へ物を見に行つたり、つまり簡單に言へば、それが自分の手から遁れることのないのを知つてゐて、讀むといふ興味ある瞬間を延ばしてゐるといふやうなものであつた。かうして彼は自分の楽しみをより完全なものにするのだ。

私は話すべきことを見て彼に話した。無論最初からのいきさつ、一切を打ち明けた。それに恐らく一時間位はかかつたらう。そして實際どうして彼に話さないで居れたらうか、その午後私は話したくて死ぬ

思ひをしてゐたのだ。

私は彼女がモスコウから到着した日、老公爵の宅での最初の面會から話し始めて、次にはそれが次第にどうした経路を執つたかを説明した。私は何一つ除くことをしなかつた。又實際除くことが出来なかつたのだ。彼は私を誘ひ出した。彼はどんなことがあつて何か私の氣持を掻き立てたかを察知した。彼はこの二ヶ月の間、扉の背後に潜んで立つてゐたに相違ないと思はれる位に奇怪な或物が時に感じられた。即ち彼は私のした身振りだの私の感じた感情だのを、私が言はない先に知つた。私は彼にした告白が限りなく嬉しかつた、何故なら、私は彼の裡に、親しみのある柔かさ、深い心理學的な微妙さ、半語を以て私の意味したことを察知する驚くべき能力とを見出したからである。彼は女のやうに優しく耳を傾けたのだ。殊に特筆すべきは、彼が私に羞恥を感じさせないやうな方法を知つてゐたことである——彼は時々私を遮つて、多くの場合神経質にから繰り返して言つたものだ。

「詳細を忘れちゃいけないよ、大切なことは如何なる些事をも忘れないところにある。處が小さければ小さい程、時としてはそれが大きいのだからね。」

そして幾度も同じ意味のことを言つて私を遮つた。言ふまでもなく私は最初の内、優越——彼女に對して優越した氣持で話してゐたが、急に正直に落ちて了つた。彼女の足跡のついた床の上に接吻する覺悟でゐたことを眞直に打ち明けた。彼女は「手紙のための恐怖で惱んでゐたかも知れないが、然し、以前の通りさうあるやうに彼女が見せてゐた清い非難のない人間だといふことを、彼が完全に理解しな



ことは最も美しい立派なことであつた。彼は「學生」といふ言葉に依つて意味されたことも完全に理解した。然し物語の終りに近づいた頃、私は彼の善良な微笑の背後に、時々或辛抱し兼ねた顔色、或他のものゝ氣を取られてゐるやうな氣勢があるのを見て取つた。例の手紙のことを話す時になつて私は考へた。——「彼に本當のところを話さうか、どうしよう？」さうして私は話したくは思ひながら話さなかつた。これは一生記憶してゐるやうに此處に述べて置く。そして彼にも彼女カテリナ・ニコラエブナに話したと同様、クラフトが焼き棄てたことにして話したのだ。彼の瞳は輝いて、前額には不思議な、深い憂鬱の皺が刻まれた。

「確かに覚えてゐるんだね、そのクラフトが例の手紙を蠟燭で焼いたのを？ 間違ひぢやないかな？」

「間違ひぢやありませんよ。」と私は矢張り言ひ張つた。

「その紙切れが彼女にとつて實に大切なものだといふことが要點だよ。それで若し君が今日手許にその手紙を持つてさへゐたならば、或は君は……」

かう言ひ掛けたが彼はその後を言はなかつた。「が、今は君は持つてゐないのかな？」

私は内心ぎくりとして震へ上つた。けれども外面平氣を装つてゐた。見たところは動じなかつたが、矢張りその質問を喜んで信じる氣にはなつてゐなかつた。

「僕の手許に持つてゐるつて！ 今僕の手にですか？ だつてとつ、く、クラフトが焼き棄てたものをどうすることも出来ないぢやありませんか？」

「さうかね。」

燃えるやうな強い眼差しを彼に浴せ掛けた。それを私は忘れることが出来ない。けれども彼は微笑した。が、その微笑と同時に、凡て彼の善良性、凡て女性的な柔らかさは彼の表情から一瞬に消え去つた。その代りに、漠然とした惱ましい或物が現れた。そして彼は益々何かに氣を取られて來た。若し彼がその時に今まで通り自分自身を制してゐたならば、手紙のことで、そんな質問は發しなかつたであらう。然るに彼はそんな質問をした、それは言ふまでもなく自制を失つてゐたからだ。然しこのことは今言ひ得るので、その時は、そんな風に彼が一變してゐたとは勘付かなかつた。それで私は依然として語り續けた。そして矢張り私の心中には同じ音楽が聞えてゐた。

私は物語を了へて彼をちつと見た。

「それは妙だな、と彼は唐突に、私が最も細かい事柄を話した時に言ひ出した。「頗る不思議だね君。君は三時から四時までの間其處にゐたと言ふんだね、そしてタチアナ・バヴロヴナは留守だつたと言ふんだね。」

「正確に言へば三時から四時半までですよ。」

「成程、まあ聞いて呉れ給へ、僕は丁度もう一分で四時半といふ時にタチアナ・バヴロヴナに會ひに行つたよ。そして臺所で會つたんだ。——僕は大概の場合、裏口から會ひに行くんでね。」

「何ですつて、タチアナ・バヴロヴナに臺所で會ひなすたつて？」と私は後退りする程驚いて聲を擧げ

た。

「それに彼女は内へ案内はできないと僕に言つたよ。僕は二分位のみきりだ、食事に入らつしやいと言ひに一寸寄つただけなんだからね。」

「ちや多分その時何處かから歸つて来たばかりの處だつたんでせうね。」

「僕には解らない、寛衣を着てゐたけれど、無論さうぢやあるまい、丁度その時は四時半だつた。」

「然し……タチアナ・バヴロヅナは僕が來てゐることを話しましたか？」

「話さないよ……話したんなら、僕はそのことを知つてゐる筈で、同時にそのことを君に訊きはしないさ。」

「これは頗る重大な……」

「さうだ……或見地から見るとね。それに君は眞査になつたが、結局、どんな重大な意味があるね？」

「僕をまるで赤ん坊扱ひにして二人が笑つてゐたんですよ！」

「單に、あの女が君に話した言葉を借りて言へば、『君が感情に驅られることを恐れ』たのさ。——それでタチアナ・バヴロヅナと一緒にゐて貰へば、より安全を感じたのさ。」

「それにしても、ああ、何て詭計だらう！ 考へて御覽なさい。彼女はあんなこと凡てを僕に第三者の聞いてゐる前で、タチアナ・バヴロヅナの聞いてゐる前で言はせたんですよ。だからあの人はすつかり僕の喋つたことを聞いてゐるんだ！ 考へるだけでもこれは恐ろしい！」

「君はつい今、婦人に就いての意見として寛大といふことを言つたね、そして寛大なのが有難い！ と言つたぢやないか！」

「若し僕がオセロで貴方がイアゴオだつたとして、貴方はよりよくはし得ませんでしたよ、……けれども僕は今笑つてゐます！ 何等オセロのやうなところは有り得ません、何故つて少しも類似の關係はなかつたんだから。そして實際何故笑ふんだらう？ 大したことをぢやない！ けれども彼女は僕よりも遙かに偉いと思ひますよ。で、僕は理想は失ひはしなかつたんです。……若し彼女が冗談にしたのなら許してやります。哀れな生意氣な少年に對する冗談は大したことぢやありませんからね！ それに彼女の魂には學生がりましたよ、他の凡てがどうあらうとも學生が残つてゐました。今も残つてゐる、將來も残つてゐるんです！ それで澤山！ 貴方はどうお考へです、僕は直ぐに真相を探りに彼女のところに参りませうか？」

私は「僕は今笑つてゐます！」と言つた。けれども眼には涙が一杯に溜つてゐたのだ。

「行きたければ行くがいいと思ふね。」

「僕はこんなことを皆貴方にお話したので、内心汚れたやうな氣持がしますよ。怒らないで下さいませけれども繰り返して申しますが人間は婦人に關したる事柄を第三者に話すことは出来ないんです。どんなに信頼される人でも理解しないでせうよ。天使だつて理解しないだらうと思ひますね。若し貴方が婦人を尊重なさるならば、誰にも打ち明けないで下さい！ 自分自身を尊重なさるなら誰にも打ち明けないで下さい！」

「いい。今僕は自分を尊重してゐないんです。さよなら。僕は自分を許すことが出来ませんよ。」

「馬鹿な、君は大袈裟だよ。今自分で、これは何でもないと君は言つたぢやないか。」

二人は水邊の岸に来て別れの挨拶をした。

「君は本當に暖い接吻、小さな子供が父親にするやうな接吻を一生する氣はないかね？」と彼は妙に聲に顫へを帯びて言つた。私は彼に恐い接吻をした。

「……何時までも現在の通りの純な人間でゐて呉れるやうに。」

私はこれまで彼に接吻したことがなかつた。それを彼が望んでゐるだらうとは想像することが出来なかつたのだ。

## 第六章

「無論行かう！」

私は家に急ぎながら決心した。「直ぐに行かう！ 恐らく彼女は一人で家にゐるだらう。いや、一人でゐようが誰かと一緒にゐようが、そんなことはどうでもいい。僕について出て下さいと言へるからな。彼女に會ふだらう、喫驚はしたつて兎に角會ふだらう。でも萬一會ひたくないと言つたら、是非會ひたいと申込んで呉れよう、非常に大切なことだからと書いてやれば多分例の手紙の一件だらうと考へて會

ふだらう。會つたらタチアナが其處にゐたかどうかを探り出すんだ。……それから？ 若し僕が誤解してゐたのなら僕は彼女の召使とならう、が若し間違つてゐなかつたならば、そして彼女が非難されるべきものだつたならば、萬事休すだ！ いづれの場合にせよ一切の始末が付くぢやないか！ 何をぐづぐづしてゐるんだ？ 一刻も失つちやいけない、行かう、行かう！」

私は決して忘れない、誇を以て思ひ出す、結局私が行かなかつたことを。それは何人にも知られないだらう、そして私の死と共に消えるだらう。然し私がそれを知つて、その瞬間に高潔な衝動を感じ得たことだけで充分である。

「これは誘惑なんだ。自分の背後に押し込まう」と私は再考して、遂に決心した。皆は事實を以て私を脅さうと試みた。けれども私はそれを否定して信じなかつた。そして彼女の純眞を信じる心を失はなかつたのだ！ それに何のために私は行かなければならないのか、何を探り出さなければならぬのか、何を探り出さなければならぬのか？ 何故彼女は私の「感情に驅られること」を恐れたり凡ての危険に對してタチアナ・パヴロヴナを備へたりなどしないで、私が彼女を信じるやうに私を信じ、私の純眞を信じなければならぬのか？ 彼女の理解する限りではまだ私は彼女の信頼に償しなかつたのに。私が信頼に償する人間であること、私が誘惑に壓倒される人間でないこと、私が彼女を誹謗する言葉には全然耳を傾けない人間であること——さうしたことを彼女が知らないのは大したことぢやない、何でもないことなんだ。私にはそれが解つてゐる。そしてそのために自重しよう、私自身の感情を尊重しよう

ろ。ああさうだ、彼女は一切のことをタチアナ・バヴロワの前で私に話させた。彼女はタチアナを其處に隠してゐた。而もタチアナが腰を掛けて耳を澄ましてゐることを（彼女は耳を澄まさないでは居れなかつたらうから）知つてゐたのだ。彼女が隠れて私を嘲笑つてゐるのを知つてゐたのだ。——これは恐ろしい、恐ろしい！ 然し……然しそれも止むを得なければ他にどうする方法があつたらう？ 彼女の立場にあつてどうすることが出来たらう。従つてそのためにどうして彼女を責め得よう！ 私にしてもクラフトのことで彼女に嘘を言つてゐるではないか。私が彼女を欺いたのも亦止むを得なかつたらうだ。止むを得なかつたから自分の意志に反して罪のない嘘を言つたのだ。

「ああ！」と私は惱まし氣に顔を赤めながら叫んだ。「僕が自分でしたのは何だらう！ 僕も彼女をタチアナ・バヴロワの前に曝したぢやないか？ 繰り返してつい今ヴァシロフに話したぢやないか。」が、結局其處には相違がある。それは單に手紙の問題であつた。私は事實は單に手紙のことをヴァシロフに話をしたきりだ。何故なら他に言ふこと、言ひ得ることが何にもなかつたから。ヴァシロフは洞察力のある人間だ。ふむ、然し、今日までも彼は心内に彼女に對する何といふ憎惡を持つてゐるのだらう！ 彼と彼女との間には過去に於て、どんな芝居がそしてどんなことに就いて、演ぜられたのだらうか？ 凡ては、無論虚榮に基因するのだ。ヴァシロフは限りなき虚榮以外に何等の感情をも感じ得ない人間だ！」

この最後の考は私の心に自然に生じたもので、私はそれに氣付きさへしなかつた。こんな事留めも

ないことが次から次へと心に浮んだ、そして私は真正直であつた。決して自分自身を欺くことをしなかつた。若しこの時に私の理解しなかつた何かがあるとすれば、それは自分が詭辯を弄したのではなく、單に脳髓が缺けてゐたためである。

私は非常に興奮して宿に歸つた。そして、何故だか解らないが、精神状態の混亂してゐる癖にいやに快活な氣持を解剖して見るのは恐ろしかつたので、出来るだけ氣を變へようと試みた。私は直ぐ主婦の處に行つた。たしかに夫との間に烈しい争ひがあつたことが見えてゐた。彼女は病勢の進んだ結核患者で、恐らく人のいい人間だつたらうけれど、凡ての結核患者と同じやうにむら氣であつた。私は直ぐに皆の間に這入つて調停を試みて例の下宿人の處へも行つた。この男はチエルヴァイアタといふ極めて輕薄な、小さな銀行員で、痘瘡のある間の抜けた人間であつた、私は大嫌ひな男だつたけれども交際はよくしてゐた。と言ふのは、私が時々實に賤しいことながら、この男と一緒になつてピオトル・イツポルト・イツチをなぶり者にすることがあつたからである。私は直ぐに轉宿を思ひ止まるやうに勧めた。又實際彼はどんな場合でも、本當に轉宿するといふ程怒りはしなかつたのだ。で、結局私が主婦を全く安心させて、それでけりが付いて了つた。そればかりでなく、私は彼女の枕を實に手際よく頭に當ててやつた。

「ピオトル・イツポルト・イツチはその枕をどうして當てたらいいんだか何時も解らないですよ」と彼女が恨を呑んだ聲で説明した。それから私は臺所に行つて彼女のためにからしの膏藥を忙がしい思を

して拵へにかつた。そして大きな奴を二つ旨く作り上げた。ピオトル・イツボリトウイチが羨しうに眺めてゐたが、私は彼をそれに觸れさせなかつた。さうして主婦の溢れるやうな感謝の涙を報ひられた。然し不意に私はその凡てが厭になつたこと、私は親切心で病人を看護してゐるのではなく、それとは違つた或物、非常に違つた動機からしてゐるんだといふことを不意に悟つたこと、——それを記憶してゐる。

私はマトヴェイを待ち侘びていらしてゐた。私はその晩、最後のこれきりとして骨牌で自分の運を試して見ようと決心してゐた。そして：：そして勝たうといふ必要以外に、私はして遊びたいといふ烈しい望みに驅られてゐた。然しそのために、私の興奮に堪へ難いものだつたらう。若し何處へも行かなかつたならば私は辛抱することが出来ないで彼女の處に行かなければならなかつた。

それはもうマトヴェイの来る時間が迫つてゐた。と、丁度その時、扉が開いて意外な客が遣入つて來た。ダリア・オニシモヅナが遣入つて來たのだ。私は顔を擧げて驚いた。彼女は以前に一度母の用事を以て來たことがあるので、私の宿を知つてゐたわけだ。私は彼女を坐らせて探るやうに、その身の周りを眺めやつた。

彼女は一口にも物を言はないで、ただつましやかな微笑を浮かべながら眞直に私の顔を覗き込んだ。

「リザのところから入らしたんですか？」

不意にかう訊いて見たくなつた。

「いいえ、別に何でもありませんの。」

私は、それから出掛けるところだと彼女に話した。彼女は又「別に何でもありませんの」と繰り返して、一分間だけお邪魔して歸るつもりだと言つた。私は咄嗟にある理由から彼女を氣の毒に感じた。——彼女は吾々の凡て、母からも、或は母以上にタチアナ・バヴロヅナから、多大の同情を寄せられてゐたといふことが出来るけれども、例のストルビエフ夫人の處に寝起きするやうになつてからは、どちらかと言へば忘れられかけてゐた。但し、吾々の内でもリザだけは度々彼女を訪問してゐたので、別であつた。私の考に依ると、この忘れられるといふ原因は彼女自身にあつたと思ふ。と言ふのは、彼女は自分自身を卑下して他人と離れてゐるといふ風な特殊な性質を持つてゐると同時に、卑屈なところと阿諛的な微笑とを持つてゐた。私は人として彼女のかうした微笑と感動的な表情とが嫌ひだつた。そして或場合にはとつと亡くなつた。娘のオリアのことなど忘れて悲しんでゐないのだと想つた。然しこの時には或理由でひどく彼女を氣の毒に感じた。

而も彼女は口をも利かないで突然眼を伏せて俯向いた。と同時にその腕は私の腰にからみついて、顔は私の膝頭のところに隠れて了つた。私の手を掴んだので、接吻する氣かと思つたが、さうではなく彼女はその手を自分の眼に持つて行つた。そして熱い涙を注ぎ掛けた。彼女は顔へながら泣いたが、それは聲のない涙であつた。幾らか困つた氣持を感じたけれども、同時に私は心を打たれて了つた。然し彼女は全く私を信頼して、少しも私が困つた氣持になつてゐるか知れないといふことを考へないで寄

り纏つてゐた。而もそのつい前には、おとどとした追従的な微笑を浮べてゐた彼女なのだ。

私は冷靜に落ち着くやうにと言ひ出した。

「有り難う、私は自分の身をどうしていいか解らないんですの。」と彼女は言つた。「日が暮れると直ぐにそれが辛抱出来かねるのです。——日が暮れると辛抱が出来ないで、街の中へ闇の中へと引き摺り出される気がいたしますよ。そして自分の空想から引き摺り込まれるのです。外に出ると一緒に、往來で娘に會へるだらうといふ思ひに胸が一杯になつて了ひます。私はふらふらと歩いて、娘に會ふやうに思ふのです。それはよその娘さんたちが歩いてゐらつしやるんですけれど、私はわざとその後を跟けて参ります。『娘ではなからうか、そこに娘がゐる』と私は考へますの。『本當にオリアだ！』私はかう夢想しつづけます。そしておしまひには眩暈を感じて気分が悪くなり、人混みの中で嘔いたり打つたりするのです。まるで酔ひどれのやうに躓くのです。私は自分を隠して誰とも會ひに参りません、何處に行つたからとて益々氣持が病むばかりなんですもの。今、お宅の傍を通り掛つて、私は『あの方の處へ行かう、あの方は誰よりも御親切なんだもの、そして今はゐらつしやる』と思ひましたの。どなたの役にも立たない、この哀れな者をおゆるし下さい。私、直ぐに歸ります、直ぐに……」

彼女は唐突に立ち上つて慌しく暇を告げた。馭者のマトヴェイが丁度その時にやつて來た。私は自分の轎に彼女を一緒に乗せて、途中、ストルビエフ夫人の家に送り届けた。

## 二

私は最近屢々ゼルスチョフの賭博場へ出入りし始めてゐた。私は三ヶ所ばかりの賭博場を廻つてゐたが連れは何時、かうした場所へ私を最初に紹介して呉れたセルゲイ公爵であつた。

その内の一軒は勝負が大抵フアロオ（譯者註。賭博の形式の一つで、指定の骨牌一組の中から現れる合がよくなくては續けて行けないといふことがよく解つてゐたし、それに此處には生意氣な駄法螺吹き）の若い、紳士が充ちてゐたのだ。セルゲイ公爵は此處を好いてゐた。——彼は賭博そのものも好きだつたけれど、特にかうした若い放蕩者と交るのが好きだつた。氣の付いたことだが、彼は私と一緒に参つても、一晩中、私とは離れてゐて、「その仲間」の誰にも紹介して呉れなかつたものだ。私は森の中の野人のやうに身のまはりを眺め廻した。で、時々人の注意を惹いた。

賭博臺の周圍では皆が氣輕に話し合つてゐた。然し私は一度、前の日に隣り合せて話こそしなかつたが笑ひ合つた或若いおしやれな男に、その翌日挨拶をしようとした。而も翌日にその同じ部屋でその男に挨拶して見ると、驚いたことに、その男は全く私に見覚えがなかつた、いや、もつと悪いことに、彼は大袈裟な喫驚した表情をしながら私を穴の明く程睨めた。そして笑つて見通して了つたのだ。そんなことで私は直ぐにこの場所を諦めて、寧ろ「泥溝」の方へ行くのを選んだ。

——それは「泥濘」といふより外に何と呼んでいいか解らない、球轉しのみじめな汚い小賭博場で、持主は女だつたが一度も顔を見せたことがなかつた。實際其處は恐ろしく自由で氣樂だつたし、それに士官だの富裕な商人なども度々出入してゐたが、賭博場の周囲は何彼につけてみすばらしく汚れてゐたのだ。然し一方それが皆を惹きつけてゐた。且つ私は其處では運がよかつたのだ。

然しその賭博場も、一度勝負の争ひが白熱化して果ては二組の間に烈しい喧嘩があつてから、私は見棄てて了つた。そしてその代りに、矢張りセルゲイ公爵に連れられてさつき言つたゼスルチョコフの賭博場に行き始めた。その家の主人は退職の大尉で、部屋々々の調子は可成り悪くなく、軍隊式で簡略、そして事務的であり、厭に儀式張つたところがあつた。騒々しい俗っぽいふざけ屋だの放埒な男などは餘り出入りしなかつた。而もその賭金は時々大きく、勝負の種類もフアロオと球轉しとの二つがあつた。

私はこの家にその夜即ち十一月の十五日になるまでには僅か二回しか行つてゐなかつたが、ゼスルチョコフはもう私を見知つてゐるだらうと思つた。けれども別にその家で知人といつては一人もなかつた。幸か不幸かセルゲイ公爵はその夜、私の見棄てた若いでも、紳士たちの集まる賭博場にダルザンと一緒に入り浸つてゐたので、夜半になるまで姿を見せなかつた。それでその夜私は一人で、見知らぬ連中の中にぼかんとしてゐる自分を見出したのだ。

若し彼に讀者あつて、私の冒険に至るまでの物語をことごとく讀んで下すつたとすれば、無論、私が何等社交的に出來てゐない人間だといふことを今更説明する必要もないだらうと思ふ。厄介なのは私が

交遊に於て、如何に振舞つていいか解らないことである。若し私が何處か、多勢の所謂立派な人たちの間に行くとする、その場合、常に私は、それだけの人たち全部が私に向ける瞳のために、恰も電氣で打たれてゐるもののやうに感じるのだ。それが私を全く縮み上らせる、肉體的に縮み上らせる、單に社交上の家庭のやうな場所のみでなく、劇場などでさへもさうなのだ。かうした賭博場で堂々と振舞ふにはどうすればいいか全く私には解らなかつた。——私は自分の極端な因循と懇懇とを自分自身に責めながら、ちつと坐つてゐるか、でなくば、不意に立ち上つて何か突飛なことをし始めるのだ。而も一方で何等取るに足りない、又、私から言つても年の若い連中が、驚嘆に價する位に落付いて振舞ふことを知つてゐる、それが何よりも私をいらいらさせて、ために私は益々自制を失つて了ふ。本當のところを語るとして私は正直に打ち明けるが、その夜も、その場の空氣、骨牌に依つて勝つ金さへが私にとつてはむしろやくしやとする苦しみとなつた。全くそれは苦しみであつた。無論私はその中から強烈な享樂を見出した。けれどもこの享樂は苦惱を犠牲としてゐた。——凡てのもの、人々も賭博も、殊に何よりも彼等の中に交つてゐる自分自身が、溜らなく汚れたものに思はれた。「勝つたなら早速止して了ふんだ！」と私は徹夜して賭博をした翌日、自分の宿で眼覺めた時に何時も言ふ口癖であつた。それならば再び、私が明らかに金を欲してゐない以上、その勝たうといふ欲望をどう説明することが出来るか？ 但し私は自分は、「競技のために賭博をするのだ、その快樂のため、その冒險のため、その興奮のためにするのだ、決して勝たうがためにするのではない」といふやうな説明で何時もお極まりの言葉を繰り返すつも

りではない。私は恐ろしく金の必要に迫られてゐた。そしてこれは自分の選んだ道ではなかつたけれども、又自分の思想ではなかつたけれども、兎に角幾分か、経験の道程として試みて見ようと決心してゐたのだ。私は絶えず一つの強い考を抱いてゐた。それは、「お前は若し人間が充分に意志の力を持つてゐたならば富豪になり得る可能性があるといふ意思を持つてゐた。そして即ちお前はお前の意思の力を試みた。それ故この場合にもお前自身をそれ程強く示して見ろ。——お前の思想に對して要するよりも、この球轉しに對して要する方が、より多くの意思の力を必要とするなんてことがあるかね？」——かう私は屢々私自身に繰り返して言つた。そして相變らず私はその信念、——即ち偶然の勝負に於て、若し人間が完全にその意志を統一すれば、従つて、その智慧の微妙とその推定力とが保持されてゐたならばその人間は不運を排して必ず勝ち得るに相違ないといふ信念を持つてゐたのだから、自然の結果として私は、自分の意思の力を失つて詰らない子供のやうに興奮のために我を忘れて了ふといふやうな時には常に、益々いらいらと苛立たないではをれなくなつたのだ。

「俺は飢餓は堪へるかも知れぬが、こんな風に馬鹿げた状態になる自分を制することは不可能だ！」といふ考が私を脅かした。且つ、いかに自分が滑稽で卑しく見えやうとも、自分の内部には、何時か私に對する彼等の考を一變せしめるに足る力を豊富に貯へてゐるのだといふ意識——その意識は私のみじめな幼年時代から今日まで、私にとつて、生命の唯一の源泉であり、光明であり、權威であり、武器であり慰藉であつた。若しそれが無かつたならば、私は早く小さな幼年の日に於て自殺してゐたかも知れない。

いのだ。それ故、その賭博臺に向つて自分自身が實に滑稽な馬鹿げた哀れな人間になつたのを見て、私は苛立たないではをれないのだ。賭博を私が諦め得ないのもさうした理由があるからだ、そのことが今は明瞭に解つてゐる。

これが第一の主要な理由ではあるが、然しこれを離れて、私の卑しい虚榮心も傷つけられてゐた。金をなくすることは、セルゲイ公爵の眼に映じる私の價値をより低下した。いや、本人は敢てこのことに解れなかつたけれどもヴァシロフも、その他誰も彼も、タチアナ・バヴロワナでさへも、私を次第に低く評價した。——かうしたことを私は考へ、そして感じたのだ。

最後に私はこれ以外の告白をして置きたい。それは、この時になつて、私は墮落し掛けてゐたといふことである。——私には料理屋の七品附食事を止すことは始んど出来なくなつてゐた。いや、マトツエイも、英國の商店も見棄て得なかつたし、理髪屋での人氣も、その他それに類したこと凡てを氣にしないではをれなくなつてゐたのだ。私は當時に於ても、そのことを意識してはゐたが、その考を受け容れることを拒んだのだ。今は此處に書くのも顔の赧らむのを覚える。

### 三

見知らぬ連中の間にただ一人ゐる自分を見出しながら、私は先づ卓子の隅に腰を卸して、小さな賭をやり始めた。二時間ばかりの間は亂れることもなくちつとしてゐた、と言ふのは、その二時間の間の勝



負はひどく平凡で、大したことは何も起らなかったからである。私は幾つかの大きい機会を逸して、自分の氣持を亂さないやうに、そして冷靜で落着きとを失はないやうにと努めた。二時間目の終りになつて見ると負けても勝つてもゐなかつた。自分の三百留は別にして、十か十五留位をなくしてゐたのだ。この詰らない結果が私をむしろくしゃやさせたばかりか、折悪く不快な胸の悪くなるやうな事が起つた——私はかうした賭博場には屢々泥棒が出入りするといふことを知つてゐた。而もその泥棒は往來にゐる單なる拘摸ではなく、有名な賭博者であつた。私も有名な賭博者のアフエルドフが泥棒であることをよく知つてゐた。彼は相變らず町に出没してゐて、その軽快な二頭馬車を走らせられたのと會つたのはつい先日のことである。が、彼は泥棒で、而も私の金を盗んだ。然しこの事件は後に述べるとしよう、この店の出來事は單なる序幕に過ぎなかつたのだ。

私は卓子の隅に坐つて二時間を過した。私の傍には左手に、最初からずつと通して厭なちつぽけなおいやいな男がゐた。屹度猶太人だらうと思はれる、この男は何か新聞に關係してゐて、何かを書いて出版さへしてゐたのだ。一番おしまいに私は突然二千留を勝つた。そして私の眼の前には二枚の赤い紙幣が置かれた。と、この厭なちつぽけな猶太人は不意に手を延ばしてその紙幣の一枚を取り上げた。私は止めようとしたが、彼は最も亂暴な態度で、私に向つてこんなことを、これは自分の金だ、自分が今賭けて勝つた金だといふことを聲は少しも荒げないで直ぐに言つた。そして話をつづけるのを避けて部屋を出て了つた。私は全く呆氣にとられて啞然としてゐたが、大きな思想を懸念して、呪詛の言葉と一緒

に椅子を離れて外に出た。私は議論したくはなかつた。それで彼に赤い紙幣の贈物をして了つた。それに實際亂暴な泥棒に係はるのは厄介だつたかも知れない、何故なら私はいい機会を逸して了つて勝負は又續けて行はれてゐたから。而もこれは私の大過失だつたといふ譯は後になつて解つたことながら、その時、どう始末が付くかと傍で見物してゐた三四人の者がゐたが、この連中が私のわけなく屈伏して了つたのを見て、矢張り同じやうなやり方で私の金を取るやうな破目になつたのだ。

それは丁度十二時であつた。私は他の部屋に入り込んで一寸思案した擧句、新しい策戦を立てた。そして引き返して來ると、私は持金の全部を親元の處で半イムベリアル（註七留半の露國金貨）に換へて貰つた。都合四十個の半イムベリアルを私は受け取つた。それを十に分けて、四個づつ十回に亘つて、而も全部零に賭けて見ようと決心したのだ。

「若し勝てば運がいいんだ。若し負けたなら尙更結構、二度と賭博はやらないのだ。」と私は思つた。それに、この二時間を通じて零の出たことはなかつたのだから、遂に誰もその零には賭ける者がゐなかつたといふことも言つて置く。

私は突つ立つたまま、黙つて顔を擧め齒を喰ひしばつて賭金を下した。三回目になつて、ゼルスチコフは大聲で零と嗷鳴つた。それは一日中出なかつた數なのだ。百四十個の半イムベリアルが金貨で私の手許に流れ込んだ。また七回の機會が残つてゐるといふので私は矢張りやり續けたが、而も周圍の悉くのものゝが渦を捲いて眼の前に眺めてゐるやうな氣がした。

「此處へ入らつしやい！」と私は、卓子の向う側の右手、私が先刻まで坐つてゐた席の隣りにゐる賭博者に唖鳴り掛けた。その男は半白の髪に口髯を蓄へた赤ら顔の夜會服を着た紳士だったが、其處に數時間の間、實によく辛抱して僅かの賭金をしながら次々に負け續けてゐたのだ。

「此處に入らつしやい、この端に！ 此處なら運が向きますよ！」

「僕に話し掛けてお出でなんですか？」

口髯の紳士は卓子の一方から聲に意地の悪い驚きを見せながら唖鳴り返した。

「ええ、貴方ですよ！ 其處にゐては、おしまひまで負け通しぢやありませんか！」

「そりや貴方の知つたことぢやない、差し出ないで下さいよ！」

然し私は自分を制することが出来なかつた。と、かなりの年輩らしい士官が卓子の一方に私と向ひ合つて腰掛けてゐたが、私の賭金を眺めながら隣りの男にかう話し掛けた。

「妙だな、零といふのは。いや、僕は零なんか賭けたくないな。」

「お賭けなさいよ、大佐！」と私は次の賭金を置きながら叫んだ。

「僕のことばうつちやつて置いて下さい。君の忠告の押賣りは止していただきたい。」と彼は鋭く唖鳴つた。「君は餘りはしやき過ぎるよ。」

「僕はいい忠告をして差し上げてゐるんですがね。直ぐに零が出ると賭けたくはありませんか。十金貨を賭けますよ、如何です？」

かう言ひながら私は十個の半イムペリアルを前に置いた。

「十個の金貨か！ それは僕も願ひますよ。」と彼は氣のない烈しい調子で、「君の反對で、零が出ないと賭けよう。」

「十 Louis Dor ですよ、大佐。」

「何だね、その十 Louis Dor については？」

「十個の半イムペリアルのことですよ、大佐。社交の言葉で言ふと十 Louis Dor。」

「成程、ぢや半イムペリアルとおつしやい。そして僕に向つて冗談は止して呉れ給へな。」

私は無論その賭けに勝つ望みはなかつた。——再び零が現れるのは三十六に對する一の割合なのだから。然し私は盛勢を張つて敢て零に賭けた。と言ふのは皆の注視を惹きたいと思つたからである。此處にゐる連中の凡てが私を好いてゐないこと、及びその好いてゐないことを私に知らせて嬉しがつてゐることを、或理由から私はよく知つてゐた。賭博の車は廻り始めた。——そして誰も彼もが、あつと驚いたことに、それは再び零のところまで止つたのだ！ 其處には實際滿堂の叫聲が聞えた。私の成功した輝きが皆の眼を全くくらませて了つたのだ。再び百四十個の半イムペリアル金貨が私に拂はれた。ゼルスチヨフがその一部を紙幣に換へて欲しくはないかと訊いたが、その返事に何だか譯の解らないことを私は呟いた。何故と言ふに、私は全く自分自身を冷や着いて、きつぱりと表現することが出来なかつたから。頭はくるくると廻轉し、足は淨き上るやうに感じた。と突然私は即座に大冒險をやつて見ようと思つた。

—それ以前から私はより多く何かをしたい、他の賭をしたい、誰かから數千を奪ひ去りたいといふ慾望を持つてゐたのだ。それで機械的に私は目の前の紙幣と金貨とを手の凹みに掬ひ上げたが、氣持が亂れてゐるのでその計算が出来なかつた。と、その瞬間に私はセルゲイ公爵とダルザンとが私の背後に突つ立つてゐるのに氣がついた。彼等は丁度フアオ賭博場からその時来たばかりであつたが、後で聞いたところに依ると其處で最後の一厘まで根こそぎ取られたとのことであつた。

「ああ！ ダルザン。」と私は叫んだ。「此處は運がよござんすよ！ 零にお賭けなさい！」

「僕は負けちまつて金を持つてませんよ。」

彼はものうげに答へた。セルゲイ公爵は實際私に氣が付きもせず認めてゐない風であつた。

「金は此處にあります。」と私は自分の金貨の堆く積まれたのを指しながら叫んだ。「いくらでもお入用なだけ。」

「何だ馬鹿な！」とダルザンは眞赤になつた。「僕は金を呉れとはお願いしませんでしたよ、え。」

「呼んでゐますよ、貴方を。」と言つてその時ゼルスチコフが私の袖を引いた。

十個の半インベリアルを私に負けた例の大佐は、殆んど罵るやうな調子で、先刻から數度も私に呷鳴り掛けてゐたのだ。

「さあ、これを受け取つて呉れ給へ！」と言ひながら、憤怒のために顔は紫色になつてゐた。「後になつて金を受け取らないと言はれちや困るからね。計算して呉れ給へ。」

「僕は貴方を信じますよ、信じますよ、大佐。計算なしでね。だからどうかそんな風に呷鳴らないで下げ下さい。怒らなすで下さい。」

かう言ひながら、私はその金を手許に引き寄せた。

「君の話は誰が他の者にして呉れ給へ、お願いだ。僕に無理強ひをされるのは溜らないよ。君のお相手なんかこりこりさ！」

大佐は吐き出すやうに言つた。

「妙だね、あんな連中を入れるのは。」——「一體彼奴は何だい？」——「ほんの青二才ぢやないか。」などといふ低い囁きを私は周圍に聞いた。

然し私は耳を傾けなかつた。そして氣まぐれに賭けたが、今度は零でなく、最初の十八に百留の紙幣全部を賭けた。

「行かう、ダルザン。」

私はセルゲイ公爵が背後でかう言つてゐるのを聞いた。

「家へ？」と私は振り返つて訊いた。「待つて下さい、僕も一緒に行くから。もう充分勝つてますからね。」私の賭は勝つた。そして多額の金を得てゐた。「充分だ！」と私は叫んで金を勘定せずには震へる手先で金貨を集めてポケットに投げ込み、拙い手付きで紙幣を掴んでは直ぐに横のポケットに押し込み始めた。と、不意に、私の右隣りに座を占めて多額の賭金をしてゐた例のアフェルドフが、指輪の嵌つた太い手

をぐつと延ばして、私の三百留の紙幣を抑へて了つた。

「失禮ながら、これは貴方のぢやありません。」

聲は寧ろ穏やかだつたが、鋭いきつぱりとした調子で彼はかう言つた。

これはさうしたことが連続してこの後起る、その序幕であつた。今、私は名譽に賭けてその三百留の紙幣が自分の所有だつたと誓ふが、不幸にもその時は、それが自分のものだと思ひながらも、矢張り一寸した疑ひを持つてゐたのだ。そして正直な人間にとつてはそれで充分である。かくて私は正直な人間なのだ。凡てを變にしたのは、私がある時アフエルトフの泥棒であることを知らなかつたからである。私はその名前すら知つてゐなかつた。それ故、その瞬間に私は、これは自分が間違つたのだ。この三百留は全く今自分に拂はれた金ではないのだと、かう考へるやうな事になつた。私は自分の手許に這入つた金を全然勘定もしないで單に手で掻き集めるきりにしてゐた。そしてアフエルトフの前にも亦、金が積まれてあつて私の金と極く接近してゐた。但し澤山ではなく、且つ勘定をした金であつたが。殊にアフエルトフは此處ではよく知られてゐて金持ちらしく見え、態度も立派であつた。——そんなことが一緒になつて凡て私に影響してゐたので、再び私は抗辯をしなかつた。何といふ恐ろしい間違ひだらう！ 堅な溜らない出来事は凡て私の狂熱の結果だつたのだ。

「僕は非常に残念です。はつきり覚えてゐませんので。けれども全くこれは僕のものだと思ひますが。」と私は憤怒のために唇を震はしながら言ひ出した。その言葉が直ぐに皆の間に騒ぎを起させた。

「そんな風におつしやるなら、はつきり覚えてゐらつしやるのだ。けれども御丁寧に貴方ははつきり覚えてゐないとおつしやる。」とアフエルトフは堪へられる程に尊大な調子で言つた。

「誰だ、あの男は？」「そんなことのある筈がない？」などといふ騒ぎを私は耳にした。

「あの男は初めてぢやないよ。ついでつぎも小さな勝負で勝つた三百留紙幣をレド、ベルヒに横取りされたお婆さんか。お婆さんか。」

かう言ふ卑しい小聲が何處か近くから聞えて來た。

「それぞ澤山です。澤山です。」と私は叫んだ。僕は抗議をしてるんぢやありません。お取んなさい

……何處に、公爵は……ソコルスキイ公爵とダルザンは何處に参りました？ 歸つたんですか？ 皆さん、ソコルスキイ公爵とダルザンはどちらから歸つたか御存知ですか？」

そして遂に私は自分の金を集めながら、その半インベリアルを幾分をポケットに押し込むことが出来ないので、手に纏んだまま、セルゲイ公爵とダルザンとの後を追つかけて駆け出した。恐らく讀者は私が自分を借まないで、その時どんな状態にあつたかといふことと私の身苦しさの凡てとを述べてゐるのが解るだらうと思ふ。そしてこれは次に起る事件の可能性を説明してゐるわけなのだ。

セルゲイ公爵とダルザンとは階段を降りてゐた。私の叫聲だの呼聲だのに些の注意も拂はないで、私は二人に追ひ付いた。が、廣間の番人の前に一寸立ち止つて、何故かは神しか知らないが、私は三個の半インベリアルをその手に握らせたのだ。番人は呆然として私を睨めたきり、有り難うとさへ言

はなかつた。然しそんなことは私にとつてどうでもいいことだ。若しマトヴェイがゐたならば、これにも一掴みの金貨をやらなければならぬ、又實際やらうと思つてゐたのだが、階段を飛び降りながら、ふと、此處に到着すると同時に彼を家に歸したことを思ひ出した。

丁度其處へセルゲイ公爵の馬が這入つて來た。で、彼はその櫓の中に入り込んだ。

「僕も一緒に参りますよ、公爵、貴方の宅へ」と私は叫んだ。空席に這入らうとして毛皮の覆ひを掴みそれをさつと開けながら。すると不意に思ひ掛けなくダルザンが私を飛び越えて櫓に這入り込んだ。と、馭者は私の手から毛皮の覆ひを引つたくつて、彼等二人を包んで了つた。

「畜生！」と私は啞然として唸つた。それは恰も私が下僕のやうにダルザンのために覆ひを開けてやつたやうなものだ。

「家へ！」セルゲイ公爵は叫んだ。

「止れ！」と私は櫓を掴みながら唸つた。然し馬は走り出した。そして私は雪の中に轉んだ。私は彼等が嘲笑つてゐたやうにさへ感じた。

「私ははね起きて、最初に出會つた櫓を備ひ、絶えず烈しく念がしながら、セルゲイ公爵の後をまつしぐらに追つ掛けた。

## 四

運の悪いことに、哀れな馬は不自然なろい速力で這ふやうな走り方をした。馭者には一留を與へる約束をして置いたのに。馭者はその一留を備けるために馬を罵るきりで、他に何もしなかつた。私の氣持は沈んで了つた。馭者に話し掛けたけれども、私は言葉さへはつきり利けなかつた。そして譯の解らなことを何か呟いた。——これがセルゲイ公爵の處に急いでゐる時の有様だつたのだ！

彼は歸つて來たばかりのところであつた。ダルザンとは途中で別れて一人きりでゐた。蒼い不機嫌な顔をして彼は書齋の中をあちこちと歩き廻つてゐた。繰り返して言ふが、その晩彼はひどく負けたのだ。彼は私を見ると喫驚した。

「又か君は！」と顔を曇めながら言つた。

「清算するために参りましたよ！」と私は息もつかずに言つた。「どうしてあんなひどい目に僕を會せただんです！」

彼は不審かしさうに私を眺めた。

「若し君方がダルザンと一緒に歸るつもりだつたのなら、あの男と一緒に行くんだと返事をなさるべきぢやありませんか。それに貴方は馬を走らせて了つた。僕は……」

「ああさうだ。君は雪の中に倒れましたね。」

彼は私の顔を覗き込んで笑つた。

「ああした侮辱は血闘に依る以外復讐出来ませんよ。で、先づ第一に請算をしたい……」

かう言ひながら私は儘へる指先で金を引き出して長椅子と大理石卓の上に、そして開いた本の上にも堆く積み上げた。幾つかの金貨は敷布の上にこぼれ落ちた。

「おおさうだ。君は勝つた、勝つたらしいな？……君の様子で解るよ。」

彼はまた嘗て私に向つてそんな傲慢な口の利き方をしたことはなかつた。私はひどく眞青になつてゐた。

「さあ……いくら知らないが……請算しなきやいけません。……僕は貴方に三千留借りてゐる……或はそれに近い金でしたか？……それよりも多いんですか、少いんですか？」

「僕は返して呉れとは言つてゐませんよ。」

「いや、僕は拂ひたいんです。何故かは貴方が御承知の筈だ。その捲いた紙幣の中に千留あります、さあ？」

私は儘へる手で金を勘定しようとしたが、それは止した。「どうでもいい、千留あることは解つてゐる。それで、その千留は僕自身のために取つて置くが、後は全部、この一山の皆ですよ、全部貴方に借りてる、いや借りてる一部として受け取つて下さい。——千留か、或はもつとあるでせうから！」

「ちや千留は君自身のために取つて置くと言ふんですか？」とゼルゲイ公爵は齒を見せて笑つた。

「それも呉れとおつしやるんですか？　こんな關係……僕の意味は……僕はそれを呉れとおつしやらないだらうと思つた。……でもお入用なら、さあ……！」

「いや必要はない、彼は輕蔑したやうに私から眼を離して又部屋の中をあちこちし始めた。

「それにどうしたんだらうね、返したいなんて氣になつたのは？」

彼は又不意に振り返つて、顔に恐ろしい挑み掛るやうな色を見せた。

「僕に満足を取つて下すつたことに就いて自由に主張するためにお返ししようといふんですよ！」と私は叫んだ。

「何時までも何時までも譯の解らない言葉だの身振りだのをしやがる！」と彼は狂氣のやうに私に向つて突然地團太を踏んだ。「僕は君たちから逃げたいんだよ、君からも君のヴァシロフからも。」

「どうかしましたね、貴方は！」と私は喫驚した。そして實際そんな風に見えたのだ。

「君は僕を死ぬる程惱ませるよ、その調子の高い謔言で。謔言、謔言、謔言の外にもありやしない！例へば名譽といふことに就いての言草だ！ふん！僕はすつと前から君に交際しようと思つてゐたんだ。……それで愉快だ、その時が来たのは實に愉快だ。僕は自分を束縛内にあると考へて、君と無理に

も應待しなきやならないのが恥しかつた。いや君ばかりぢやない、ヴァシロフも一緒だよ！が、今は如何なる意味でも、如何なる意味でも自分を束縛内にあるとは考へない。だから言はして貰ひたいんだ！君のヴァシロフは僕にアマモフ夫人を攻撃させ、その悪口を言ひ觸れるやうにさせたんだ。……そんな調子で僕に名譽といふことなど言はないで呉れ給へ。何故つて君たちは破廉恥な人間なんだから。……君たち二人ともだよ。——僕は君が僕の金を受け取りながら恥ぢてゐなかつたのが不思議だ

よー」

私の眼前は眞暗になつた。

「僕は友だちとして貴方から借りたのです。」と私は恐ろしく沈んで言ひ出した。「貴方は御自分で差し出して下さつた。で、僕は貴方の愛情だと信じて……」

「僕は君の友だちぢやない！金を上げたのは友だちだからといふ理由ぢやない。君は理由を知つてるよ。」

「僕は貴方がヴァシロフから借りてる金の内から借りたんだ、無論それは滑稽だけれども僕は……」  
 「ヴァシロフの許可も受けなくて、その金を借りることは出来ないよ……それに僕も彼の許可なしで君にやる譯には行かないんだ。僕は僕自身の金を君にやつたんだ。そのことを君は知つてゐた。知つてゐて受け取つた。そして……」

「何を僕が知つてるんだ？何といふ道化者なんだ！何故それを言はなかつたんです？」

「君の綺麗な妹さんのためだよ」

彼は私の顔に向つて眞正面から笑ひ掛けた。

「地獄にでも行け！」と私は呶鳴つた。「これを皆受け取つて呉れ、此處に後の千留があるよ！さあこれ五ひに自由だ。で、明日は……」

そして私は、自分の生活費として残して置かうと思つた一千留の紙幣を彼に敲きつけた。紙幣は彼の

腰に當つて床にはらばちと散つた。

彼は三步大股に歩いて私の傍に寄つた。

「君は敢て知らないと言ふんだね、——」と彼は一語一語に強く力を縮めて言つた。「すつと僕の金を受け取りながら、君は、君の妹が僕のために子供を生んでることを知らなかつたと言ふんだね？」

「何だつて、何だつて！」  
 不意に足に力がなくなつて私は力なく長椅子に沈んで了つた。彼が後に話したところによると私は文字通りハンカチのやうに眞白くなつたといふ。

私は呆然としてゐた。二人は矢張り黙つてお互ひの顔を覗め合つてゐた。不快な光が彼の顔を掠めたと思ふと彼は前屈みになつて私の肩を持つて私の身體を支へ始めた。よく覺えてゐるが、その時彼の唇には、信じられないといふ色と驚きの色とを含んだ微笑が現れてゐた。さうだ、彼は決して自分の言葉がそれ程の結果を惹き起さうとは思つてゐなかつたのだ。何故なら彼は私が知つてゐることと全く信じてゐたのだから。

遂に私は氣が遠くなつた。然しそれは一瞬の間で、直ぐに正氣に返つた。私は立ち止つて彼を覗め、さて考へた。——咄嗟にあらゆる真相が私の心に見え始めた。それはそれ程のろろと來たのだ！若し誰かがその前に、さうした瞬間に如何にすべきかと私に訊いたならば、無論私は八つ裂きにすべきだと答へたに相違ない。然るに實際は全く反對であつた。——私は不意に両手で顔を覆うて、烈しく嘔り

泣き始めたのだ。それは自然に出る涙り泣きだつた。突然子供の心が青年の心の中に再び甦つて来たのだ。私の魂の過半は依然子供の魂に充ちてゐるらしかつた。

「私は長椅子に倒れて、リザー！ リザー！ 可哀さうな女！」と嘔り泣き續けた。セルゲイ公爵は直ぐにもう凡てを信じてゐた。

「ああ、君に對して僕は何て悪い態度をしたことだらう！」と彼は深い惱ましい聲で言つた。「自分の疑念の中で何と君を誤解してゐたことだらう、恐ろしい位だ……許して呉れ給へ、アルカアディ・マカロフ イツチ！」

私は唐突に飛び起きて何か彼に言はうとして彼の前に突つ立つた。けれども何も言はなかつた。そして部屋を、その建物を駆け出した。

私は足を曳き摺りながら歸つたが、どうして宿に着いたかは解らなかつた。私は暗闇の中の寢床に身を横たへて、顔を枕に深く埋め、考へに考へた。さうした時に、秩序のある連絡のある考へごとと性列能不可能である。思素力と想像力とはきれぎれに懷れて了つて、何だか全く見當外れのことを夢想し出した。それが何であつたか記憶にも残つてゐない。悲しみと亂れとは突然鬱悶と一緒になつて心に迫つて来た。私は両手を曲げて又叫んだ。

「リザー！ リザー！」

さうして又私は泣き始めた。どうして眠りに落ちたか私は覚えてゐない。けれども私は氣持のいい、安らかな眠りに落ちた。

第七章

○私な翌朝八時に起きて直ぐに扉に錠を卸し、窓側に坐つて考へ始めた。——さうしたまま十時過ぎまでりつづけた。その間に二度女中が扉を敲いたけれど開けないで歸して了つた。遂に十一時になつて又敲き音がした。又女中だらうと思つて呷鳴らうとしたが、それはリザーであつた。女中も彼女と一緒に這入つて来て珈琲を運んだり暖爐を焚く準備をしたりした。女中から免れるわけに行かなかつたので、私はそのラモクラが焚木を調へたり火を燃したりする間、小さき部屋の中を彼方此方と歩き廻つた。リザーは話を始めないで、いや見向きさへもしないで。女中は故意にのろ／＼と愚圖つてゐるらしかつた。自分が二人の話の邪魔をしてゐるなと勘付くと女中といふものは何時もきまつてそんな風に愚圖々々するのだ。

「珈琲が冷たくなりますよ。」と不意にリザーは言つた。

私は彼女を見やつた。——何等當惑したらしい跡もなく、全く冷靜で、その唇のあたりには微笑さへ含んでゐた。

「これが女といふものだ。」と私は考へて輕蔑的に肩を聳まさないでは居られなかつた。さうさう女中は暖



爐の火を燃しつけたが、それから部屋を掃除し掛けた。私は癪に觸つて追ひ出したまま又扉に錠を卸した。

「どうしたの。何故又扉に錠なんか卸したの？」とリザは訊いた。

私は彼女の前に立つた。

「リザ。お前がこんなにまで僕を欺かうとは實に思ひも染めなかつたよ！」と唐突に私は叫んだ。そんな風に話を始めようとは決して考へてゐなかつたのに。そして涙の出る程動かされる代りに、豫想もしない腹立たしい感じが胸を針のやうに衝いて來た。

リザはさつと顔を蔽めた。けれども顔は外向けなくて眞正面から私の顔を窺き込んだ。

「お待ち、リザ、お待ち。ああ、何て僕は馬鹿だつたらう！ 然し僕は果して馬鹿だつたか？ 何も彼もが昨日はつきりするまでは、そのことに就いて何の暗示も僕は受けてゐなかつたんだ。それに何を以て豫め察しることが出來たらうね？ お前がストルビエフ夫人の處に行くことから、そして又例の……ダリア・オニシモヅナの處に行くことから何を察し得たらう？ 反對に僕はお前を太陽として眺めてたんだよ、リザ。それに何でさうしたことがあると夢にだつて想ひ得たらうか？ お前は覺えてるかね、二ヶ月前、あの男の家でお前と出會つて、どんなに僕たちは太陽の下を楽しく話し興じたか……その時は起つてゐたのかね、その時は？」

彼女は答の代りに頷いて見せた。

「ぢや、その時も僕を欺いてゐたんだ！ それは僕が馬鹿だからぢやないよ、リザ。それは僕の利己主義さ、馬鹿以上のもの、僕の心の利己主義……恐らくお前の神聖を信じる僕の信念なんだ。ああ！ 僕は何時もお前が僕よりも凡て限りなく高潔だと信じて來た。——それにこんなことがあらうとは！ それに昨日僕は非常に變つたことに接したんだ！」

かう言つて私は此處でカテリナ・ニコラエヅナのことを不意に思ひ出した。と何物かが心臓を針のやうに差すので、私は眞赤に顔を染めた。その瞬間私が親切でなかつたのは自然なことであつた。

「でも何のために御自分を辨護してゐらつてるやんです？ 貴方は御自分を辨解するために急いでゐらつしやるやうね、アルカアデイ、何のためなんですの？」

リザは聲はきつぱりとしてゐたが、かう優しく穏やかに訊いた。

「何のためにだつて？ 今僕は何をしたらいいんだらう？ その質問の外に何にもなかつたんならう。面もお前は何のためにと訊く。僕はどうしていいか解らないよ！ さうした場合に、兄たるものがどうすればいいのか、僕には解らないのだ……彼奴等が手に拳銃を持つて、彼女等に結婚をしろと強ひることとは僕も知つてゐる……僕は名譽ある人間のすべき振舞をしなければならぬ！ が、ただその名譽ある人間が如何に振舞ふべきかを知らないのだ……何故？ それは僕たちが紳士階級でないからさ。それに彼は公爵で自分の履歴を考へなきやならぬ。——従つて僕たち正直な人間の言ふことは聞かないだらうよ。私たちは兄と妹とでもない、何とも言へない、親のない農奴の私生兒なんだ。で、公爵は農奴とは

結婚しないよ。ああ、何て胸の悪くなるやうな事實だらう！ それにお前は今坐つて僕に喫驚してゐる。」

「貴方は厭に苦しんでゐらつしやるわね」とリザは又顔を一寸赧めた。「でも貴方は餘り急いで、御自分を苦しめてゐらつしやるんだわ。」

「餘り急いでゐるつて？ 何故、お前は僕が愚圖々々してゐないと思つてゐるのかい？」と私は到頭立腹して呶鳴り出した。「どんな恥辱を僕は辛抱したことだらう！ どんなに公爵は僕を侮辱したことだらう！今は僕にはつきり解つて來た。それを楯のやうにはつきり見ることが出来る。——公爵はずつと前から僕が彼とお前との關係を察してゐると想像して疑はなかつたんだ。察してゐながら口を噤んで、而も一方では「自分の名譽あること」を誇つてゐやがる、といふのが僕に對する公爵の解釋で又さう解釋するのも決して無理ぢやないよ！ 僕が自分の妹のために、妹を汚辱されたために金を彼から貰つてゐるか公爵は思つてゐた。あんなに彼が厭がつたのはこれだつた。けれどもさう考へるのも當り前だと僕は思ふよ。兄だといふので、毎日下らない男を歓迎しなきやならぬ、それから名譽といふことに就いて議論しなきやならぬ……それは心臓を、彼の心臓でさへもを化石にしたことだらう！ 而もお前はそれを黙認して、僕に前以て戒めることをしなかつたんだ！ 彼は全く僕を輕蔑し切つてステベルコフにさへ僕のことを話したばかりか、昨日は僕からもヴァシロフからも皆から通れたいと言つた。そしてステベルコフもステベルコフだ！「アンナ・アンドレイヴナもリザヴェタ・マカロヴナと同じ貴方の御姉妹

でせう」と言つて、僕の後から「あの人の金よりも僕の金の方がいいですよ」と呶鳴つた。而も僕は、生意氣にも公爵の長椅子に寝そべつて、恰も自分が對等の人間でもあるやうに無理に彼の知人となへてゐたんだ、何といふことだらう！ それにも係はらずお前はその悉くを黙認した。恐らく今はグルザンも知つてゐよう、少くとも昨夜の彼の調子から判斷して見ると……皆が皆が知つてゐるんだ、僕きり除けば！」

「誰も何にも知つてやしませんよ。友だちなんかの誰にも公爵は話してゐない、話すことも出来ないの。」とリザは附け加へた。「そしてステベルコフのことで私の知つてゐることは、ただステベルコフが公爵を憐ましてゐるといふこと、何れにしてもそれはステベルコフの勝手な憶測に過ぎぬといふことだけです。……私、公爵には貴方のことを何度も話したんだから、貴方が全然知らないといふことは公爵自身よく知つてゐるんだけど。私にはどうして昨日そんなことが起つたか譯が解らないわ。」

「ああ、兎に角昨日僕はあの人に借りてる金を全部返したんだ。それで重荷が下りたよ！ リザ、お母さんは知つてらつしやるかね？ 無論知つてゐるね。それに何故昨日はお前の味方をして僕に突つ掛つて來たんだらう……ああリザ！ お前は内心、お前自身を是認するなんてことが本當に少しもお前自身を答めないなんてことが有り得ようか？ かうしたことが今日どうして考へられるのか僕には解らないよ。で、お前の考、——といふ意味は僕だの、お母さんのお父さんだのに就いての考はどうなんだ……ヴァシロフは知つてゐるだらうね？」

「お母さんはヴァシロフに何にも申しませんしヴァシロフも聞かないですよ。多分聞きたくないだらうと思ふわ。」

「あの人は知つてゐるね。けれど知りたくないんだよ。たしかにさうだ。あの人らしいね。うむ、それでお前は兄を、この間抜けた兄を、拳銃といふことを話す時に笑ふかも知れない。が、お前のお母さんを御覽！ たしかにお前は考へたに相違ないんだ、リザ、これはお母さんに責任があるといふことを。そのことを僕は一晩中まんちりともせずと思ひ煩つた。——お母さんの先づ思ふことはかうだらう、「私が悪いことをした。だから娘がその母親通りのことをし出来かした！」とね。」

「ああ、何て残酷なひどいことをおつしやるんだらう！」

リザは涙を滴しながら叫んだ。そして立ち上るなり慌しく扉の方に行き掛けた。

「お止ち、お止ち！」

私は彼女の腕を掴まへて再び腰を卸させた。さうして傍に並んで掛けて、矢張り腕を彼女の身のまはりに絡んだままでゐた。

「私、此處に這入つて来た時に、こんなことだらうと思ひました。そして貴方が私自身を私に責めろとおつしやるだらうと思つたの。さう。私、私自身を責めますわ。つい今私が黙つてゐてさう言はなかつたのはただ誇りのためなんです。私は自身のためよりは、貴方やお母さんのためにお氣の毒に存じますわ……」

彼女は續けて言ふことが出来ないで不意に烈しく泣き出した。

「お止し、リザ、泣いてはいけない。僕は何をも欲してはゐないんだ。僕はお前を審判することは出来ない。リザ、お母さんはどう言つてゐらつしやるね？ 話して呉れ、ずつと前から知つてらつしやるのかさ。」

「知つてらつしやつたと思ひます。けど私が話したのはそんなに古いことぢやありません。このことが起つた時なんですの。」

彼女は優しく、眼を伏せながら答へた。

「何とお母さんは言つたの？」

「辛抱なさいよつてお母さんは申しました。」

リザはもつとそつと答へた。

「ああさうか、リザ。さうだ。「辛抱なさいよ！」お前自身變なことをしてはいけません。神様はお前を守つて下さるよ！」

「そんなつもりはないんだから、心配しないで下さいね。」と彼女はきつぱりと言つて、眼を上げて僕を睨めた。

「可愛いリザ。僕の知ることの出来る全部は、それに就いて僕が何にも知つてゐないといふことさ。然し僕は今、どんなに僕がお前を愛してゐるかといふことだけに氣付いたよ。が、ただ一つきりどうして

も臍に落ちないことがあるんだ。リザ。何も彼も解つてゐながら、唯一つ解らないことが、——何かお前をしてあの人を愛させるやうにしたんだらうね？ どうしてあんな風な男をお前は愛することが出来たんだらう？ それを聞きたいよ。」

「そして貴方はそのことでも一晩中苦しんでゐたんでせう？」とリザ柔かい微笑を頬に浮べた。  
「お待ち、リザ。これは馬鹿な質問だ。で、お前は笑つてゐる。笑つたらいい。けれども誰だつて喫驚しないではおれないよ。それはお前も解つてゐるだらう。——お前とあの男、まるで正反對ぢやないかい。私はあの男をよく研究した。あの男は陰鬱な懷疑家だ。恐らく非常に善良な人間だ、多分さうかも知れない。が、一方何よりも極端に、凡ての物の中に悪を見る傾きがある。(尤もその點では頗る僕と似てゐるが) 高貴なものを強烈的に重尊してゐる。然しそれは單にあの男の理想の裡にあるだらうと思ふ。悔ひを感じ易くて始終絶えず自分自身を呪ひ悔ひる、けれども決して改めないのだ。その點も恐らく僕に似てゐる。偏見だの虚偽の思想だの有餘餘位に持つてゐながら、眞の思想は全然持つてゐない。常に何か勇敢なことをしようと努力しながらも些事のためにそれを汚してゐる。リザ、僕を許して呉れ、僕は馬鹿なんだから。——こんなことを言つて僕はお前の心を傷つけてゐるんだ。それは解つてゐる。解つてゐて、……」

「それは本當の寫生でせうか、とリザはにつこりした。貴方は私のためを思つてあの人に對して餘り残酷におつしやる。だから貴方の言ふことは何一つ本當のことにならないと思ふわ。ずつと最初からあの

人は貴方を信じてゐなかつたので、従つて貴方はあの人のありのままを見ることが出来なかつたんですけれど私に對しては、ルガにゐる頃でさへ……あの人はルガにゐる頃から私以外の者に對しては眼を持つてゐなかつた。さうです、あの人は疑ひ深くて病的ですよ。私がゐなかつたなら、狂氣になつてゐたかも知れませんか。それで若し私を諦めるとすれば、あの人は氣が狂ふか、でなければ自殺するでせうよ。そのことはあの人がよく知つてゐる筈です。」とリザは言つて、今度は獨語のやうに夢のやうに附け足した。「さうだ。あの人は何時も弱い。けれどもさうした弱い人が時として、非常に強いことを行ふ力を持つてゐるんですよ……拳銃のことで何て妙な言ひ草を貴方はしたんでせう、アルカアデイ、こんな風なことはちつとも入用ぢやないわ。そして私、これからどうなると解つてゐるんですよ。私があの人を追つたのぢやない、あの人が私を追つたのです。お母さんは泣いて言ひました。私があの人と結婚すれば私は不幸になる、あの人は私を愛しなくなると。私はそれを信じません、不幸には多分なるかも知れないけれどもあの人が私を愛しなくなることはないと思ひますわ。けれども、何故すつと私が承諾しないでゐたかといふのは、これ以外に或譯がありました。それで最近の二月間、私は承諾しませんでしたけれども、實は今日あの人に申しました。「ええ、貴方と結婚いたしませう」と承諾しました。アルカアシヤ、貴方は昨日(かう言つた時彼女は眼を輝かしながら手を私の頭に投げ掛けた。)あの人がアンナ・アンドレイヴのところに行つて、アンドレイヴナを愛することが出来ないと明らかに打ち明けたことを御存知……？」さうなんですのよ、あの人はすつかりあの方に説明して例の噂をおしまひにしてしまひし

た。あの人はアンナ・アンドレイヴナと結婚しようなんて考はちつともなかつたんですよ。それは全然ニコライ・イワノウツチ公爵の考なんで、それを例のうるさいステベルコフやその他……の人たちがあの無理強ひをしたんです。……で、今日私はそれに對して、承知しましたといふ返事をしましたわ。アルカアデイ、あの人は貴方と會ふのを大變心配してゐるんです。だから昨日の出来事で腹を立てないで下さらない。あの人は今朝少し身體の加減が悪いんですから一日中家に閉ぢ籠つてゐるでせうよ。本當に良くないんですよ、アルカアデイ、口實と思はないでね。あの人はわざわざ私を此處へ寄越して、貴方が『必要』だと傳へて呉れ、話さなければならぬことが非常に澤山ある、けれどもそれを此處、この下宿で話すのは厄介だからと傳へて呉れと言ふのです。さあ、さやうなら！ ああ、アルカアデイ、こんなことをお話すのは恥しい、此處に来ながら私はもうこの後は貴方が私を愛して呉れないだらうとひどく心配しましたよ。けれども貴方はそんなに善くそんなに親切にして下さる！ 私、決して忘れないわ！ 私これからお母さんの處に参ります。貴方は無理にでもあの人を少し好きになつて下さらない、え？」

私は彼女を暖い氣持で抱いた。そして言つた。  
 (僕は信じるよ、リザ、お前は強い性格を持つてゐる。それで公爵を追つてゐるのがお前ではなく、お前を追つてゐるのが公爵だといふことを信じる。ただ……)

「ただ何であの人を愛したかと言ふでせう？ それを聞きたい！」とリザは私が「それを聞きたい！」と言つた時と丁度同じ言葉を口にして昔からの意地悪い微笑を浮べた。而もさう言つた時、彼女は人差

指を私がしたと同じ恰好に舉げた。

別れる時二人は接吻した。が、彼女が歸つて了ふと再び私の心は痛み出した。

二

單に私だけのために書いて置くが、リザが歸つてから全く意外な考が夥しく私の胸を襲つて來た。そしてそれを實際私は喜んだ。

「さうだ、何故私は煩はなければならぬだらう、これは私にとつて何だ？ 何でもないことぢやないか、或は何でもないに近いことだ。これがリザに起つたとすれば、これは何だらう？ 僕は家族の名譽を救はなければならないのか？」

私はかうした凡てを、如何に私が善と惡との差別に就て正しい理解を持つてゐなかつたかといふことを示すために書く。それが私を救つた唯一の感情であつた。——私はリザの不幸だつたこと、母の不幸だつたことを知つた。而も彼女等を思ふ時に自分の感情を以つて知つた。それで、起つたことは悪いに相違ないと感じた。

さて豫め言つて置いてもいいが、その日から私の墮落の最後の日に至るまで、事件が次々と頻發して、而もそれが瞬く間のことなので、今思ひ出しても、私がそれ等があるがままに撃破しながら對抗し得たことに自分ながら驚きを感じるのである。それ等は私の心を曇らした。私の感情をも曇らした。そ

して若し遂には私がそれ等に壓倒されて罪惡を犯したとしても（私は罪惡を犯す埒内にゐたのだ）判事はよく私を放免したかも知れない。然しその凡ては事件の正しい順序に従つて述べる積りで、此處にはただ當時私の考には餘り秩序がなかつたことだけを讀者に告げて置く。事件が大風のやうに捲き起つたので、私の考はそれに通じて恰も秋の木葉のやうに渦をまいたのだ。私が全く他人の思想で作られてゐる以上、それが獨立した決心を作るに必要な時、何處に私自身の主義を見出すことが出来たであらう？

私は案内者を持つてゐなかつたのだ。

私はその夜セルゲイ公爵に會ひに行かうと決心した。二人は全く自由に話が出来たかも知れない。そして彼は夜までは家にゐたであらう。然し暮れかかつた頃に私は又手紙を、ステペルコフの手紙を受け取つた。それは三行だけの文句で、翌日の午前十一時に訪問して呉れないかといふ催促的、そして勧誘的な内容であつた。「頗る重要問題にして、御訪問下さらば、その旨御了解なさるべく」云々と書いてあつた。考へあぐんで明日までには御時間もたつぶりあること故。自然の成り行きに委せようと思つた。

それはもう八時であつた。私はもつと早く出掛けなければならなかつたのだが、ヴァシロフが來はしないかと待つてゐた。彼に私自身の考を打ち明けたく思つて心は燃えてゐた。然しヴァシロフはその時來てゐなかつたし、又來もしなかつた。母だのリザだのに時間通りに會ひに行くことは私にとつて論外であつた。のみならず私はヴァシロフが必ず一日中家にはゐないだらうと感じてゐた。

私は徒歩で行つた。そして不圖途中で、例の、前日ヴァシロフと私とが珈琲を飲んだ堀割の傍にある

小料理店に寄つて見ようと思つた。果してさうで、ヴァシロフはその同じ席に坐つてゐた。

「此處に來るだらうと思つてゐたよ。」と彼は妙な風に笑つて、變な眼で私を見た。

その微笑は長い間私が彼の顔に見掛けなかつた、例の不愉快な微笑であつた。私は小卓子に坐つてリザと公爵との關係を詳細に話した。セルゲイ公爵と私との前日の場面を話した。賭博でどんなに勝つたかといふことも忘れないで話した。彼は詳細に聞いた上で、セルゲイ公爵がリザと結婚する意志があるかどうかと聞いた。

「あの子は多分これで得はしないだらう。が、恐らく成り立つまいね……あの男が成り立たさうと思へば成り立つけれど……」

「おつしやつて下さい、友だちとして。貴方は御存知なんですか、そんな素振りがあるんですか？」

「君、僕がこの事件で何をする事が出来るだらう？ これは皆他人の良心と感情との問題ぢやないかととひその係はるところはあの哀れな一少女の身の上に過ぎないけれど。僕は今一度繰り返して言ふよ。僕は一時他人の良心に充分干渉したことがある、實に不似合な仕事さ！ 僕は出来る限り、そして僕が僕自身の立場を理解してゐるならば、不幸を忍ぶことも拒絶しまいね。それで君、君は本當にこの間中何にも怪しまなかつたのかね？」

私はかつと眞赤になつて叫んだ。——「然しどうして、然しどうして、若し貴方が、僕がリザの立場を知つてゐることを少しでも察し、さうしてそれと同時に僕がセルゲイ公爵から金を貰つてゐることを

知つてゐらしたのならば、どうして僕と話すことが出来たんです？ 僕と一緒に坐つて僕に手を差し延ばすことが出来たんです？ 而も貴方はその場合、僕を曲者だとお考へになつたに相違ないんですのに。何故と言ふに、僕がその凡てを知りませんから、而もそれに恥ぢずセルゲイ公爵から金を借りてゐると貴方は確かにお疑ひになつたんだから！」

「それも又良心の問題だ。」と彼は微笑を以て言つた。「それで君はどうして知つてゐるかね？」かう彼はきつぱりと變な氣持を見せながら、「どうして君は知つてゐるかね？ 君が昨日さうだつたやうに、僕が自分の理想を失はないで、自分の直情的な卒直な少年の代りに三文にもならぬ下らない男を發見したかも知れぬといふことを怖れてゐたといふことを？ 僕はその瞬間を恐れてそれを延ばして置いた。何故傲慢と二枚舌との代りに、より以上の無邪氣な或物を僕の内部に想像しなかつたのだらう。その無邪氣な或物は恐らく間の抜けたものではあらう、けれどもより以上に名譽のあるものだよ、本當に！ 僕は名譽ある人間である場合よりも餘りに屢々間の抜けた人間なんだ。さうした傾向を君が持つてゐたのならば、君はどんないいことを僕にして呉れたらう？ その場合に説教したり、改造しようと努めたりすることは墮落かも知れない、君は、たとひ君が改造されたとしても、僅の腫の中に、あらゆる種類の價値を失つただらうと思ふよ……」

「それでリザは？ 貴方は彼女を氣の毒にお思ひになりませんか？」

「非常に氣の毒に思ふよ、君。何で君は僕がそんなに冷淡だと思ふんだらうね……反對だよ、僕は出来

「るだけの努力をしよう……そして君だ。君の事件は？」

「僕の事件には御心配下さいませぬ。今は僕自身の事件なんか何にもありませんから。おつしやつて下さい、何故貴方は公爵がリザと結婚するといふのをお疑ひになるんでせう？ だつて公爵は昨日アンナ・アンドレイヴナの處に行つて明らかに拒絶しましたよ、そんな馬鹿々々しい考を否定して……それはニコライ・イワノウィッチ公爵が言ひ囁らしたもの……つまりセルゲイ公爵とリザとの結婚の噂は、あの老公爵が言ひ解らしたものだと言明しました。そして絶対に否定したのでです。」

「さうかね？ 何時頃だらう？ 誰から君は聞いたんだね？」と彼は興味を湧かして聞いた。私は知つてゐるだけのことを話した。

「ふむ……」と彼は夢を見てゐるやうに考へ考へ言つた。「今一つ言明されたことがあるんだが、それを一時間位の差で起つたことだな、これは……ふむ……」成程、無論どんな會見が二人の間に起つたかも知れない……尤も僕は彼の側にも彼女の側にも何一つ言はれたことも愛されたことも知らないが……無論さうした言明は一二の言葉で澤山だつたらう。然し僕は眞相を話すよ、妙な話なんだが、と言ひ掛けて彼は俄かに笑つた。「驚くべき消息なんで君には確かに面白い氣持をそそると思ふが、——若し君の言ふ公爵が昨日アンナ・アンドレイヴナに結婚申込みをしたところだ（さうして私はリザとのことを怪んでゐるので、その申込みに極力反對しなければならんが）アンナ・アンドレイヴナは如何なる場合にも、公爵の申込みを拒絶しただらうと思ふよ。僕の信じてゐるところに依ると、君は非常にアンナ・

アンドレイヴナを好いて、尊重してゐるらしい。それは君にとつて頗るいいことさ。で、君は恐らく彼女のために喜んでやることと思ふが、實は彼女は婚約をしてゐるんだよ。君。而も彼女の性格を合せ考へると、實際に結婚する氣だらうと僕は信じる。それに就いて勿論僕はお祝ひを捧げるがね。」

「結婚するつもりですつて？ 誰と？」

私は思ひ切り喫驚させられて叫んだ。

「ああ、察して見給へ！ 君を咎めたくはないから打ち明けようが、ニコライ・イワノウイチ公爵、つまり君の以前の親しい老公爵だよ。」

私は啞然として眼を瞠つた。

「彼女はもうすつと前から、その考を抱いてゐたに相違ないんだ。そして言ふまでもなくあらゆる點でこれを巧みに計畫したのだ。」と彼は調子を下げて、一語一語聲を落して言つた。

「僕の想像に依れば、これはセルゲイ公爵の訪問後一時間経つて成立したものだらうと思ふよ。彼の飛び込んだのがどんなに不似合ひなことだつたか君も解るだらう、彼女の方では單にニコライ・イワノウイチ公爵の處に行つて彼に結婚申込をさせたりなんだから。」

「何ですつて『彼に結婚申し込みをさせた』んですつて！ 彼が彼女に申込をしたとおつしやるんですね？」

「いや、彼にそんなことが出来るもんか！ 彼女が、而も自分でしたのさ。けれども彼は確かに有頂天

だがね。噂によると、そんな考は思つて見たこともないといふので彼は呆然として坐つてゐるきりだと言ふ。それから寢床に就いたといふ噂も聞いたよ、……無論喜しさで夢中になつた結果だらうけれど。」

「お聴きなさい。貴方はいやに皮肉におつしやつてゐるが……僕にはそんなことは本當に思へませんよそれに又どうして彼女が彼に申込なんかすることが出来たんだらう？ 彼女はと言つてゐました？」

「誓つて言ふがね、君、僕は純な氣持でこれを喜んでゐるのさ。」と彼は俄かに不思議な位眞剣な調子になつて答へた。言ふまでもなく彼は老人さ。然しあらゆる法律、あらゆる慣習に依つて彼は結婚することが出来るんだ。彼女の方のことか、——これは又他人の良心の問題さ、先刻もう話した通りだよ。けれども彼女は彼女自身の考を持つて彼女自身の決心をするに足る資格が充分にあるよ。とは言へ詳細のことだの彼女が彼女自身のことを話した言葉だのに就いて、僕はそれを君に傳へる立場にゐないのだ。然し彼女は勿論君も僕も豫想外の方法に於て、それをするに足りる女だよ。最もいいことは、この中に不都合なことが何も潜んでゐないことだ。無論彼女が社會上の立派な地位に對して憧憬してゐることは明らかながら、君も知つてゐる通り彼女はそれに相當する女だよ。こんなことは皆全く世俗的な事柄さ。それゆゑ疑もなく彼女は、その申込を堂々と、そして藝術的にやつたのだ。それは嚴肅な型を。『尼僧』と君は何時か彼女のことを評したね、『冷やかな少女』と君は昔から彼女を呼んでゐる。彼女は殆んど君も知つてゐる通り彼に養育せられて、その暖い感情を一度ならず知つて來た。何時か彼女は『あの人に對してさうした尊敬、さうした評價、さうした感情、さうした同情』その他凡てのものを持つてゐる



ると僕に話したことがある。これは凡て今朝、僕の子で、彼女の兄弟であるアンドレイ・アンドレイウイッチ、——君は知らないだらうが、僕は一年に二回はきまつて會ふ男だが、そのアンドレイ・アンドレイウイツナから聞いたんだよ。彼も彼女の執つた過に賛成してゐた。」

「ぢやこれはもう公になつてゐるんですか？ おやおや、驚きましたね！」

「いや、確かにまだ公にはなつてゐない、ある時機の來るまでは……僕には解らないが……僕は事實その埒外の人間だからね。然し本當は本當だよ。」

「それにしても今度はカテリナ・ニコラエヴナのことですが……貴方はどうお考へです？ この結婚はビュリン男爵の趣味に合つてゐなくはありませんか、え？」

「僕は知らない……全くのところ彼は好かないだらうね。然し、君もその側ではアンナ・アンドレイウナが立派な尊敬するに足る人間だといふことを認めるだらう。それにしても彼女は何て女だ！ 昨日の朝、このことのある前、彼女はいきなり「貴方はアマコフ未亡人と戀に落ちるはゐないのか」と僕に聞いた。そのことは昨日僕が驚いて君に話したから覚えてゐるだらう。つまり、若し僕がアマコフ夫人と結婚すれば、彼女はその父たる老公爵とは結婚することが出来ないから、そんな質問を出したのさ！ 今になつて見ると解るだらう！」

「おおさうですね」と私は叫んだ。「然しアンナ・アンドレイウナは實際に……貴方がカテリナ・ニコラエヴナと結婚する氣になれたと想像してゐたんでせうかね？」

「さうだよ無論、君、けれども……けれども君、何處かに出掛けるんなら、丁度いい時だよ。知つての通り僕は始終頭が痛むんでね、彼奴等にルシアを弾かせるやうに言ひ付けよう。僕はその陰鬱な莊重さが好きさ。然しそのことは以前にも話したことがあつたつけね……二度も同じことを言つて、許して呉れ給へ……僕は此處から歸るとしよう。君、君とは會つてゐたいけれど失敬しよう、頭痛だの齒痛だのする時には何時も僕は渴くやうに孤獨を求めたくなるんでね。」

と、彼の顔には苦しうな皺が寄つた。私は彼が實際に頭痛に悩んでゐたことを今は信じる。その頭痛も特に……。

「さよなら、明日まで。」と私は言つた。

「何故『明日まで』？ そして明日は何か出来事があるかね？」

彼は意地の悪い微笑を浮べた。

「僕お訪ねしますか、それとも貴方で入らして下さい。」

「いや僕は行かないだらうよ、君の方から駆け込んで来るよ……。」

彼の顔には非常に意のある何物があつた。

### 三

セルゲイ公爵は實のところ悪かつた。それで頭を濕布して一人で坐つてゐた。彼は非常に私に會ひた

がつてゐたのだ。けれどもただ頭痛ばかりではなく、彼は精神的に苦しんでゐた。次々と殆んど狂氣に近い程に興奮する人々にばかり會つて、従つて私自身も亦同じやうな狂氣に感染しないのではゐられなかつたのが、兎に角私の運命であつた。白状しなければならぬが、私は心に悪い感情を抱いて來たのだ。そして前の夜彼の前で嘔吐つたことをもひどく恥しく感じてゐた。兎に角リザと彼とは、私が私自身を愚者であると考へないではゐられない程、實に巧みに私を欺いてゐた。簡單に言へば、這入つて行く際に、私の心は、虚偽の調子に波打つてゐた。然し直ぐにその虚飾も虚偽の感情も消えて了つた。——彼の疑惑が綺麗に消え去つてゐたこと、彼自身が屈服してゐたことを先づ私は言つて置かなければならない。彼は始んど子供のやうな氣持、信と愛とを現してゐた。涙を流して私に接吻し、直ぐにその立場を話し始めた。……さうだ、彼は實際私が必要だつたのだ。彼の言葉と、その思想の連絡とは、大きな内心の亂れを現してゐた。

彼はリザと結婚したい意志、出来るだけ早く結婚したいといふ意志を、非常にきつはりとした調子で話した。

「彼女が良家の生れでないといふことは、ちつとも僕の苦にはなりませんよ。僕を信じて下さい。」と彼は言つた。「僕の祖父はつい近所にある地主の私立劇場に出てゐた歌唄ひの農奴の娘と結婚したのです。無論僕の家庭は僕にある期待を掛けて安心してゐましたが、今は讓歩して呉れるでせう。で、暗喩しないで済むだらうと思ひますよ。僕は現在の生活を善のために破りたい、善のためです。あらゆる相違

したもの、あらゆる新しいものを得るためです！僕は君の妹さんが何で僕を愛するやうになつたのか解らない。が、若し彼女がなかつたならば、僕は今日まで生きてる筈がなかつたんです。心の底から誓つて言ひますが、ルガで彼女に會つたことは全く神のお引き合せですね、餘りに僕が卑しかつたから——彼女が僕を愛したのだと思ひますよ、……でも、それが解りますか、アルカアデイ・マカロウイツチ？」

「よく解りますよ。」と私は充分な確信を以て言つた。私は卓子の前に腰を卸し、彼は部屋を歩き廻つてゐた。

「僕も何の隠すところもなく、僕たちの會つたことの全部をお話しなきやなりません。それは僕の胸に秘めてゐて、彼女一人のみが知つてゐる（と言ふのは彼女には僕自身を信頼して打ち明けることが出来るからです。）秘密を以て始まります。それは今日まで他に誰一人として知らないでゐる秘密なんです。——僕は當時絶望の心を抱いてルガに行き、ストルビエフ夫人の宅に滞在してゐました。何故ストルビエフ夫人の宅にゐたかは自分でも解らないけれど、多分孤獨を慕つてゐたのかも知れませんね。丁度その時は軍隊の方の勤めを止したばかりの時でした。——その軍隊へは外國から歸つてから、アンドレイ・ペトロウイツチに出會つて後、這入つてゐたのです。その頃は幾らか金を持つてゐましたので、軍隊では放蕩生活をして氣儘な暮しをしてゐました。さうです。將校だの同僚などは別に僕がさうした連中に逆ふわけでもないのに皆他を厭がつてゐました。それで白状しますが、僕はまだ生れてから人に好かれたことがないんです。同じ聯隊の中に、コルネ・マデバノフといふ男がゐましたがね、極めて

頭腦の空つぼの、いづれにしても眼にも立たない、詰らない男でしたが、(尤も正直は正直でしたけれど)これがちよいちよい僕を訪問してゐました。僕が無愛想な待遇をするので、その男は何時も隅に坐つて黙つたまま、然し鹿爪らしい態度をしてゐたものです。或日のこと、僕はその男に世間話をして、それに僕自身の馬鹿々々しい話を澤山付け加へて言つたんですね、例へば大佐の令嬢が僕に惚れてゐるのだの、大佐が娘のために僕に眼を付けてゐるのだの、だから僕を喜ばすやうなことを何かと話すだのといふやうな……簡単に言つて、詳しいことは話すのを止しにしますが、兎に角、こんなことをお喋りした結果が、ごたごたした厄介な噂になつて了つたのです。尤もその噂を噂したのは、そのステパノフではありません、上にゐてよく覚えてゐた僕の傳令下士が、若い婦人に妥協して馬鹿な話を僕がしたと言ふのと言ひ觸らしたんですね、それで、この噂の取調があつた時、傳令下士は將校から聞かれて、ステパノフを非難しました。つまり僕の話した相手はステパノフだと言ふのです。ステパノフはそれを否定することの出来ないやうな立場になつてゐました。これは僕の名譽に關する問題なのです。而もその三分の二は僕自身のいい加減の作り上げた嘘八百なんです。將校は憤慨するし、皆を集めた司令官は極力事實を簡明しようと思ひました。それで皆の面前でステパノフに訊問が聞かれました。彼がその話を聞いたかどうか? といふのです、——彼は直ぐに真相を話しました。が、僕はその時どうしたでせう? 一年の家系を持つてゐる公爵たる僕はどうしたでせう? 僕はそれを否定して了つたのです。そしてステパノフに、面と向つて、君は嘘をついてゐるんですね、と最も丁寧な調子で言ひ切りました。彼が僕の

言葉を誤解したのだといふ風なことを仄めかしながら……此處でも詳しいことは略しますが、ステパノフが度々僕を訪問したので、僕は彼が彼自身の動機で僕の傳令下士と一緒に密謀したらしいといふやうな具合に事件を見せたのです。それを如何にもありさうなことのやうに見せたのでした。ステパノフはただ黙つて僕の顔をぢつと覗め、そして肩を聳かしました。僕はその時の彼の眼付きをよく記憶してゐます。一生忘れないだらうと思ひますよ。間もなくステパノフは軍隊を辭職しました。けれどもその結果はどうだつたでせうか? 將校も誰も彼もが例外なく彼を呼び止めて辭職を思ひとどまれと勧めるのです。二週間の後、僕も亦辭職しましたが、今度は誰一人僕を顧る者もなく、僕の辭職したことを口にする者もありません。僕は家庭の事情で軍隊を去ると言ひました。——事件はこんな風になつたのです。初めのうち僕は氣にもしませんでした。いや皆に對して癪に觸つてさへをりました。僕はルガに滞在してゐてリザヴェタマカロヴナと知り合ひになりました。が、一ヶ月経つてから、僕は拳銃に眼をつけて死を考へるやうになりました。何も彼もが本常に憂鬱に見えて堪りませんでしたよ、アルカアディ・マカロウイツチ。僕は司令官と以前の同僚とに手紙を認めて、自分の嘘を充分に白状し、ステパノフの潔白を保證することにしました。その約手を書き終つた時、僕は、これを送つてから生きてゐるべきか、死ぬべきかと自問しました。どうしてもこの疑問を解くことが出来ないのです。たまたま、偶然のことから、妙な、突拍子な話を経てリザヴェタ・マカロヴナに引き寄せられるやうな運命になりました。と言ふのは、リザヴェタは前からストルビエフ夫人の宅にゐたので、僕たちは會へば會釋をして別れて

おましたが、滅多に口を利いたことはなかつたのです。それに、不意に僕は一切の顧末を彼女に打ち明  
けました。その時なんです、彼女が僕に手を差し出したのは。」

「リザはどんな風に貴方の疑問を解決しました？」

「僕は折角書いた手紙を出しませんでした。彼女が出してはいけないときめて呉れたんです。若し僕が  
その手紙を出したとすれば、無論僕は名譽ある行をしてゐなければならぬ、以前の汚辱を清める、或は  
それ以上の行をしてゐなければならぬけれども僕にはそれに堪へる力がない、と彼女は言ふのです。彼  
女の考に依ると、誰だつてそれには堪へる力がない、何故と言ふに、その時、その人間の未來は全然滅  
びて了つて、如何なる新生活もすることが出来ないからです。ステパノフその人は堪えた。けれども事  
實彼は社會から許されてゐます。勿論これは矛盾したことがながら、彼女は僕を説き伏せて了ひましたよ。  
で、僕は完全に彼女の掌中に這入つたのです。」

「リザの理窟はづるくても女性的です。」と私は言つた。——「その時にはもう貴方を愛する氣持になつ  
てゐたんでせうよ。」

「それが僕の新生活に這入る更生でした。僕は變つた人間にならう、新しい生活を始めよう、僕自身に  
又彼女自身に對して恥しからぬ人間にならうと誓つたのです。——而もその結果が現在のやうなさまに  
ならうとは！ 君と一緒に球轉しに行つたり、フアロオをしたりするのがおしまひです。僕には運命と  
戦ふ力がない、さうした連中、競馬……などといふものの中に轉がつてゐるのが嬉しいんですね。……

僕はリザを苦しめました。恥しいことです！」

彼は額を手で拭きながら部屋をあちこち歩き廻つた。

「僕たちは二人とも、君も僕も、同じ露西亞的な呪ひに苦しめられてゐますよ、アルカアデイ・マカロ  
ウイツチ、君はどうしていいかを御存知ない。僕もどうしていいかを知らない。若し露西亞人にして傳  
習的に銘々の前に敷かれたおさまりの軌道を、こんな風に一寸でも外れてゐたら、その人は直ちにど  
うしていいかを知らないのです。然し一方その軌道にゐれば一切のことが、——收入も階級も、社會上  
の地位も、經歷も、訪問も、妻も、一切のことが明らかなんです。で、僕はどうでせう？ 木葉は風の  
前に媚びる、僕はどうしていいか解りませんよ！ 過去二ヶ月の間僕は軌道にゐようと努めました。軌  
道が好きだつた、軌道に曳き寄せられました。君は此處での僕の墮落を御存知ないでせう。——僕はリ  
ザを愛してゐる、と同時にアアマコフ夫人のことを思つてゐるんですよ！」

「どうしてそんなことが！」と私は溜らなくなつて嗚咽つた。「ついでだけれど、貴方は昨日、ヴァシロ  
フが貴方にカテリナ・ニコラエヴナのことを悪口させたと言つて、何とおつしやいました？」

「僕は誇張して言つたかも知れませんが、多分、君に話したやうに、僕は自分の疑惑の中で、彼に對す  
る偏見を持つてゐたかも知れませんが、この問題は止ませよう。僕がこの頃、恐らくルガ以來つと、  
生活の高潔な理想を抱いてゐなかつたと君はお考へになりますか？ 誓つて言ひますがね、高潔な理想  
は何時も僕を離れたことはない、絶えず僕につきまといつてゐて、誓つてその美を心に失つたことはなませ

んよ。僕はリザエタ・マカロツナに改めようと言つた誓を覚えてをります。昨日のアンドレイ・ペトロウイツチが貴族の問題に就いて僕に話した時、別に新しいことをあの人は話したんちやないんですよ。僕の理想は確立されてゐます。——百エーカーばかりの土地(ほんのそれきりでいいんです。何故と言ふに僕は殆んどこれといつて財産を残してゐませんからね。)を持つて、それから世俗と關係とから全く離れて了ふ。そして田園の生活をして、僕自身は農夫が何かの身の上になるんです、ほんとに、僕の家にとつては、これは別に眼新しいことぢやありませんよ。僕の叔父、祖父もめいめいの手で土地を耕したものです。僕たちは一千年前から貴族制度のために公爵でゐるけれども、實は乞食なんです。だから子供たちには僕はかう教へようと思つてゐますよ。『始終一生を通じて忘れないでおゐてよ、お前たちが貴族だといふことを。露西亞公爵の神聖な血潮がお前たちの動脈には流打つてゐることを。けれども決してお前たちの父が自分の手で自ら土地を耕してゐることを恥ぢてはならない。——父は公爵として似合ふ仕事をしてゐるんだから。』と。僕は子供たちに財産を残さない、一かけの土地以外に何の財産も残してならないんです。けれども最も高潔な主義を以て養育するつもりですよ。僕は義務といふことを考へなきやなりません。ああ、僕はリザに助けられ、仕事に助けられ、子供たちに助けられなきやありません。ああ、このことをどんなに僕は夢想したことか、此處、この部屋でどんなに夢想したことだらう。けれども、本當だと思ひますか？ それと同時に一方で僕はアマコフ夫人のことを思ひ、且つその女そのものをちつとも愛してはゐないのに、世俗的な金錢のための結婚が出来るといふことを思つてゐるんです！

而もナスチヨキンからビュリン男爵とアマコフ夫人との噂を聞くと、直ぐに僕は心を今度はアンナ・アンドレイウナの方に向けようと思つたやうな始末なんですよ。」

「ただど貴方は婚約をお避けになつた。それは何にしても立派な行ひぢやありませんか、僕はさう思ひますがね。」

「さう思ひますかね？」と彼は私の前で一寸立ち止つた。「いや、君は僕の性質をお存知ない、でなければ僕が僕自身を知らない或ものがあるんです。何故つて僕は幾つもの性質を持つてゐるらしく思へますからね。僕は眞面目に君を愛してゐますよ、アルカアデイ・マカロウイツチ。それに單に過去二ヶ月の間君に對する僕の待遇を、僕は自分ながら、ひどく咎めてゐるんです。で、リザの兄としての君に、かうした凡てを知つていただきたいと思ひますよ。——僕はアンナ・アンドレイウナの處へ、結婚の申込みをするために行つたんです、結婚しようといふ考を取消すためぢやありませんよ。」

「そんなことがどうして有り得るんだらう？ リザは僕にかう言ひ……」

「僕はリザを欺しましたよ。」

「おつしやつて下さい、どうか。貴方は形式的の申込みをなすつた。そしてアンナ・アンドレイウナはそれを拒んだ？ さうですか？ さうなんですか？ この事實は僕にとつて實に重大なことなんですよ公爵。」

「いや、僕はちつとも申込みをしなかつたんです。但し、これはその暇がなかつたんですがね。けれど

も彼女は先んじて言ひましたよ。尤も無論露骨にぢやありませんがね、意味だけははつきりして間違ひのないものなんです。——つまり彼女は僕に巧みに、こんな考は今後問題外だといふことを知らせて呉れたんです。」

「して見れば貴方が彼女に申込みをなさらないと同じことぢやありませんか。そして貴方の誇は傷つけられなかつたんだ！」

「どうしてそんな風な理窟が言へるんでせうね？ 僕自身の良心が僕を咎めるんですよ。そして僕の欺したリザのことが……見棄てるといふ意味のことが僕を咎めるんです。僕自身に誓つた誓、凡て自分の汚辱された過去のために改め償はうと祖先に誓つた誓、——これが僕を咎めるんです！ お願ひだからのことはリザに話さないでゐて下さいよ。恐らくこのことだけは彼女が許して呉れ得ないだらうと思ひます。昨日の出来事があつてから僕はすつと身體が悪くなつたのです。そして今は一切が片付いたらしく、ソコルスキイ家の最後の人間たる僕は、これから牢に送られようとしてるんです。可哀さうなりや！ 僕は一日中君に會ひたい會ひたいと思つてゐましたよ、アルカアデイ・マカロウイチ、それはリザの兄としての君に、彼女のまだ知らない、このことをお話したいと思つてからなんです。僕は罪人です。僕は鐵道株の偽造犯の連類者なんですよ！」

「もつと詳しく！ 何ですつて、牢に這入るんですつて？」

私は飛び上つてぎよつとして彼を見た。彼の顔は深い深い憂鬱と、何と言つていいか分らない絶望的

の悲しみとの色を湛へてゐた。

「まあお坐んなさい。」と彼は向ひ合つた腕椅子に凭れて言ひ出した。「先づ、事實をよく聞いて下さい。

——一年よりもつと前になりますかね、それは僕がリディアとカタリナ・ニコラエワナと一緒にエムスにゐたり、後に巴里にゐたりしたその夏、丁度二ヶ月位巴里に行かうとしてゐた時のことなんです。

無論僕は巴里では金が乏しかつたものです。と丁度其處へステベルコフが姿を現しました。尤も以前から僕はあの男を知つてゐたんですがね。ステベルコフは僕に幾らかの金を寄越した上で、もつと呉れるといふ約束をしたんです。が、其代り自分の手助けをして貰ひたいと僕に頼むんです。——つまりあの男は畫工だの設計師だの彫刻師だの石版師だの、外にもそれに類した科學者、技師などを欲しがつてゐたわけです、それにはある目的がありましたね。其目的はあの男のほめかした處に依ると最初から明らかに立派なものでしたよ。君は信じますかね？ あの男は僕の性格を知つてゐました。——そのことは僕を笑はせたきりですが、大切なことは、僕が學生時代から、今は露西亞の流浪人となつてゐる一人の友だちを知つてゐたことです。が、その友だちといふのは本當の意味での露西亞人ではなく、ハムブルグ生の奴、この男のことを考へたものの、これに近寄る手引きが入るので、僕を利用したわけなんです。僕はステベルコフのために二通の手紙を書いて渡したきり、そのことはすつかり忘れて了ひました。後になつて幾度も彼と會つて、結局三千留の金を受け取りましたが、實際僕はこの仕事に就いては忘れて

了つてゐたんです。此處でも彼から始終借金をしてゐたし、彼は僕の前で金で奴隷のやうにペコペコしてゐましたよ。それに昨日、突然、僕が罪人になつてゐることを、而も彼から耳にしたんです。

「何時？ 昨日の？」

「昨日の午前。丁度ナスチヨキンが来る前、僕の書齋で嘔鳴り合つてた時のことです。彼は初めて圓々しくもアンナ・アンドレイヴナのことを眞正面から僕に話すんです。僕は手を舉げて打つてやらうとしました。と、不意に彼奴は立ち上つて、僕の利害は貴方の利害ですよ、貴方は僕の連累者で、而も僕と同じやうな詐欺師なんですよと言ひ出したんです。——尤もこの通り言つたわけぢやありませんが、意味はかうでした。」

「何といふ馬鹿々々しい。たしかにこれはいゝ加減なことせうよ？」

「いや、さうぢやない。彼は今日もやつて来て詳しい真相を説明しましたよ。その偽造株はもう長い間世間に廣まつてゐて、現在でもまだ流通してゐるけれど、官憲の方では眼を付け出したらしいんですね。

勿論、僕はどうしたわけぢやない、が、ステベルコフの言ひ草はかうなんです。「貴方はあの短い手紙を喜んで引き受けたぢやありませんか……」

「ぢや言ふまでもなく貴方は、その手紙が何のためか御存知なかつたんだ。それとも御存知でしたか？」

「知つてゐました。」とセルゲイ公爵は伏目になつて、低い聲で答へた。「言つて見れば僕は御存知の通り知つてゐて知らなかつたんですよ。僕は笑つてゐました。面白がつてゐました。僕は何も考へることな

しに、その仕事をしたんです。何故と云ふに、當時僕には偽造した株券が必要でもなかつたし、それをしろと言つたのは僕ぢやなかつたからなんです。然し彼が三千留を僕に寄越したまゝ、その計算をしないので、僕はうつちやつて置きました。が、恐らく僕は本當に偽造者なんでせうよ。僕は知らないではをれなかつた、子供ぢやありませんからね。——僕には解りました、けれども楽しい冗談のやうにそれを感じて結果は悪漢を助けてゐるんですよ……金錢のために、あの連中の手助けをしたんです！ だから僕も矢張り偽造者なんです！」

「ああ、貴方は大袈裟におつしやる。悪いことをなすつたには相違ないが、餘り大袈裟ぢやありませんか！」

「それには今一人或男がゐましてね、それは辯護士の書生か何かしてる若い、ジビエルスキイといふ男なんです。この男も矢張りこの偽造事件に關係してゐて、後に、ハムブルグの例の男の處から、何か下らない用事で僕に會ひに来たことがありますが、無論それが僕自身に關係してゐようとは知りませんでした。——この偽造事件に就いて来たんぢやない、それは解つてゐますが……然しこの男は例の僕自身で書いた二通の手紙を持つてゐました。ほんの短いものですがね、勿論、これも證據物なんです。そのことを僕は今日知りましたよ。ステベルコフはこのジビエルスキイが萬事を壊してゐるのを嗅ぎ出しましたと言ふのは何かを、多分公金だらうと思ひますが、この男は盗んだのですが、もつと泥棒をしてから他國へ飛び出さうとしてゐるんですよ。それで彼はこの男を助けるために八千留を欲しがつてゐるんです、

少い金ぢやありませんね、僕が受け継いだ財産の分け前はステベルコフばかりでなく、このジビエルス  
キイをも満足させなきやならぬといふことなんです。……つまり簡単に言へば、僕は僕の財産の分け前  
と、その上に一萬留とを諦めなければならぬ、これが彼奴等の最後の要求なんです。さうすれば、證  
據になる例の僕の一通の手紙を返してやると言ふんですね。彼奴等は共謀したんです、解つてゐます  
よ。」

「餘りそれは馬鹿々々しい！ だつて彼奴等が若し貴方を訴へるなら、同時にそれは彼等自身を裏切る  
ことになるぢやありませんか！ 彼奴等に訴訟をうながす動機になるやうなものは何もないぢやありま  
せんかね。」

「それは解つてゐますよ。彼奴等も訴へてやるとはちつとも脅しはしません。ただ「無論、訴へはしな  
いでせうよ。が、若し何時か露れなければならぬとすれば、その時は……」と言ふのが彼奴等の言ひ草  
なんです。それだけのことです。けれども僕はそれで充分だと思ふんですよ。然し重大な點はそれぢや  
ありません、どんなことにならうとも、そしてたとひその一通の手紙を僕がポケットに持つてゐたにし  
ても、要するに僕は永久に永久にその詐欺に關係のある彼奴等の連累者なんだ！ それが重大な點です  
よ。露西亞に對して嘘を吐き、自分の子供に對して嘘を吐き、リザに對して嘘を吐き、自分の良心に對  
して嘘を吐く！……」

「リザは知らないんですか？」

「ええ、何にも知りませんよ。あんな身の上にあるリザに話すのは餘りひど過ぎる話ですからね。僕は  
自分の聯隊の制服を着てゐます。そして何時も聯隊の兵卒たちに出會ひます、二六時中ですね。敢て制  
服を着てはならぬと僕は心の中で思ひますよ。」

「お聞きなさい」と私は不意に叫んだ。「こんなことを喋つて時を無駄に費す必要はありません。貴方の  
ために唯一つ救済方法があるぢやありませんか。これからニコライ・イワニッチ公爵の處へ行つて一萬  
留を借りて入らつしやい。何のために借りるといふことは言はないで、唯お頼みなさい。そしてそれを  
二人の詐欺師たちに送つて最後の片を付け手紙を取り戻したらいい。……さうすれば萬事けり、が付いて  
了ふぢやありませんか！ 何も彼もが終つてから貴方は田舎に行つて土を耕すことも出来る！ 詰らな  
い妄想は止しにして生活に信念をお持ちなさい！」

「僕はそれを考へたんです。」と彼は決心したやうに言つた。「僕は一日中考へて遂に決心しました  
そして唯君の來るのを待つてゐました。僕は行きますよ。君は御存知でしたかね、僕は昔てニコライ・イ  
ワニッチ公爵から唯の一度だつて借りたことがないんです。あの人は僕の家族にはよくして呉れて、そ  
ればかりか……僕の家族の者を助けて呉れました。けれども僕、僕は個人としてまだ金をあの年から借  
りたことがないんです。然しかうなつては僕も決心しました。君も知つてゐるでせうが、僕の家族は元來  
ニコライ・イワニッチ公爵よりもソルスキイ家の古い分家なんです。ニコライ・イワニッチ家の方は新  
しい分家として、事實傍系族なんです……昔、二軒の先祖の間に争ひがありましたね、それはピイタ



ア大帝の改革の頃で、僕の曾祖父、名前は矢張りピイターと言ひましたが、それが舊信者のままでコストロマの森の中を彷徨つておりました。そのピイター公爵が餘り良くない身元の女と二度目の結婚をして……そこから一方のソコルスキイ家が分れて出る事になつたんですが、然し僕は……一體何を僕は言つてゐるんだらう？……」

彼はひどく疲れ切つてゐた。で殆んど無意識にこんなことを話してゐるらしかつた。

「落ち付いて下さい。」と私は立ち上つて自分の帽子を掴みながら、「お寝みなさい、それが一番ですよ。ニコライ・イワニツチ公爵は屹度拒絶しないだらうと思ひますよ。殊に今は嬉しんで夢中になつてゐますからね。貴方はその方面の新しい消息をお聞きになりましたか？ まだ、本當にまだなんですか。僕はある人が結婚しようとしてるといふ大變な噂を聞きましたよ。これは秘密ですがね、でも無論貴方には秘密ぢやありません。」

そして私はそれに就いての凡てを、手に帽子を持つて突つ立つたまま話して聞かせた。彼は何も知らなかつた。で、直ぐに質問をした。それは主として、何時、そして何處で、その約婚がされたのか、どの程度まで、その噂が眞實なのかといふ質問であつた。勿論私は隠すことなく、彼がアンナ・アンドレイヴナを訴問した直ぐ後で取りきめられたのだと話した。この消息が彼にどんな苦痛の印象を與へたか私は書く筆も持たない。彼の顔は動いた。と言ふよりも歪んだ。そして唇は凄く微笑を洩らして療學的に引き釣つた。その果ては恐ろしく眞青になつて、眼を床に吸ひ付けたやうに見据ゑたままぢつと考へ

込んで了つた。私は突然、彼の虛榮心が前日アンナ・アンドレイヴナから拒絶されたことに依つてひどく傷つけられてゐるのだとはつきり悟つた。恐らく彼は病的な心理状態になつてゐたので、その瞬間にただ、彼が前日若い婦人の前で演じた滑稽な屈辱的な役割を餘りに鮮やかに悟つたのだ。それに最も悪いことは、彼がリザに實に卑しい態度を、而も何等の效もなしに、執つてゐたといふ思ひであつた。かうしたおしやれの若い紳士氣取りの人間が何のために互ひに好意を以て考へ合ふか、何の根據で互ひを尊敬し合ふことが出来るかといふことを知るのは興味のあることであらう。——このセルゲイ公爵は、アンナ・アンドレイヴナが公爵とリザ（實際に於てアンナ・アンドレイヴナとリザとは姉妹なのだ）との關係を知つてゐると充分に察し得た、或は、たとひ彼女が現在こそ實際知らなくとも、必ず早晚知るだらうと察し得た筈である。而も「彼は彼女の承諾を全然疑はないでゐた」のだ！

彼は傲慢な、横柄な眼差しを私に向けながら不意に言つた。——

「現在——さうした事實を聞いた現在ですよ、僕がニコライ・イワニツチ公爵の處に行つて金の無心可言ふことが出来るなどと君は想像し得ますかね？ 僕をつい今しがた拒絶した女と婚約をした人、その人に金の無心をする——乞食のやうに、下僕のやうに！ いやいや、かうなつては萬事休すです。若しあの老人の助力が僕の最後の頼みの綱ならその最後の頼みの綱も切り棄てて了ひたい！」

内心私は彼の感情に同感した。けれども現實の立場に立つてより、廣い觀察を下す必要があつた。果して氣の毒な老公爵を眞に勝ち誇つた戀の競争者として見なければならぬものだらうか？ 私は自分の頭

胸の中に酸酔する幾つもの思想を持つてゐた。セルゲイ公爵の事件を離れて、私は翌日老公爵を訪問しようとした。で、その場合はその消息のために受けたこの氣の毒な彼の激動を柔けて眠ませようと思つた。

「お眠みになれば、萬事が今よりも光明を帯びて見えますよ。そのことはお解りでせう！」

彼は私の手を暖く抑へたが、今度は接吻をしなかつた。私は明日の夜、お目にかゝりに来るからと約束した。そして、「話ませう、話ませう。お話することが澤山あるんですよ。」と言つた。

彼はこの私の最後の言葉を、將來の運命を豫言するやうな微笑を浮べて頷いた。

## 第八章

その夜一晩中、私は賭博のこと、勝負のこと、金のこと、計算のことなどを夢に見た。夢の中で、私は恰も賭博臺に凭れて何かを、何かの賭金か運かを思案してゐるしかつた。そしてそのために終夜私は悪夢に襲はれたやうにまんぢりともしなかつた。本當のどこを言へば、前日の凡てのことから、喫驚するやうな印象を受けたにも係はらず、私は絶えずゼルスチョコの隅で勝つた金のことを考へてゐたのだ。私はさうした考を抑へつた。けれどもその湧き上つて来る情緒を抑へる事が出来ないで、そのことを單に思ひ出しただけで身體全體をぶるぶると震はしてゐたのだ。その成功は私を熱に襲はせて了つた。

——果して私は賭博者で有り得たらうか、或は少くとも（もつと正確に言へば）私は賭博者の素質を持つてゐただらうか？ 今、これを書いてゐる今でも、私は矢張り時に賭博のことを考へてゐるのだ！ 時としては、黙つて賭博のことを胸に思つたり、夢で賭金を下したり理れて来る番號を見たりすることに耽りながら數時間坐つてゐるやうなことがある。さうだ。私はあらゆる種類の性質を持つてゐる。そして私の性質は靜止した状態のものではないのだ。

十時に私はステベルコフの處に行かうと思つた。そして歩かうと考へた。出来るだけ早くマトヴェイに來るやうにと使をやつた。珈琲をすすりながら私は自分の立場を考へて見た。

私は或理由があつて愉快な氣になつてゐた。瞬間的の自己解剖が、自分の愉快なのは主としてその日私が老公爵の處に行かうとしてゐるからだといふことを悟らせて呉れた。然しその日は私の生涯中の、重大な、そして驚くべき日で、それは直ぐに喫驚するやうな具合にこれから始まつて來たのだ。

丁度その時、私の部屋の扉は威勢よく開いて、タチアナ・パヴロヴナが飛び込んで來た。彼女が來ようなどは、夢にも考へてゐなかつたので、私はその姿を見ると同時に、あつと驚いて飛び上つた。彼女は恐ろしい顔をして滅茶苦茶に取り亂した態度でゐた。私は敢て言ふ。若し訊かれたとしても彼女は何故慌しく私の處に轉げ込んで來たかを言ふことが出来なかつただらうと思ふ。同時に私は直ちに、彼女がつい今しがた新しい消息を聞いたばかりの處だといふことも言ひ得る。その消息は彼女を全く押し潰して了つて、その最後の打撃からまた彼女は脱することが出来ないでゐたのだ。尤も、その消息は私

をも押し潰して了つたが。

彼女は、けれども、ほんの半分位、或は恐らく一分位だつたらうか、それ以上は私の部屋にゐなかつた。彼女はいきなり私に突つかかつて来たきりなのだ。

「これはお前さんのしたことだ！」と彼女は面と向つて前へのめるやうにしながら喚き立てた。「ああ、何てお前さんは犬ころだらう！ 何を一體お前さんはしたんだらうね！ 何を、自分のしたことを知りもしないんぢやないか！ あの人の珈琲を飲みにお行き！ おお、このお喋り、お喋りの雀、おお、こしらへものの戀人……お前さんのやうな子供は打つて打つて、打つてしまはなきや！」

「タチアナ・バヴロヅナ。どうしたんですか？ 何か起つたんですか？ 若しやお母さんが……」

「今に解りますよ！」

彼女は意地悪くかう嗚鳴つて部屋を駆け出した。——そして行つて了つた。

私は元來ならば確かに彼女の後を追つて走るべきだつた。然しこの場合、或考があつてそれを止した。それは考と言ふよりも、漠然とした疑惑であつた。つまり彼女のした凡ての罵倒の中で、その「こしらへものの戀人」といふのが最も意味のある言葉だと、漠然としてゐながらも考へたのだ。無論、その意味が果して何か、それは解らなかつたけれども、兎に角私は外に飛び出した。ステベルコフの處を渡まして出来るだけ早くニコライ・イワニツチ公爵の處へ行かうと思つたからだ。

「これを解く鍵は凡て其處にある！」と私は本能的に感じた。

どんな風に彼がこのことを知つてゐるか、私は想像も出来なかつた。が、ステベルコフは最早アンナ・アンドレイヴナに關することを全部詳細に至るまで知り盡してゐた。——私は彼とした話だの彼の身振りなどを書きたくない。けれども兎に角彼は狂熱した状態にゐた。この「巧妙な手段」に就いてこれ以上はないといふ程の狂熱的恍惚の状態にゐたのだ。

「あの女は個性がありますね、さうだ、個性を持つてゐますね。」と彼は叫んだ。「さうだ、吾々には眞似が出来ませんよ。此處に吾々は依然として坐つて何もしない、けれどもあの女は何か最上のことをしようと思へば直ぐにそれをするんですね。あの女は古代の彫像ですよ！ ミネルヴァの古代彫像ですよ、それでゐるただ、今の世の服を着て歩き廻つてゐるきりなんです。本體は現世の人間ぢやありませんね。」

私は彼に昨日の手紙の用向に移つて貰ひたいと頼んだ。その用向は、前から察してゐたやうに矢張りセルゲイ公爵を説き勸めてニコライ・イワニツチ公爵に借金を願つて見るやうにして呉れと言ふのが全部であつた。

「さうしなければ公爵にとつて將來がひどくひどく悪くなりますからね。尤もそれは僕の知つたことぢやありませんが。さうでせう、え？」

彼はちつと私の顔を覗き込んだ。然し私の想像するところでは、彼は私が前日より更に詳しいことを知つてゐるものとは氣付かなかつた。そして實際彼は私が何か知つてゐるかも知れぬとは思ひ得な

つたのだ。つまり私は、私が例の偽造株事件に就いて幾らか知つてゐるといふやうな素振りも見せぬか  
つたわけである。

二人の話は長くはかからなかつた。彼は直ぐに金を呉れる約束をし始めた。「而も可成りの金ですよ、  
可成りの金ですよ。若しセルゲイ公爵が厭でも行かなきやならぬやうにして下すつたなら。問題は緊急  
に迫つてゐるんです。非常に迫つてゐるんです。問題の非常に迫つてゐることが重要な點ですよ！」

前日のこともあるので、私は彼と議論して争ひたくなかつた。それで歸らうとして立ち上つた。尤も  
無事に済ませようといふので、「やつて見ませうよ」と素氣もなく答へた。然し彼は咄嗟に、何と形容し  
ていいか解らない程に私を驚かして了つた。と言ふのは、丁度その時私は出口の方に踏み出してゐたが  
不意に彼は親しうに腕を延ばして私の腰を抱へ、實に妙な態度で話し掛けたのだ。

私は退屈するといけないから、その話の詳細は述べないことにする。ただ、その結果だけ言へば、彼  
はデルガツチエフの處へ連れて行つて呉れ、「貴方は行つたことがあるから」と言ひ出したのだ。

私はちよつとした身振りだの表情だので私自身を裏切つてはならないと最大の努力をして、直ちに冷  
静になつた。けれども早速私は、デルガツチエフの處は全然知らないといふこと、尤もその家に行つた  
ことはあるけれど、唯一回で、それも偶然に行つたのだといふことなどを答へた。

「だけど、たとひ一度にしても行けたのなら、二度目だつて行ける筈だ。さうでせう？」

私は眞向から、何故そんなことを望むんです？ と非常な冷かさを以て訊いた。そして私は今日にな

るまで、一見愚者らしくない、ヴァツシンの評した言葉を借りれば「事務家」たる彼のやうな人間の持  
つてゐる、さうした單純さが理解出来ない。彼ははつきりと明らかに、「禁じられてゐる或こと嚴禁さ  
れてゐる或ことがデルガツチエフの處で行はれてゐるやうに僕は思ふんですよ。で、あの人を見守つて  
ゐれば、多分それで僕は何かをすることが出来ようから」と言つて理由を説明した。そして齒を見せな  
がら左の眼で何か眼くばせをした。

私は確とした返答をしなかつた。然しそのことを考へてゐる風を装つて「考へて置ませう」と言つ  
た。そしてそれを一緒に急いで家を出た。私の立場は益々紛糾して來た。直ぐにヴァツシンの處に駈け  
付けて見ると丁度彼は家にゐた。

「どうしたんです、君……も！」

彼は私を見ると、かう謎のやうなことを言つた。

その言葉の意味をも訊かないで、私は直ぐさま問題に觸れて、今までのことを彼に話した。彼は明ら  
かに氣を動かしたが、態度は矢張り全く落ち着いたままで暫くの間私の様子を探つてゐた。

「無理ありませんね、君はあの男を誤解してゐますよ。」

「いやよく解つてゐます。あの男の言ふ意味は言ふまでもなく明瞭ですよ。」

「どんな場合にも僕は非常に感謝してゐますよ、」と彼は眞面目に附け足した。「さうだ、實際、たとひさ  
うだとしても、あの男は君が或額の金を拒み得ないと思つたんですよ。」

「それにあの男は僕の位置を知つてますからね、——僕は始終賭博をしたり、變な振舞をしたりしましたからね、ヴァツシン。」

「そのことは聞いてゐます。」

「一番僕にとつて厄介なのは、君もあそこへ始終行くのをあの男が知つてることなんです。」と私は構はずに言つた。

「あの男はよく知つてゐますよ。」とヴァツシンは思ひ切つて簡単に答へた。「僕が何かの目的を持つてあそこに行くんぢやないといふことをね。それに實際あつた若い連中は皆ただお喋りをしてるんですよ、それつきりのことですよ。そのことは君も皆と同じやうに覺えてるでせうね。」

私は彼が私を充分に信じてゐないのだなと思つた。

「僕は何時も君に非常な感謝を捧げてゐるんですよ。」

「ステベルコフの事件が、どちらかと言へば風向が悪くなつてるといふ噂を聞きましたが、」と私は再び彼に聞いて見た。「兎に角耳にしたんですがね、例の株のことを……」

「何の株のことをお聞きでした？」

私は「例の株」のことと故意と言つたけれども勿論セルゲイ公爵が前日話したその秘密を彼に話す心算はなかつた。私は唯單に一寸した暗示を與へて彼の顔から、彼の眼から、果して彼が「株」のことを何か知つてゐるかどうかを見ようとしたわけだ。そしてさうした私の目的は達しられた。——彼の顔の

暖間的な莫然とした變化から、私は彼がこの事件について何か知つてゐるのを察した。私は彼の「何の株」といふ質問には答へないで黙つてゐた。彼も亦この質問を強ひて追求しなかつたといふことを書き添へて置く。

「リザヴェタ・マカロヴナはいかがですな？」と彼は心配するやうな興味を以て訊いた。

「丈夫ですよ。妹は何時も大層君のことを思つてゐます……。」

彼の眼には嬉しさうな色があつた。私はすつと前から、彼がリザには無關心でゐなかつたことに氣付いてゐたのだ。

「セルゲイ・ペトロウイツチ公爵がこの間か此處に見えましたよ。」

彼は不意にかう言つた。

「何時？」

「丁度四日前のことです。」

「昨日ぢやありませんか？」

「いゝえ、昨日ぢやありません。」と彼は探るやうに私を瞞めた。「もう少し後にあの人の來た顛末を詳しくお話するでせうがね、この場合、僕は君に警告しておきたい氣がするんです。」とヴァツシンは奇妙な調子で言つた。

「それはあの人が精神に異動を生じてはゐないだろうかと僕を驚かしたことなんです……。而も頭腦の

故障なんですね。が、ある人がその後も見えましてね」と突然彼は微笑をして附け加へた。「丁度君の見える一寸前に。そして僕はその訪問に依つても、その同じ結論をいやでも認めなければならぬやうになつたんです。」

「セルゲイ公爵が今したが此處にゐたんですつて？」

「いやセルゲイ公爵ちやありません。今、僕はセルゲイ公爵のことを話してるんぢやありません。アンドレイ・ペトロウイツ・ヴァシロフが今しがた見えたんです、で、…君は何も聞きませんでしたかね？」

あの人の身の上についた事件を？」

「何か事件があるんでせう。が、君とあの人の間にはどんな話があつたんです。その通り話してくれませんか？」

「無論、僕はこれを秘密にしなきゃならないんです。…僕たちは變なお喋りをしてゐますね。」と言つて又彼は微笑した。「けれどもアンドレイ・ペトロウイツは秘密にして呉れとは言ひませんでしたか、君はあの人の息子さんだし、それにあの人に對する君の感情を知つてゐるから、君に警告することが正しいことだといふ氣がするんです。考へて御覽なさい、あの人はこんな質問をしに此處へ来たんですよ。—彼にとつて近々一兩日の間に血闘をしなければならぬとした場合、僕がその介添人になつて呉れるだらうか？ と、かう言ふんです。無論僕は絶対に断りましたがね。」

私は本當に驚いて了つた。この新しい消息は何よりも一切を騒ぎ亂した。何か悪いことが持ち上つた

のだ、まだ私の知らない何事かが突發したのだ！ 私は本當に思ひ出した。ヴァシロフが前日「いや僕は行かないだらうよ、君の方から駈け込んで来るよ。」と言つたことを思ひ出した。

私はニコライ・イワニツチ公爵の處へ駈け出した。秘密の鍵が屹度其處にあると感じながら。ヴァシロフはさよならと言ふ時又私は感謝した。

二

老公爵は足に布を捲きつけて、開いた暖爐の前に坐つてゐた。彼は私の來たのを見ると喫驚したが、その態度には殆んど詰問するやうな調子があつた。その辭、彼は殆んど毎日のやうに私を招くそのために使を寄越してゐたのだ。とは言へ彼は愛の籠つた會釋をした。然し私の第一問に對する彼の返答は幾らか不承不承の體で、而も恐ろしく曖昧であつた。時々彼は思案するらしく、そして私に關聯してゐる筈の何かを忘れてゐてそれを思ひ出さうと努めてゐるかのやうに、私をちつと瞞めた。

私は正直に一切を聞いて暮んでゐると話した。心からの、そして人のいい微笑が直ぐに彼の顔に現れて、その氣持も軽くなつた。人を信頼しないやうな、警戒するやうな態度は同時に消えて了つた。恰もそんなものは忘れて了つたかのやうに。そして又實際忘れてゐたのだ。

「親しい君。僕は君が一番に來て呉れるだらうといふことを知つてゐたよ。それに君は知つてゐるかね、僕は昨日君のことを考へたんだ。誰が喜んで呉れるだらう？ あの男は喜んで呉れる！」と思つてね。

他の者は誰も喜んでは呉れないよ。でもこんなことはどうだつていい。世間といふものは卑しい噂話さ然し大したことぢやない……君、これは實に愉快なこと……が、無論君はあの女をよく知つてゐるね。そしてアンナ・アンドレイヴナは君のことを大層よく言つてゐるよ。これはね、英國の記念集から引き出した莊重優美な顔だ。これ以上魅力のある英國の彫刻はないよ。……二年前に僕はかうした彫刻の完全な集を持つてゐた。……僕は始終心算はあつたんだがね、始終、それに一度としてそのことを考へなかつたのが唯々不思議に思はれるよ。」

「僕の記憶が間違つてゐなければ、貴方は何時もアンナ・アンドレイヴナを特別に最貴になすつて好いてゐたやうですね。」

「君、僕を誰をも害したくはないよ。友だち、親しい関係のある者、心に觸れる者、さうした者との生活は天國さ。あらゆる詩人は……一口に言ふと、そのことは歴史以前からよく知られてゐるよ。夏に僕たちがソデンに行き、それからバド・ガタインに行つたことを君は知つてゐるね。それにしても君、君が僕に會ひに来てからの位騒いだらう、一體どうしたんだね？ 僕は君を待つてゐたんだよ。その間にどんなことがあつたんだね。どんな用があつたんだね？ 僕は不安でゐるのがただ残念さ。一人きりになると直ぐに僕は不安を感じる。だから僕は一人きりにされてはいけないのだ。さうだらう？ それは一と二と加へて四になるといふ程明らかなことさ。僕はそのことをあの女の最初の言葉から咄嗟に了解したんだ。ああ君、あの女はたつた二言話したきりだよ。けれども……それは立派な詩のやうな言葉

だつた。が、言ふまでもなく君はあの女の弟だ。さうだらう？ 君、僕が君をこんなに好いてゐるのは譯があつてぢやないよ！ 誓つて言ふが、僕はこの凡ての豫感を持つてゐたんだ。僕はあの女の手に接吻して泣いたものだ。」

彼は又泣くためなのかハンカチを引き出した。彼は私の想像に依るとその「神經的發作」のためにひどく興奮し苦しんでゐた。きまつたやうに、事實何時も彼は益々良くなり益々上機嫌になつてゐた。

「僕は何も彼も許すよ、君」と彼は續けて行つた。「僕は誰をも許したい。誰かに怒つてゐた頃から随分になる。あの女は實に美しい女ぢやないか。……カテリナ・ニコラエヴナは笑ふ。……僕は誰にも迷惑を掛けまいと言つた。僕たがはロオマンズを始めたばかりなんで、ただ皆にこれを最後までさせて呉れとお願ひするきりなんだ。恐らくこれは夢だらう、夢かも知れない。けれどもその夢を奪つてもらひたくないんだ。」

「夢とおつしやるのはどういふ意味なんです？ 公爵。」

「夢？ どうして夢なんだ？ 夢として置かうぢやないか。そしてその夢と一緒に死ぬるとしようぢやないか。」

「何故死ぬるなんておつしやるんです、公爵？ 今貴方はお生きにならなきや、ただ生きなきや！」

「おや、何を僕は言つたんだらう？ 僕はただ解らないんだが、何故人生つてこんなに短いんだらうね？ 無論人生に對して退屈であることを避けるのが『創造者』の藝術品なんだ。プウシユキンの詩の

やうに完全な、そして非難の打ちどころのない藝術だ。短いといふことが眞の藝術の最も根本的なものだ。然し若し誰にしても退屈しないならば、以上永く生きてゐるべきだと思ふよ。」

「公爵、これはまだ公になつてゐないんですか？」

「いや、確かになつてゐない！ 僕たちだけで定めただよ。秘密だ、秘密だよ。ただカテリナ・ニコラエヴナにだけは詳しく打ち明けたわけだが、それは彼女に對して公平でないといふ氣がしたからさ。ああ、カテリナ・ニコラエヴナは天使だよ。彼女は天使だ！」

「さうです。さうですとも！」

「さうだ、そして君もさうですともと言ふんだね？ はてな、僕は君も彼女の敵だと思つてゐたよ。ああ、さうだつた、彼女はもう君と會つて呉れるなと頼んでゐたつけな。ところがどうしたことだ、君が這入つて來た時にはすつかりそのことを忘れちやつた。」

「何ですつて？」と私は飛び上つて叫んだ。

「何故？ 何處で？」

（私の豫感は間違つてゐなかつた。タチアナの訪問以來何かこんな風な豫感を私は抱いてゐたのだ。）

「昨日だよ、君、昨日だよ。實際どうして君が這入つて來たか解らないね、何故つて命令がしてあるんだから。どうして這入つて來たんだね？」

「ただ歩いて這入りましたよ。」

「それが一番たしかな方法だね。若し君がこつそりと潜り込まうとしたら、屹度皆で掴まへたらうよ。それに君がただ歩いて來たもんだから皆も通したんだ。單純といふことが、君、現實では最も狡猾なことさね。」

「僕には解りませんよ。ぢや貴方も僕と會はないつもりだつたんですね！」

「いや君、僕はそれでどうしようといふのぢやない。……本當だよ、僕を信じ給へよ、僕は君が非常に好きなんだからね。然しカテリナ・ニコラエヴナはいやに強くそのことを主張するんだ……おや、其處に來たよ！」

その瞬間に、戸口の處にカテリナ・ニコラエヴナが姿を見せた。彼は外出の服装をしてゐた。そして例に依つて父親に接吻するために部屋に這入つて來た。が、私のゐるのに氣付くと、どきまぎして一寸立ち上つた。そしてくるりと後を振り向いてそのまま出て行つた。

「おや！」と老公爵は唖驚してひどく周章しながら叫んだ。

「これは誤解だ！」と私は叫んだ。「一分間だけ……僕は……直ぐに引き返して參りますよ、公爵！」かう言ひ残して私はカテリナ・ニコラエヴナの後を追つ掛けた。

續いて起つた凡てのことは餘りに慌しくて、それをよく反省する暇もなく、少くともどうしようかを考へる隙さへもなかつた。若し考へる餘裕があつたならば、屹度違つた態度に出たことだらうと思ふ。然し私は頭はない子供のやうに思考力を失つて了つたのだ。



私は彼女の部屋を目掛けて駆け出した。けれども途中で召使の男から、カテリナ・ニコラエヴナはもう階下に降りて車に乗らうとしてゐらつしやると聞かされた。で、私は表の階段を迂り降りた。カテリナ・ニコラエヴナは毛皮裏の外套を着て、傍らに、(と言ふよりも手と手とを組んで)背の高い嚴めしい顔付きの、軍服に剣を吊るした士官と並んで階段を降りてゐるところであつた。その大が套を持つた召使が従つてゐた。これが例の男爵で、三十五聯隊の大佐であつた。彼は典型的に軽快な士官で、細面の、何ちらかと言へば長い顔に、生姜のやうな口髭と、同じ色の平らかな眼瞼とを持つてゐた。顔は非常に醜くかつたが、決定的な傲然とした表情があつた。私はほんのその瞬間に見ただけだから、彼のことは簡単に記しておく。つまり彼は嘗て出會つたことのない人物であつた。

私は帽子も持たず外套も持たずに二人の後から階段を駆け降りた。カテリナ・ニコラエヴナの方が先に私に氣付いたと見えて、慌しく何事かを男爵に囁いた。彼は心持ち頭を捻つて召使と門番とに合圖をした。と、召使の男がこちらへつかつかと進んで來たが、私は彼を突き飛ばして後を追つた。丁度ピュリン男爵はカテリナ・ニコラエヴナを助けて車に入れようとしてゐた。

「カテリナ・ニコラエヴナ！カテリナ・ニコラエヴナ！」

私は馬鹿のやうに意味もなく叫んだ。さうだ、馬鹿のやうに！ おお、私はその凡てを記憶してゐる帽子も持つてゐなかつたのだ！

ピリユンは又荒々しく召使を顧みて、何か大聲に嗚鳴つた。一言か二言だつたけれど私には聞き取れ

なかつた。私は誰かが自分の腕を掴んだやうに感じた。と、車は動き出した。——私は再び叫んで車を追はうとした。私の眼には、カテリナ・ニコラエヴナが車の窓から覗きながら、ひどく狼狽してゐるらしいのが映つた。然し私はいやに周章してゐたので、無意識にピリユンに突き當つてその靴を踏んだ。これがひどく彼を怒らせたことだらうと思ふ。彼は軽い叫びを響けると齒を剝き出して、逞ましい腕で私の肩を攫み荒々しく突き飛ばした。で、私は二三碼もはね飛ばされて了つた。

その瞬間に、彼の大外套は手渡された。彼はそれを着ると車に乗り返んで今一度腹立たしさうに召使と門番とに私を指さしながら嗚鳴つた。そこで二人の男は私を掴んで抑へ、召使の方が外套を私に着せ一方門番が帽子を寄越しながら、何か告げた。——私はそれを記憶してゐない。が、兎に角何かを告げたのだ。私は何のことか解らないままに、突つ立つて聞いてゐた。直ぐに私は其處を去つて駆け出した。

三

走りながら何も見ず、人に衝突した擧句、漸く私はタチアナ・バヴロヴナの家まで走り着いた。馬車を雇はうといふことさへ私には氣が付かなかつたのだ。ピリユンは彼女の眼前で私を突き飛ばした！

たしかに私は彼の足を踏んだのだ。それはたしかだ。そして彼は本能的に底豆を踏まれた人として突き返したのだ。——恐らく實際私は彼の底豆を踏んだのであらう！ けれどもそれを彼女は見てゐた。私

が召使に掴まれるのを見てゐたのだ。これは凡て彼女の眼前に起つたことだ。彼女の眼前で！  
 タチアナ・パヴロヴァの家に行き着いた時、はじめは私は口を利くことも出来ないで下顎は熱に浮かされたやうに顫へてゐた。又實際熱があつたのだ。その上に私は泣いてゐた。……おお、それ程、私は侮辱されたのだ！

「どうしたんです！ 蹴出されたんですか？ しつかりなさい！ しつかりなさいよ！」とタチアナ・パヴロヴァは言つた。私は長椅子に身を埋めて、物も言はず彼女を見た。

「どうしたんですよ？」と彼女は強く私を睨めながら、「さあ、少し水をお飲み、一杯お飲み。干して下さいなさい！ 今まであそこで何をしてたんです？」

私は自分の追ひ出されたことと、ピユリンが眞晝の往來に突き飛ばしたことを小聲で話した。

「何か解りますかね、まだ駄目か知ら？ さあこちらへ来てこれを読んで、喫驚なさい。」

かう言つて彼女は一通の手紙を卓子から取り上げ、私に渡して期待するやうに私の前に突つ立つた。それがヴァシロフの手蹟であることは直ぐに解つた。數行の文句でカテリナ・ニコラエヴナに宛てたものである。私は身顫ひした。そして忽ちに理解力が恢復して來た。この恐ろしい怪奇な手紙といふのは原文のまま次のやうな文句であつた。

親しき夫人

カテリナ・ニコラエヴナへ。

貴女が性質と技巧とに於ける如く悪化して小生は尙貴女の情熱を制し子供等の上に詭計を試みられざるやう期待仕るべく候。而も貴女はそを行つて些の恥づるところもなし。小生は乞ふて左の事實を御通知申すべく、かの貴女が御存知の手紙は言ふまでもなく蠟燭の灯にて焼棄てられたるものにもあらず又貴女が探して何等の手掛りをも發見されざりし如くクラフトの所有に屬したること無之候。故に子供を空しく追求するをお止めなされたし。彼を手離されたし、彼は未だ一人前に成長しをらず、殆んど子供肉體的にも精神的にも未熟の者なれば、何の役にも立ち申さずと存候。小生は彼の幸福に關係あり、從つて敢て貴女にこの書面を送る者に候。但し小生の目的が達せられるを餘り期待は致居らず候。この寫しを同じくピユリン男爵にも送るべく候。

エイ・ヴァシロフ。

私は讀みながら眞蒼になつた。と、不意に眞赤になつて唇は憤怒のためにぶるぶると顫へた。

「あの人は私のことをこんな風に書いてゐる！ 一昨日僕があの人に話したことを！」と私は狂氣のやうに喚いた。

「ちや貴方があの人にお喋りしたんですね！」とタチアナ・パヴロヴァは手紙を私の手から引つたくりながら叫んだ。

「だけど……僕はさう言つたのちやありません、ちつともそんなことを言ひはしませんよ！ ああ、今あの女は僕のことをどう思ふことが出来るだらう！ が、これは狂氣の沙汰だ、御承知の通り。あの人は狂氣したんです……僕は昨日あの人に會ひましたが、一體この手紙は何時出されたんですか？」

「昨日、朝早くです。あの女の處へは夕方に着きました。そして今朝あの女は自分で持つて来たのです。」

「でも僕は昨日會つたんですがね、あの人は狂氣になつたのです。ヴァシロフはこんな手紙を書くことは出来ません、狂人の書いたものですよ。どうしてこんな手紙を婦人に宛てて書き得る人があられるでせう？」

「さうした狂人が嫉妬と輕蔑とから盲目になり聾になつて、その血潮が毒液に化して了つた時には夢我夢中に丁度こんなことを書くものです。……貴方はあの人やどんな風か御存知ない。今皆はあの人を牢に閉ぢ込めてるでせうよ。あの人は自分で自分の頭を斧の上に打ちつけたんです！　むしろ夜中にニコラエフスキ鐵道へ出掛けて線路の上に頭を横たへた方がよかつたらうに。頭が重くつて溜らないんなら、汽車はその頭をちよん切つて呉れたでせうにね！　何だつて貴方はあの人に話したんです！　どんな氣であの人を擲擽つたんです！　威張りたかつたんですかね？」

「然し何といふ憎しみだらう！　何といふ憎しみだらう！」と私は頭を敲きながら叫んだ。「そして何のために、何のために？　女に就いて！　彼女は彼にどんなことをしたんでせう？　こんな手紙を認めるなんて、あの二人の間には一體どんなことがあつたらう？」

「憎しみですつて！」

タチアナ・バヴロヴナは恐ろしい皮肉を籠めて、かう私の口調を真似た。

私は又眞赤になつた。と不意に私は新しい或物を掴んだやうに思つた。——私は探るやうに彼女の顔を見据ゑた。

「行つておしまひなさい！」と彼女は横を向いて嘔鳴つた。「貴方と一緒にゐるのは溜りませんよ。もう津山です！　貴方がたは皆地の底へ沈んで了つたらいい！……そのためにお氣の毒なのは、貴方のお母さんきりだ……。」

無論私はヴァシロフの處へと駈け出した。然し何といふ欺瞞だらう！　何といふ欺瞞だらう！

## 四

ヴァシロフは一人ではなかつた。先づその事情を説明して置くが、——ヴァシロフは、前日カテリナ・ニコラエヴナに宛てた手紙を出し、そして又その寫しをビュリン男爵に出してから（何故男爵に出したか、それは神しか知らないことだ）當然、今日のうちに、その自分の行爲のある「結果」を豫期しないではをられなかつた。それでさうしたことゝの用意を整へた。朝の間に彼は母をリザと一緒に階上の、例の私の住んでゐた「棺」のやうな部屋に移した。後に知つたことであるが、リザは家に歸つて来た時に身體の具合が悪くて床に就いてゐたのだ。他の部屋、殊に客間は綺麗に拭き清められ、特別念入りに掃除されてあつた。午後二時になると、案の定某R男爵が姿を現した。この人は四十位の大佐で、瘦せて背の高い、少し頭の禿げた、丁度ビュリン男爵のやうに生妻色の口髭を生やした、獨逸生れの紳士であ

つた。そして一見非常に腕力の逞ましい風であつた。彼は露西亞の軍隊内にさらに見かけるR男爵家中の一人であつたが、このR男爵家の人々は最高の男爵的威厳を具へた、財産のない、賭博を商賣にしてゐる、皆熱心な、そして良心に疾しからぬ人々ばかりであつた。

私は彼等が會つた始めは間に合はなかつたので知らないが、兎に角二人ともひどく興奮してゐた。ヴァシロフは蒼白い顔をしてゐながらも、よく自分自身を制して一語一語と話し續けてゐた。男爵の方は聲を上げて、明らかに烈しい身振りを見せてゐた。彼は自分自身を一生懸命に抑へようと努めてゐたが見たところむつかしい横柄な、そして幾らか面喰つた形はあるものの、輕蔑的な態度さへ見せてゐた。私を見ると彼は眉を擡めた。けれどもヴァシロフは私の來たことでほつと救はれたらしく見えた。

「お早う、君。男爵、これが例の手紙の中に私の書いた顔る若い青年なんです。そしてこれは決して貴方のお邪魔にはなりません、役に立つかも知れませんよ」

(男爵は輕蔑的に私を眺めた。)  
「君、——」とヴァシロフはつづけた。「君が來たんで僕は嬉しいよ、全くね。で、隅に坐つて、男爵との話が済むまで待つてゐて呉れ給へ。心配なさいますな、男爵、この男はただ隅つこにぢつと坐つてるきりなんですから。」

私は遠慮しなかつた。何故なら、既に決心してゐたし、これが興味を唆つたから。——私は黙つたまま隅に腰を据ゑた。出来るだけ身體を後にすまして、その會見が終るまで身動きもせず、或は殆んど腰きもせず坐りつづけた……

「もう一度申し上げますよ、男爵、」とヴァシロフは決心したやうに言ひ出した。「私があんな話らない狂氣のやうな手紙を差し出しました相手のカタリナ・ニコラエヴナは名譽に慣れる方といふばかりぢやない、あらゆる意味での完全の極だと思ひますよ！」

「そんな、御自分の言葉そのものを否定なさるやうなことは、もう先刻も申し上げましたが、攻撃を反覆なさると同じことです。」と男爵は唸り立てた。「貴方のおつしやることは敬意を缺いてゐますよ。」

「でもそれを正しい意味におとり下さる方が眞理に一番近いかも知れませんよ。私は御覽の通り神經發作のために苦しんでゐます。神經的苦痛ですね。それに實際治療中なんですが、たまたまこんなことがこんな時に起つて……」

「そんな説明は御免蒙りたいもんですね。三度申し上げまするんですけど、貴方は根本的に間違つてゐらつしやいますよ。多分故意と間違ひたいと思つてゐらつしやるんでせう。最初から私は警告して置きましたよ、あの婦人に関する金問題は、——つまりマアコフ夫人にお宛てになつた貴方のお手紙の問題は全部私たちの説明から除外しなさいやならぬといふことをね。貴方はそこに引き返してゐらつしやる。ピュリン男爵は唯ピュリンだけに關するこの事件を説明して貰ふやうにとの依頼で私にお委せになりました。即ち、あの「寫し」をピュリン男爵にお書きになつた無禮と、例の追白にお認めになつた「何時なりとも如何やうにともお返答有之度候」といふ文句との説明を乞ひたいのです。」

「然しそれは、私の考へでは、説明するまでもなく解り切つたことぢやありませんか。」

「解りました、承りました。貴方は辯解をなさらうとはしないで、それを肯定してゐらつしやる。然し私は今、私自身の立場から遠慮なく真相をお話して是非を正したいと思ひます。と言ふのはピュリン男爵にとつて、貴方と今後……同一の立場を以てお會ひすることは絶対に不可能なことだといふ結論に到着せざるを得ないといふことなんです。」

「さう決心なさる方が無論貴方のお友だち、ピュリン男爵のために利益ですよ。で、言つて置かなきやなりません、私はちつとも驚きはしませんよ。そんなことは豫期してたんですからね。」

挿んで記して置くが、私には最初の言葉、最初の瞥見から、ヴァシロフがこの言葉に導かうと努めてゐることが解つてゐた。彼は故意とこの怒りつばい男爵を揶揄して怒らし、我慢の出来ぬやうにしようと試みてゐたのだ。男爵は果して全身を震はせた。

「貴方が奇才を持つてゐるのことは承知してゐましたがね、然し奇才のあることと聰明であることは全く別物なんですよ。」

「大層深刻な御觀察ですね、大佐。」

「私は貴方に讀めていただきたいとはお願ひいたしませんでしたよ。」と大佐は嗚咽した。

「私は貴方と下らぬ議論をしに來たのぢやありません。少しは耳を借して下さい。ピュリン男爵は貴方のお手紙を受け取つた時、どうしようかと躊躇したのです。何故と言つて、そのお手紙は癡狂院を思はせましたからね。それで無論、手段は貴方を……壓迫するために執られたかも知れません。けれども、

或特別な考へ方をすると、貴方の場合は放縱を以て扱はれてゐて、吟味が貴方の身のまはりには行はれてゐたのです。——つまり、貴方は立派な社交界に屬してゐて一度は近衛兵の勤務をなすつてゐたけれども、而もその社交界からは明らかに除外されてゐらつしやる。そして貴方の評判は現に曖昧なものなんです。それにも係らず私は個人的に事實を確めるために此處に参りました。そして今、萬事をより、悪くするために、貴方は全然平氣な顔で諛言を喋り散らし、神経發作に責任があるんだなどと自分で言つてゐらつしやる。澤山です！ それ以上は聞きたくない。ピュリン男爵は、こんな事件にわざわざ身を屈して關係することの出来ないやうな位置と名聲とを持つてゐる人です。……簡単に言へば、私は貴方に申し上げて置く権利がありますよ、若し今後この反覆、或は貴方の最近の行爲に類する何事かが起つたとすれば、貴方を正氣に返すための手段が忽ちに講ぜられるでせうよ、誓つて言つて置く、忽ちにです。私たちは未開地に住んでるんぢやない、ちゃんと秩序のある國家に住んでるんですからね！」

「實によく解つてゐらつしやいますね、私のいい男爵閣下！」

「畜生！」と男爵は突然椅子を離れて叫んだ。

「お蔭で私が『貴方のいい男爵』でないことが直ぐに解りましたね。」

「ああ、私は又貴方に御注意して置かなきやなりません、——」と、ヴァシロフも席を立ちながら言つた。「妻や娘は遠方に住んでるのぢやありませんからね……で、そんなに大きな聲をお立て下さらないやうにお願ひいたしますよ。貴方のお聲は聞えますからね。」

「貴方の妻と……何だ……私はこの厭な仕事にけり、を付けるために、此處に坐つて貴方にだけ話して居るんですよ。」と男爵は調子は少しも下げないで、以前と同じやうに荒々しく續けた。「もう澤山だ！」彼は恐ろしく唸つた。「貴方は禮節のある社會から葬られてゐるばかりでなく、狂人ですよ、真正道銘のお喋りの狂人ですよ。而もそれを貴方自身で證明なすつて居るぢやないか！ 貴方は放縱にも慣れないで、私は斷言することが出来ますよ、今日忽ち貴方に對しての手段が執られるだらうといふことを……その擧句、貴方は狂氣を鎮めるに必要なやうに何處かに閉ぢ込められて了ふ……そして貴方は町を追つ拂はれて了ふのだ。」

彼はかう言つてから、大跨に部屋を出た。ヴァシロフは戸口まで送つて出なかつた。彼は喪心したやうに私を睨めて立つてゐたが、その様子は恰も私の妻が眼に這入らないものやうであつた。と、不意に彼は笑つて、髪を撫で上げ、帽子を掴んで、自分も矢張り戸口に歩き出した。私はその手を掴んだ。

「ああさうだ、君か。君も此處にゐたんだつたつけね。君は……聞いたかね？」と彼は一寸私の前に立ち止つて言つた。

「どうして貴方はあんなことが出来たんです？ どうして曲つたことが出来たんです？ ……不名譽な

……あんな欺瞞を以てして！」

彼は私をちつと睨めた。その微笑は次第々々に擴がつて遂には全くの大笑となつて了つた。

「いや、僕も不名譽な目に會ひましたよ。……彼女の前で！ 彼女の前で！ 皆は彼女の前で僕を笑ひ

ました。そしてあの男は……そしてあの男は僕を突き出して了ひました！」と私は我を忘れて嘔吐した。

「本當かね？ ああ、君。君のために氣の毒に思ふよ。……ちや皆は君を笑つたことだらうね？ え」

「貴方御自身で笑つてゐらつしやる。貴方は僕を笑つて居るぢやありませんか。それが貴方には面白いのだ！」

彼は急いで手を延ばして帽子を冠つた。そして笑つた。聲高に笑ひながら部屋を出て行つたのだ。

彼を追つ掛けたところでそれが何になるだらう？ 私には解つてゐた。と、私は一瞬にして凡てを失

つて了つた。不意に、思ひも掛けず母が現れたのだ。——彼女は階下から登つて、おづおづと自分の身のまはりを眺め廻した。

「あの人は出掛けたの？」

私は物も言はず腕を母の身體に掛けた。彼女もしつかりと私の身體を抱きしめた。

「私のお母さん。屹度貴女は此處にぢつとして止まつてゐることが出来ないでせうね？ 直ぐに出ようぢやありませんか。僕はお母さんをかくまひますよ。奴隷のやうに、貴女とリザのために僕は働きますよ。皆をお離れなさい、皆を。行かうぢやありませんか。一人でゐませう、お母さん、貴女は覚えてゐらつしやいますか、トツチャアドの學校にゐる頃よく來て下さいましたね。尤もその頃僕は貴女をお母さんだとは知らなかつただけだね。」

「覚えてをりますよ。私はお前さんの一生を通じて悪くばかりして來ましたね。お前は私の子供なんで

す、それでゐて私はお前に對しては見知らぬ者だつたんですよ。」

「それはあの人の罪ですよ、お母さん。皆あの人の咎ですとも。あの人は一度だつて私たちを愛しはしなかつたんです。」

「いいえ愛してゐました。皆を愛してゐました。」

「出て行かうぢやありませんか、お母さん。」

「あの人を離れてどうして私が出て行けるだらう、お前あの人を幸福だと思つてゐますか？」

「リザは何處にゐるんです？」

「彼女は臥せつてゐます。家に歸つて来てから身體の具合が悪くつてね、私、喫驚してしまつたんですよ。何だつて皆さんは、あの人をあんなに怒つてるんだらう？　今あの人をどうしようとしてるんだらう？　あの人は一體何處に行つたんです？　何だつて先刻の士官さんは嚇したんです？」

「あの人には何のことも起りやしませんよ、お母さん。起りやしない、起る筈もないんです。あの方はそんな風な人間ですからね！　や、タチアナ・バヴロヅナが來た。若し僕をお信じにならないのなら、さあ、此處に見えたから、タチアナ・バヴロヅナに訊いて御覽なさいまし。」

タチアナ・バヴロヅナは慌しさうに部屋に這入つて來た。

「さよなら、お母さん。直ぐに又參りますよ。そしてその時は又同じことをお願いいたしますよ……」  
私は駆け去つた。私は誰とも會ふに堪へなかつた。タチアナ・バヴロヅナを一人で放擲つて置くがい

い。母だつて私には厭になつた。私は一人でゐたかつたのだ。一人でゐたかつたのだ。

## 五

然し道を横切らない内に、私は殆んど歩くことも出来ないのを感じた。そして通りかかりの人々に譯もなく不注意にふらふらとなつて衝突した。けれども私は自分を何うすることが出来ただらう？　私が誰かに何かの役に立つだらうか、そして今何が私の役に立つだらうか？　機械的に私の足はセルゲイ公爵の處に向つた、その辯彼のことば微塵も考へてはゐなかつたのだ。

セルゲイ公爵は留守でめつた。私はピオトル（彼の下男）に書齋で待つてゐるからと話した。（以前に幾度もさうしたことがあつたので。）彼の書齋は廣い天井の高い部屋で家具類で裝飾されてあつた。私は一番暗い隅を選んで這入り込み、其處の長椅子に凭れ、卓子に肘を突きながら、兩手で頭を抱へ込んだ。さうだ疑問は「今何が私の役に立つだらうか？」といふこれであつた。若しその時、その疑問を組織的に述べる事が出来たとしてもそれに答へることは全然出来なかつたのだ。

然し私は自分で疑問を解決することが出来なかつた。と言ふよりもその疑問を理性的に思考することが出来なかつた。既にかうした頃の終りに近づいてから私が次々に突發する事件のために壓迫されて了つたことは述べて置いたが、さて坐つてゐると、一切のことが胸の中を混沌として渦巻き返つてゐた。

「さうだ。私は彼の裡にある凡てのものを見落してゐたのだ。彼を一向に理解しなかつた、」といふ考がそ

の瞬間に漠とはしてゐたが閃めいた。彼はつい今しがた私を見て笑つた。然しそれは私を笑つたのぢやなく、その時は凡てビュリン公爵を笑つたのだ。一昨日、彼は凡ての事情を知つて、沈黙になつてゐた。彼は私の小料理屋での馬鹿げた告白に飛び掛つて来て、真理の如何に係はらず、それを捻ぢ伏せた。然し彼は眞理に對してどんな注意を拂つたか？ 彼は自分で彼は自分で彼女に書いたその手紙の文句を信じなかつた。彼の願つてゐたことは單に彼女を侮辱するにあつた。意味もなく、目的も知らず、唯彼女を侮辱するにあつた。彼は口實を懸命に探し求めてゐた。で、私は彼にその口實を與へたのだ……彼は狂犬のやうに振舞つた！ 今、彼はビュリンを殺したいと思つてゐるのか？ 何の爲めに？ 彼の魂はその何のためかを知つてゐる！ 而も私は何にも、彼の心中に何があるのかを知つてゐない……いやいや私は今でさへ知つてゐない。彼女を彼がそれ程の情熱を以て愛してゐたことが有り得ようか？ 或は彼女をそれ程の激情を以て憎んでゐるのか？ 私には解らない。が、彼自身には解つてゐるのだらうか？ 何故私は母に向つて『何にも起る筈がありませんよ』と言つたのか？ その言葉を以て私は何を意味したのか？ 彼を私は失つたんぢやなからうか？

「……彼女は私がどんな風にして突き出されたかを見てゐる……彼女も亦笑つたのぢやないか？ 私は笑ふべきだつた！ 彼等は間隙を打つてゐたのだ、間隙を……」

「どういふ意味だらう？」と不意に私は思つた。

「あの不吉な手紙の中で、彼が、例の書類は焼き棄てられたのではなく、現存してゐると書いたのは、

一體どういふ意味だらう？……」

「彼はこの瞬間に別にビュリンを殺してもゐないで、言ふまでもなく例の小料理屋の中でルシアを隠してゐることだらう！ そしてルシアを聞き終つてから行つてビュリンを殺すつもりだらう。ビュリンは私を押し遣つた、いや突き飛ばした。彼は突き飛ばしたのだらうか？ そしてビュリンはヴァシロフと血闘するのさへ厭がつてゐる。それに私と血闘するやうなことがあるだらうか？ 私は明日拳銃でビュリンを往來に待ち伏せて殺すのが本常だらう……」などと、私は全く夢中に思ひ續けてゐた。

その瞬間に私は扉が忽ち開いたやうな夢を見てゐるやうであつた。そしてカテナ・ニ、ラエツナが這入つて来て、その手を差し出し、二人共に笑つてゐるやうに思つた。……ああ、私の學生、私の親しい人！ さうした幻影、と言ふよりも、さうしたことを求める強烈な慾望が、日が暮れると同時に私の胸に一杯になつてゐたのだ。彼女の前に立つて、彼女にさよならを言ひ、そして彼女がその手を寄越して笑つた、——それは決して遠い昔のことではない。こんな短い間に、こんなにまで二人の間が離れて了ふとは、まあ一體何うしたことだらう！ この瞬間にただ彼女の處に行つて一切を説明したならば！ ああ！ 私にとつて全く新しい世界が何うしてあんなに不意に起つたことだらう！ さうだ、新しい世界、全く全く新しい……そしてリザダのセルゲイ公爵達の皆が古い……私は此處セルゲイ公爵の處にゐたのだ。そして母は——若しこんな風な状態で、どうして彼と一緒に生きて行くことが出来たらう！ 私には出来た。私にはどんなことでも出来る。けれども彼女には？ これからどうなるだらう？ かう



してリザ、アンナ・アンドレイヴナ、ステベルコフ、セルゲイ公爵、アフエルドフなどの面影が私の病的な頭腦の中を滅茶苦茶に渦巻き廻つてゐた。然し考は益々秩序のない支離滅裂なものとなつた。で、或ことを考へてそれを首尾よく擱んだ時には、私は嬉しかつた。

「私は『私の思想』を持つてゐる！」と突然私は考へた。「けれども果して私は持つてゐるのだらうか？ 習慣的にこれを繰り返してゐるのではないか？ 私の思想は暗黒と孤獨との結晶であつた。而も古い暗黒に這ひ返ることが出来るだらうか？ ああ！ 私は例の『手紙』を焼き棄てはしなかつたのだ！ 全くのところ一昨日焼くのを忘れて了つたのだ。これから歸つて蠟燭の灯で、無論蠟燭の灯で焼くでしょう。が、ただ私は自分が當を得たことを考へてゐるかどうか、それが解らないのだ……。」

もうとつぷりと暮れてゐたので、ピオトルが蠟燭を持つて來た。彼は頭を下げて夕食は済んだかどうかを訊いた。私はただ身振りだけして彼を歸した。が、一時間もすると、彼は何か茶を持つて來て呉れた。で、私は喜んで大きなコップに一杯飲み干した。それから何時だらうと訊いて見た。丁度八時半だつたので、五時間半の間此處にちつと坐り續けてゐたわけだが、別に私は驚きをも感じなかつた。

「もう三度も來て見ましたが、私、お眠みになつてゐるのだと思ひましたよ。」とピオトルは言つた。

私は彼の來たことを記憶してゐなかつた。何故かは知らない。が、不意に自分が今まで眠つてゐたことを考へるのは知らなかつたで、私は立ち上つて部屋の中をぐるぐる歩き始めた。一度と眠らないためである。遂に頭が烈しく痛み出した。

十時になつてセルゲイ公爵は歸つて來た。で、私は自分が彼を待つてゐた事實に喫驚して了つた。實を言へば彼のことはすつかり、すつかり忘れてゐたのだつた。

「此處にゐたんですか。僕は君に會はうと思つて方方探し歩きましたよ。」

彼はかう言つた。その顔は憂鬱に沈んで恐ろしく、微笑の跡さへもなかつた。眼には固定した考が現れてゐた。

「僕は今日一日中一生懸命になつて奔走し、神經といふ神經を悉くはち切れる程張つてゐたんだが、と彼は緊張して言つた。「何も彼も失敗に歸しました。そして將來には恐怖の外何物もないのです……(但し彼はニコライ・イワニツチ公爵の許へは行かなかつたのだ)」

「僕はジビエルスキイに會ひました。彼奴は仕様のない男ですよ。御承知の通り吾々は第一に金を得なければなりません、金を得てから會ふんです。で若し金策に成力しないなら、吾々は……僕はそのことを考へまいと決心しましたよ。若し今日金が出来さへすれば明日一切のことが解るんです。君が勝つた三千留は手付かずでそのまま此處にある。三留足りない位のもので丁度三千留ありますよ。僕が君に貸した金を差し引いて君に渡す金が三百四十留あるわけだ、それだけを受け取つて下さい。それに別に七百留を加へて一千留とし、僕は掛りの二千留だけを取つておきます。で、これから一人でゼルスチコフの處へ出掛け、卓子に向ひ合つて席を占めて、一萬留を勝つとしようぢやありませんか。——恐らく僕たちはどうかかなりですよ、たとひ勝たないとしたところでね。それから……これが何にしても残つた唯

一つの方法ですよ。」

彼は将来を豫言するやうな微笑を浮べて私を顧みた。

「さうです、さうです！」と突然私は叫んだ。再び生氣が恢復したかのやうに。「行かう。丁度僕は貴方を待つてゐたところでしたよ。……」

註記して置くが、その待つてゐる間中、私は決して賭博のことなど考へても見なかつたのである。

「然し卑しくはないか？ 墮落した行ぢやないかな？」と公爵は不意に言ひ出した。

「球轉し（賭博の一種）に行くことが！ だつてそれが全部ちやありませんか！」と私は叫んだ。

「金が全部です。全くのところ、貴方と僕とのみが聖者ですよ。考へて御覽なさい、ピュリンは自分自身を賣りました。アンナ、アンドレイヴナも自分自身を賣りました。そしてヴァシロフは……さうだ、ヴァシロフが狂氣になつたことをお聞きでしたか？ 狂氣！ 狂氣ですよ！」

「君は大丈夫ですかね、アルカアデイ・マカロウイツチ？ 君の眼には幾分か異様な光がありますよ。」

「貴方は自分一人で行きたいから、そんなことを言ふんでせうよ！ 然しかうなつては喰つ着いて行きます。一夜中賭博のことを思ひ思ひしたのは何物のためでもないんです。行かう、さあ行きませう！」

私は一切に對する解決を其處に見出したかのやうに嘯鳴りつづけた。

「よろしい。ちや行きませう、君は熱に浮かされてるやうだけれど。で……」

彼はおしまひまで言はなかつた。彼の顔は重くて凄かつた。さて出掛けようといふ間際になつて彼は

ふつと戸口に立ち止つた。

「君は知つてゐますかね、僕の困難を救済するには、この賭博以外に今一つ方法のあることを？」と彼は不意に言つた。

「どんな方法が？」

「公爵にふさはしい方法が。」

「それは何です？ それは何です？」

「後になれば解りますよ。ただ僕はその方法に價しないといふことだけ言つておきます。何故と言ふに僕は餘りに延ばし過ぎたからです。さあ行かう。だけど、君は僕のこの言葉を覚えて置いて下さい。……僕たちは召使の執るやうな方法を試みよう……そして君は、僕が召使の執るやうな方法を試みながら自分の意識してゐること、自分の自由意志から試みてゐることを知らないのだと想像しますかね？」

## 六

その中に自分の救済のあらゆる希望、脱却のあらゆる方法が凝結してでもゐるやうに、私は球轉しの臺に突進して行つた。而も、既に述べた通り、私はセルゲイ公爵が歸つて来るまでは一度としてこのことを思つたことはなかつたのである。且つ、私は私自身のためでなく實はセルゲイ公爵のために、そして彼の金を以て、この賭博に來たのだ。——何がそんなに私を惹き付けたのか、私には説明することが

出来ない。然しそれは不可抗的の索引力を持つてゐた。ああ、この晩程、私にとつて、これ等の人々、これ等の顔々、單調な叫聲を擧げる賭金集金人、その他汚い賭博席の有りと有らゆるものが、それ程に胸の悪くなるやうに、壓迫するやうに、粗野に、悲しく思はれたことは嘗てなかつたのだ！ 賭博臺に倚りかかつてゐるその數時間の間を通じて時々私の内心に閃めく悲哀と哀愁との思ひを私はよく記憶してゐる。然しそれにしても何故私は歸らないで其處に坐つてゐたのだらう？ 何故私はそれを辛抱し、言はば、この事實を甘受し、この犠牲、この惑溺を甘受したのだらうか？ 私はただ一事だけを言ふことが出来る。——その時自分が全然正氣でゐたとは自分ながら斷乎と言ふことが出来ないのである。とは言へ同時に、私は嘗てこの夜位、慎重な態度で賭博をしたことはなかつた。私は沈黙し落ち着いて、注意深く極端に考へながら坐つてゐた、辛抱強くけちけちすると同時に、いざといふ場合には決意的な態度を執つた。私は再び臺の端の零に席を占めたが、其處はゼルスチコフとアフエルドフとの間であつた。アフエルドフといふ男は常にゼルスチコフの右手に席を構へてゐた。

その場所は私の氣に入らなかつた。然し私は零に賭けようといふ強烈な慾望を抱いてゐた上に、他の臺の端は全部既に塞がつてゐたので實は止むを得なかつたのだ。

私たちは一時間ばかり勝負を争つた。遂に私は自席からセルゲイ公爵が立上つて蒼い顔をしながらか方に來て、私と向ひ合つた臺の向う側に坐るのを見た。——彼は持金を全部取られて了つたので、黙つて吾々の勝負を眺めた。恐らく勝負をしようといふ考もなかつたらしい。と、その時、私は勝ち出し

て、丁度、ゼルスチコフが私の勝つただけの金を計算して出したところであつた。

不意にその瞬間、アフエルドフは物をも言はず、實に鐵面皮にも、その私の百留の紙幣を、私の眼前から奪ひ去り、彼自身の前に積まれた金の山へ加へて了つた。私は嗚咽して彼の腕を掴んだ。と、或豫期もしないことが私に起つた。それは恰も私を束縛してゐた或鎖を破つたかのやうに、又その日私の蒙つたあらゆる一切の侮辱がその一瞬に、その百留紙幣の紛失したことの中に凝固して了つたかのやうに思はれた。それは今まで私の中に鬱積してゐた一切のものが溢れ出ようとしてその瞬間をのみ待つてゐたやうなものである。

「この男は泥棒です。この男は僕の百留を盗みました。」と私は我を忘れて周圍を見廻しながら喚き立てた。

それに續いて起つた喧騒は、私は詳しく述べたくない。實にさうした誹謗は其處では珍しいことであつた。ゼルスチコフの家では各人が禮儀を以て振舞つてゐた。そのためにこの賭博場が有名であつたのだ。然し、私は自分のしてゐることが解らなかつた。ゼルスチコフの聲が喧騒の中から不意に高く聞えた。

「でも金が此處になくつて此處にあるぢやありませんか！ 四百留ですよ！」

直ちに次の光景が續いて起つた。親元にある金が、四百留の紙幣が、ゼルスチコフその人の鼻の下で消えた。ゼルスチコフは今までその紙幣の置かれてゐた場所と、それが私に接近して現れた場所——そ

れは私自身の金を置いた場所の隣りで、アフエルドフに近いと言ふよりも察し私に近かつた、その場所を指さした。

「泥棒は此處ですよ！ この男は又盗みましたよ。あらためて御覽なさい！」と私はアフエルドフを指さして喚き立てた

「誰でも彼でも入れるもんだからこんなことが起るんだ。」と、奥内のがやがやとした真中から威壓するやうな聲が聞えた。「紹介しなかつて許可するなんてことがあるもんか！ 一體誰が連れて来たんだ？」

此奴は何て男なんだよ？」

「ドルゴルギイといふ男だ。」

「ドルゴルギイ公爵かね？」

「ソコルスキイ公爵が連れて来たのさ。」と誰かが叫んだ。

「お聞きなさい、公爵」と、私は狂気のやうに臺の向う側にゐるセルゲイ公爵に歎願した。「皆は僕が泥棒だと思つてゐるんです。而も家際は僕が泥棒されたんだのに！ 僕のことを説明して下さい、説明して下さい。」

と、其處にその日のどんな悪いことよりもつと悪いことが、いや、私の生涯に起つたあらゆる悪いことよりも尚悪いことが突發した。——即ちセルゲイ公爵が私を認めなかつたのだ。私は彼が肩を揺らかした、いろんな次々の質問に對して、鋭く、きつぱりとかう答へたのを聞いた。

「僕は何人に對しても責任は負ひませんよ。どうか、僕は關係なしにして下さい。」

その間にアフエルドフは皆の中央に陣取つて聲高に「この男をあらためなきや！」と要求した。彼は自分自身のポケットを裏がへして見せてゐた。然し彼の要求は「いやいや、吾々が泥棒は知つてゐるよ！」といふ叫びに消されて了つた。

二人の召使が呼び出された。彼等は背後から私の兩腕を掴んだ。

「あらためられるなんて厭なこつた。僕はそんなことを許さないよ！」と私は引きずられながら叫んだ。

然し彼等は私を隣りの部屋に引き摺り込んだ。そして其處で、皆の真中で、私のポケットといふポケットを残る限なく改めた。私は喚き争つた。

「この男は屹度棄てたんだ、床を見なきや駄目だよ。」と誰かが言つた。

「何處の床を今になつて見たらいいんだ？」

「臺の下さ。何にしてもこの男は棄てたに相違ないよ。」

「無論……。」

私は戸口に引き出された。然し首尾よく私は戸口に立ち止ることが出来て、其處で意味もない狂烈を籠めて嘔鳴つた、賭博場の隅から隅まで聞えるやうに。

「球轉しは警察の嚴禁だよ。貴様たち皆を今日密告して呉れるぞ！」

私は階段を下された。帽子と外套とを着せられて、そして……往來に出る扉は私の前に開いてゐた。

## 第九章

晝は破滅を以て終り、夜が残つてゐたが、その夜が又こんな風になつたのだ。

私が自分の姿を往來に見出したのは一時だつたと信じてゐる。朗らかな、ひっそりとした、霜の降る夜であつた。私は殆んど駈けてゐた。そして恐ろしく急いでゐた。けれども——それは自分の家に向つてではない。

「何故家だ？　かうなつてから家なんでものが存在し得るか？　家とは人間の住んでゐる處だ、明日も亦生きるために眼を覺ます處だ。——然しそんなことだ今出来ようか？　生命は終つたのだ。今は全く生きて行くことが不可能なのだ。」と私は考へた。

そして、何處に自分が待つてゐるのかも氣が付かず、又實際特に何處と目ざした處もなく、街を彷徨つてゐながら、私は非常に熱くなつて、絶えず重い浣態の皮で縁を取つた上皮を擴げて走つてゐた。

「今、どんな種類の行も私にとつては何等の目的を持ち得ない。」と、その瞬間に私は感じた。で、妙な言ひ方ではあるが、私には、私の周囲のあらゆる事物が、自分の呼吸してゐる空氣でさへも、他の元體から來たもののやうに感じられた。恰も私自身が月の世界にゐるかのやうであつた。——あらゆる物、町も、通行人も、走つてゐる敷石も、さうした凡てのものが「自分のもの」でなかつた。

「此處は方形屋敷だな、此處にセント・アイザックがある。」と不圖私は思つた。然し私は今そんなものでどうすることも出来ないんだ。」あらゆる物が突然に遠くなり、凡てが不意に「自分のもの」でなくなつた。

「私は母とリザとを持つてゐる。——けれども母とリザとは今私にとつて何であらう？　一切のことが終つたのだ、さうぢやないか？　一撃の元に一切が終りを告げた。但し唯一つのことだけが残つてゐる——即ち私が永久に泥棒であるといふことだ。」

「如何にすれば私が泥棒でないことを證明することが出来ようか？　今、それが出来るだらうか？　亞米利加へ行くのでしょうか？　然しそれを以て何を證明すべきか？　ヴァシロフは私がそれを盗んだと信する最初の一人であらう？　私の『思想』は？　どんな思想だ？　今私の思想はどんなになつてゐるんだ？　若し私が五十年、百年を生きたとしても、誰が常に私を指して言ふだらう、——『あの男は泥棒さ。あの男は賭博で金を盗むことに依つてその思想を始めたのさ』と。」

私の内心には無念があつたらうか？　私は知らない、恐らくあつたであらう。言ふのは妙なことから、私は常に、幼年時代から一のある特徴を持つてゐたのだ。即ち若し虐待を受ければ、つまり、絶對的に傷つけられ、これ以上はないといふ程侮辱されれば、私は常に、直ぐにその侮辱を受動的に甘受しようとする不可抗な慾望を示すのであつた。そして「よろしい、貴方は私を侮辱なすつた、それで私は一層自分自身を侮辱するやうになるのです。御覽なさい、そしてお楽しみなさい」とでも言ふかのや

うに、私は攻撃者が私に課して呉れようと考えた。トッ  
チャアドは私を打ち、そして私が召使であることを又、議員の息子でないことを示さうと試みた。で、  
私は直ぐに、その召使の役割を演じたのだ。私は彼に服を渡したばかりでなく、自ら進んで刷毛を取り  
彼の命令をも待たないで、塵といふ塵を拂ひ除けたのだ。さうして彼のうしろを、手に刷毛を持ちなが  
ら、召使の敬虔さを以て追つ掛けてゐた。それは時として彼自身が私を遮つてかう言つた様である。  
「それで澤山だよ、アルカアデイ、それで澤山だよ。」

彼は何時も遣つて来て外套を脱いでゐた。で、私はそれに刷毛を掛け、注意に注意して曇み、それを  
辨慶編の絹手巾で蔽つて置くのだ。私の學校友達が常に私を嘲笑ひ、そのために輕蔑するのを私は知つ  
てゐた。よく知つてゐたけれども正しくさうすることが私を氣持よくさせたのだ。

「彼等が私に召使になるのを欲してゐるからそれで私は召使でゐるのだ。さうでなくて似而非紳士にな  
れと言へば、似而非紳士になるんだ。」

私は數年間、さうした方法で受動的憎悪と地下的無念とを持ち續けてゐたのだ。

それで、ゼルスチコフの處で、私は部屋の隅まで聞えるやうに、思ひ切つて狂氣して嘔鳴つた。――  
「球轉しは警察の嚴禁だよ。貴様たち皆を今日密告して呉れるぞ！」そして、私は斷言するが、その場合  
にも亦、これに似た或物があつたのだ。――私は侮辱を受け、調べられ、公の席で泥棒であると宣言さ  
れ、打ち碎かれて了つた。「或程これで私は云ふことが出来る。君の察したところは正しいのだ。私は泥

棒以上にいけない者、密告者なのだ。」

但し今思ひ出すから、かうした説明をし得るのである。その時は解剖する力を持つてゐなかつた。そ  
の時さう嘔鳴つたのは偶然のことであつた。私は實際私が嘔鳴らなければならぬ一秒を知らな  
かつた。それはそれ自身を嘔鳴つた。――その特徴が既に私の内心には潜んでゐたのだ。

言ふまでもなく、その街を走つてゐる際に私は精神が錯亂し始めてゐた。然しよく記憶してゐるが、  
私は自分の爲つたことを知つてゐた。而も確信を以て言ふことが出来るが、その時の私には思想だ  
の結論だのを纏めることは不可能であつた。その時でさへも私はかう感じた。『或者は考へ得る。けれど  
もそれ以外の考はどうにも仕方がない。』と。同じ道理で、或私の決心は、たとひそれが完全な自意識を  
持つてゐるとしたところで、全然論理を外れてゐたのだ。且つ、私はよく記憶してゐるが、或時に私は  
或結論の矛盾してゐることを充分に認めながら、それと同時に、それに働き掛ける完全な意識をも認め  
てゐた始末なのだ。さうだ、罪惡はその夜中私の身邊を彷徨つてゐた。そして偶然のことからそれを犯  
さなかつただけのことである。

私は不意にタチアナ・ペヴロヴナがヴァシロフに就いて言つたことを思ひ出した。

「あの人は夜ニコラエフスキイ鐵道にでも行つて頭を線路に横たへればよかつたのに。――線路は空  
み通り頭をちよん切つて呉れたらうに。」

一寸の間、その考が私の全感情を支配した。然し私は直ぐに氣持が苦しくなつてそれを拂ひ退けた。

「若し私が線路に首を載つけて死ぬるとすれば、彼奴等は明日は言ふだらう、あの男は金を盗んだからそんなことをしたんだ、恥しいからそんなことをしたんだ。それにきまりきつてる！」と  
 そしてそれと同時に、これも記憶してゐるのだが、私は恐ろしい憤怒の、不意の閃きを経験した。「新しい生活を始めることも不可能だ。それで私は屈従しなければならぬ、召使となり、犬となり、虫となり密告者となり、眞の密告者とならなければならぬ。而も一方で私自身ひそかに準備しながら、何時かその一切を世間に發表し、あらゆる者、あらゆる物を、罪ある者も罪なきものも等しく滅ぼしてさふ。それで彼等は凡て、これが自分たちの泥棒だと呼んでゐた人間なんだと悟ることだらう。……で、その時自殺する。」

私はどんな風にしてコンノクヴァルディスキイ並木道附近の狭苦しい街に這入り込んだかを覚えてゐない。この狭苦しい街の兩側には百歩ばかりに亘つて、後庭を圍んだ高い石の壁があつた。左手の壁のうしろに、私は材木の大きな堆塚が立つてゐるのを見た。それは、よく材木置場などで見るやうな長い堆塚で、壁よりも七呎位高くなつてゐた。——私は立ち止つて考へ出した。

私はポケットの中に銀の小さいマッチ箱に這入つてゐる蠟マッチを持つてゐた。繰り返して言ふが、私はその時、自分が何を考へてゐるか、何をしようとしてゐるか、それははつきり知つてゐた。それでもそのことを記憶してゐるのだが、然し何故そんなことをしようと思つたか、それは解らない、全然解らない。私はただ、さうして見たいといふ強烈な慾望を感じただけのことである。

「壁の上に登ることはわけのないことだ。と私は考へた。と、その時、私は壁の内に二歩とは離れないで一つの門があるのを見た。それは幾月もの間閉ざされたままでゐるものらしかつた。

「下の凸出部に立つて、門の頂きを掴めば、わけもなく壁の上に登ることが出来る。」と私は考へた。「而も誰一人私を見てゐる者はゐない。このあたりにぶらついてゐる者もない。あらゆるものが、何も彼もしんとして静かだ！」で、私は壁の上に坐つて容易に材木の堆塚に火を移すことが出来る。別に降りないでもそれは出来る。何故と言ふに、材木は殆んど壁とくつ着いてゐるのだから。寒いので餘計によく燃えるだらう。私はただ自分の手で樺の枝を掴めばいいんだ……で、實際のところ少しも丸太に届く必要はない。ただ手でもつてその皮を剥ぎながら、矢張り壁の上に坐つてゐて、その剥いだ皮にマッチで火を點ける。そして堆塚の中に投げ込む。——さうすれば炎々とした焔になるのだ。それから飛び降りて逃げ出す。走る必要もない。何故と言つて、さつてからのことを見てゐる人はゐないんだから……」

こんなことをその時私は考へた。そして直ぐに實行しようとした。  
 私は非常な満足と快感を感じて登り出した。私は登ることは巧かつた。學校時代でも體操が得意であつた。然しこの場合、これは仲々厄介な仕事であつた。兎に角上部の極めて僅かな凸出部の一つを掴むことに成功して身體を持ち上げて見た。それで壁の頂きに縋らうとして他の一方の手を舉げた。その途端に亘つて私はうしろに轉がり落ちた。

後頭部を打つたに違ひないと思ふ。そして屹度二三分間の間意識を失つたまま倒れてゐたのだ。正氣

付いた時に、私は俄かに濡らない寒さを感じて、毛裏の外套を身のまはりに捲きつけた。そして自分が何をしてゐるか、殆んど意識もなしに、門の入口の隅に這つて行つて、門と壁との間の窪みに、ぐつたりと蹲踞つて了つた。私の考は滅茶苦茶になつて、恐らくそれから直ぐにうとうとと居眠りに落ちたのであらう。私は今でも夢が何かのやうに覺えてゐる——不意に私の耳の中には、鐘の、底に響くやうな重い音が聞えて、それをいい氣持で聞き惚れ掛けたことを。

## 二

鐘はしつかりとはつきり一秒間に一度か二度位の割合で鳴つてゐた。けれども、それは警鐘ではなく愉快な心地よい、音楽的な響きであつた。で、私は不意に、それが自分にとつての馴染のある響き、——トツチャアドの學校と向ひ合つてゐる赤塗りの教會、セント・ニコライの鐘であると解つた。それはそれ程よく私の記憶してゐる古い様式のモスコウ教會で、石造花形の細工の澤山にある、そして、圓天柱だの大柱だのを持つた、アレキセイ・ミハロウイツチ皇帝時代の建築に係るものであつた。復活祭もやつと終つたばかりのところだといふこと、新しく生れた小さな緑の樹葉が、トツチャアドの前の庭園にある瘦せ細つた樺の枝に顔へてゐることなどが私には解つた。その昔輝やかしい夕暮れの太陽は、その斜めの光りを私たちの教室に射し込んでゐた。そして左手の私の小さな部屋には、——その部屋は一年前、トツチャアドが、私を伯爵だの議員だの子弟と交つてはならないといふので離して置いた部屋であつ

たが、その部屋には一人の訪問客が腰を下してゐた。

さうだ、一人の親戚としては持つてゐない私は、その時、初めて、トツチャアドの學校へ這入つてから初めて不意の訪問客を受けたのであつた。私はこの訪問客を、その這入つて来る時から直ぐに悟つた。それは私の母だつたのだ。尤も私は彼女が昔て私を村の教會に連れて行つて、その時其處の圓屋根の上を鳩が群れ飛んでゐた、それ以後一度として會つたことはなかつたが。

私たちはぼんやり坐つてゐた。そして私は不思議さうに母の顔を眺めた、ずつと後になつて知つたことだが、彼女は突然に外國に行つて了つたヴァシロフに置きざりにされてから、自分の勝手にモスコウに遣つて來たのであつた。それと言ふのも、單に私に會はうといふ、それだけの目的で、自分の僅かな持金の内から長途の旅費を支拂ひ、殆んどこつそりと、彼女の身の上を監視して呉れと依頼されてゐる人たちの眼をも盗んで來たのであつた。彼女が這入つて來てトツチャアドに話してゐる時に、一言も自分が母であるといふことを私に話さなかつたことも不思議である。彼女は私の傍に腰を掛けてゐた。そしてよく覺えてゐるが、私は彼女がそれ程無口なのを不思議に思つた。

彼女は手荷物を持つてゐたが、それを解いた。その中には六個の橙と幾つかの生姜入菓子と、二斤の普通の佛蘭西麵粉とがあつた。私はその麵粉を見て、むつとして、私たちの食物は立派なものだ、皆は全くの佛蘭西麵粉を毎日お茶の時に呉れるのだといふことを、困つた恰好をしながら話した。

「氣にしないでね、お前。私は馬鹿な考から皆さんは學校では食事が思ふやうに出來ないだらうと思つ



たのだからね。怒らないでね、お前。」

「それにアントニナ・ヴァツシリエヴナは氣を悪くするでせう。學校友だちも僕を笑ふでせうよ……」

「取つて置いたらどう？ 食べることは食べるでせう？」

「どうぞ、さうしないで……。」

さう言つて私は彼女の贈物に手をも觸れなかつた。橙と生姜菓子とは眼の前の小さな卓子の上に載つてゐた。一方、私は眼を伏せて、然し非常に威厳を保つた恰好をして坐つてゐた。彼女の訪問が、私の級友に會ふのに恥しい思ひを私にさせたといふことを彼女に知らせよう、又、言はば「御覽なさい、貴女は私に恥ぢをかかせた、貴女は御自分のなすつてゐることを知らないのだ」とでも言ふやうに、理解したかも知れぬ僅かの徴候をでも見せて貰ひたい、といふ非常に大きい慾望を、實は私が持つてゐたのだとは誰が知つてゐよう！ ああ、その時まで、私は塵といふ塵の一本をでも拂ひ落すために、刷毛を持つてトツチャアドの後を追つ掛けてゐたのだ。彼女が歸るが早いか、級友から、そして恐らくトツチャアド自身からも、どんな嘲罵を甘んじて忍ばねばならないかと思つて、私はびくびくとしてゐた。従つて私の内心には、彼女に對して少しの親しみの感情をも持つてゐなかつた。私はただ横目で、彼女の鈍い色の古めかしい服装、どちらかと言へば粗野な、殆んど勞働者じみた手、全然粗末な靴、恐ろしく肉のこけた顔を眺めてゐるきりであつた。彼女の前類にはもう敵が出来てゐた。尤もその夜、彼女の歸つた後で、アントニナ・ヴァツシリエヴナは、「お前のお母さんは屹度昔は綺麗だつたよ。」と言つてはゐ

たが。

さうして彼女が坐つてゐる其處へ、アガフィアがお盆の上に珈琲を載せて持つて來た。それは丁度食事の後であつた。そしてトツチャアドは何時もその時分に自分の客間でその珈琲の一杯を飲む定めであつた。然し母はアガフィアに有り難うと言つたきりでコップを取らなかつた。後に知つたことであるが當時母は、珈琲が心臓の鼓動を激しくするといふので、それを飲まないでゐたのであつた。トツチャアドは深く彼女の訪問といふことを考慮して私に面會を許可して呉れた、つまり彼は恩顧的な態度を執つて呉れたので、その一杯の珈琲も、彼の文化、感情、歐洲的思想を非常に裏書きする博愛主義の明白な表示であつたのだ。而も母は敬意とでもあるかのやうに、それを拒んで了つた。

私はトツチャアドの處に呼ばれた。其處で彼は、私のやつてゐる教科書と練習帳の凡てとを持つて行つて彼女に見せると命じた。

「さうすればお母さんは俺の學校でお前が何を學び得たかが解るからね。」

その時、アントニナ・ヴァツシリエヴナは唇をとんがらして、冷やかすやうな、嘲るやうな調子で、「お前のお母さんは、うちの珈琲をお好きにならんやうだね。」と言つた。

私は練習書を掻き集めて、教室の中で母と私とを讀めてゐる伯爵だの議員だの子たちの間を滑り抜けて、待ち侘びてゐる母の處へ持ち運んだ。トツチャアドの命令をそのまま帳面に實行することは私を非常に喜ばせた。

「これが佛蘭西語の文法ですよ。これが書取で、これが avoir と être との助動詞變化です。これが地理、歐洲その他全世界の主要都市の説明です」と、そんな風に私は説明して行つた。

一時間半、或はそれ以上も、私は單調な小聲で、靜かに俯向いたまま説明し續けた。私は母が、かうけれども説明することの内に、私も自分だけの快感を感じてゐた。然し私は彼女を疲れさせはしなかつた。彼女は始から終まで私の言葉を遮ることなく、異常な、そして敬虔とも言ふべき注意を拂つて耳を澄ましてゐた。で、判頭、私の方が疲れて止して了つた。けれども彼女の表情は悲しく、顔には憫れみを誘ふ或物が現れてゐた。

遂に彼女は暇を告げて立ち上つた。其處へ不意にトツチャアドが這入つて来て、大袈裟な様子で彼女に訊いた。

「御息の進歩に御満足でせうか？」

母はつちつまの合はぬ感謝の言葉を述べ出した。アントニナ・ヴァツシリエヴナも這入つて来た。母は二人に向つて、「こんな風な善良な孤兒を見棄てないで、可愛がつてやつて下さい」としきりに願つた。……さうして眼に涙を一杯に湛へて、二人に、別々にお辭儀をした。實に丁寧なお辭儀で、恰も平民が貴族の寵を乞ふ時のやうな態度であつた。トツチャアド夫妻はこんなお辭儀を豫期してゐなかつた。それでアントニナ・ヴァツシリエヴナの如きは明らかに氣持を柔らげて、先刻の珈琲問題での悪感情を一

變して了つた。

トツチャアドは更に増した威嚴をさへ見せながら親切に答へて言ふに、「子供たちの間に少しの區別も立てやしないんですよ。皆私の子供であり、私は皆の父なんです。議員や伯爵の息子たちも殆んど同じ立場に立つて教育してゐるんですからね、そのことは貴女も認めて下さらなきや、——」そんな風なことを述べ立てた。

母はただ頭を下げたが、ひどく困つた心配な風であつた。そして遂に私の方を振り返つて、眼に涙を溜めながら、「さよなら、お前。」と言つた。

彼女は私に接吻した。つまり私は接吻されるままに委してゐただ。彼女は明らかに接吻し続け抱擁し續けたいらしかつた。然し、他人の前なので彼女自身羞恥を感じたのか、何か他のことで氣持を損じたのか、それとも私が彼女を恥しく感じてゐることを察したのか、兎に角彼女は慌しく部屋を出て行つた。更に一度トツチャアド夫妻にお辭儀をしながら。私は矢張り立つてゐた。

「*Mais suivez donc votre mere, il n'y a pas de occur cat enfant!*」とアントニナ・ヴァツシリエヴナは言つた。

トツチャアドは肩を聳かしながら何か答へた。無論、「俺が召使のやうに、この子を扱ふのは理由がなくはないさ」といふ意味のことを。

私はおとなしく母の後に従つた。二人は階段の方へ歩いて出た。私は皆がそれぞれの窓から覗いてゐ

るのを知つてゐた。母は教會の方に向いて三度十字を切つた。——彼女の唇は顫へてゐた。底深い鐘の音が高樓から氣持よく一定の時を隔てて聞えて來た。彼女は私を振り返つて、自分自身を制することが出来ないで、両手を私の頭に置き、さうしたまま嘔り泣き始めた。

「お母さん、一寸待つて……僕、恥しいから……だつて皆が窓から見てるんだから……。」

彼女は不意に周章てたやうに言ひ出した。

「神様が……神様がお前を守つて下さるやうに……天使がお前の傍に附いてゐて下さるやうに。聖母様、セント・ニコライ様……ああ神、神様……！」

彼は繰り返して、出来るだけ私の頭上に多くの字のしるしを描きながら慌しく言つた。「お前、お前！ お待ち、お前……」

彼女は慌し氣にポケットに手を入れてハンカチを取り出した。それは青い辨慶縞のあるハンカチで、隅に固い結び目があつた。彼女はその結び目を解き始めた……が、解けなかつたのだらう……。

「構はない、ハンカチと一緒に持ち。これは綺麗だから、多分まだ使へるでせう。この中には四片銀貨があるからね。お前はお金が必要なことだらうと思つて。勘辨しておくれ、丁度今はこれつきりしか持ち合せがないんだから……勘忍して、ね。」

私はそのハンカチを受取つた。附け加へて置きたいが、私たちはトツチャアド夫妻から極めて自由な食事を給されてゐたから、何物も必要なものはなかつた。が、私は自分を制することが出来ないで、そ

のハンカチを受け取つたのであつた。

彼女は又しても私の上に十字を切つて、祈りを囁いた。と、不意に私に向つてお辭儀をした。先刻二階でトツチャアドにしたと丁度同じやうな、長い低いお辭儀をした。——私はそれを生涯忘れないであらう！ で、私は身震ひした。何だか理由が解らなかつた。そのお辭儀に彼女はどんな意味を含めたのだらうか？ 「彼女が嘗て出した悪口を告白したのだらうか？」と、ずつと後になつて私は思つたが、果してさうか、私には解らない。然しその時、それは「皆が窓から眺めてゐる。そして例のラムバアトが恐らく私を打ち出すだらう」といふ思ひよりも尙恥しい思ひを私に與へた。

遂に彼女は歸つた。菓子と橙とは伯爵や議員の息子たちに貧り食はれ、四片銀貨は卑しくもラムバアトに横取りされて、私の好みもしないチョコレートやタートとなつて菓子屋に支拂はれて了つた。

全六ヶ月がそれから經つて、濕つぽい風のある十月の或日であつた。私は母のことをすっかり忘れてゐた。ああ、その頃、私の心の中には憎悪、一切のものに對する盲目的な憎悪が潜み込んでゐたのだ。

尤も以前と同じく、矢張りトツチャアドに刷毛を掛けてはゐたものの、力一杯に私は彼を憎んだ。毎日憎みに憎んだ。その頃であつたが、私は或夕暮の物悲しい塵の中で、自分の小箱を掻き探して、不意にその隅つこに、例の母の青い辨慶縞の木綿のハンカチを見付けた。それは私が其處に投げ込んだ時以來そのままになつてゐたのだ。私は取り出して、或好奇心を以て眠め廻しさへした。ハンカチの隅には例の結び目のために出來た皺が依然として残つてゐた。圓い銀貨の跡さへ明らかに見えてゐた。私は又ハ

ンカチを收つて箱を奥に押し込んだ。それは祭日の夕で、鐘は終夜の動行で鳴り響いてゐた。生徒たちは食後を済まして、皆めいめいの家庭に歸つてゐたが、この時にラムバートだけは日曜日を待つて居残つてゐた。彼は以前の通り常に私を打擲してはゐたが、一方で又何時もいゝんなことを私に話して、時々私を必要とすることがあつた。二人は一晩中、まだ二人とも見たことのないレイヂの拳銃だの、サアカシアの剣だの、その切れ味だの、捧泥隊を組織するなんて何といふ素晴らしいことだらうなどといふことを話し合つた。その擧句、ラムバートは彼のお得意の頭目たる猥雑な話に落ちて了つた。さうした話は、私自身怪しむのだが、聞くことが好きだつたのを覚えてゐる。

不意に私はその話に堪へられなく感じた。それで頭痛がすると彼に話した。十時に二人は寢床に這入つた。私は蒲團の中に頭を埋めて、枕の下から例の青いハンカチを取り出した。私は或理由があつて一時間程前にそれを小箱から引き出して、寢床を拵へると同時に枕の下に忍ばせて置いたのであつた。

私はそれを顔に當てて、突然接吻し始めた。——「お母さん、お母さん」と私は囁いた。そして私の胸全體は悪いことをしてでもゐるかのやうに引き釣つた。私は眼を閉ぢて母の面影を描き出した。——教會の方を向いて彼女自身十字を切つた時の、その顫へる唇、そして後になつて私の頭上に十字を切つた時の顔、又、私が「僕、恥しいんです。皆が見てゐるから」と言つた時の顔。——「お母さん、お母さん。貴女は實際僕と一緒にゐらしたんですか？……お母さん、今は何處にゐるんです？ 遠くから僕を見に来て下さつた貴女は？ 貴女はその貴女の哀れな子供を覚えてゐらつしやいますか？……ただ悲

になりと今姿を見せて下さい、来て下さい。僕は申し上げますよ、どんなに僕が貴女を愛してゐるか、貴女を抱いて接吻することが出来るかを。それから、僕は今は貴女を恥しがりませんよ。尤もあの頃でも僕は貴女を愛してゐました。心は痛んでゐました。ただちつと召使のやうに坐つてはゐましたけれどその頃どんなに僕がお母さんを愛してゐたか、貴女は御存知ありますまい。お母さん、今何處にゐらつしる？ 僕の聲が聞えますか？ お母さん、お母さん、貴女は田舎の教會の鳩を覚えてゐらつしやいますか？……」

「畜生！……一體どうしたつて言ふんだ！」と、ラムバートは寢床から嗷鳴つた。「止しちまへ！ 寢られやしないぢやないか……」

彼は遂に飛び起きて私の方に駆けて來た。そして敷布を引つ張り出したが、私は蒲團を離さなかつた。前以てそれを頭の周圍に捲きつけてゐたのだつた。

「君は泣いてるな。何だつて泣いてるんだい？ この間抜けめが。止してしまへ！」

さう叫ぶと一緒に彼は私の背中を、横腹をいやと言ふ程打ちのめした。益々烈しく打擲した……。と不意に私は眼が覺めた。

それは明るい眞晝であつた。そして壁の上に眞白い雪は霜に輝やいてゐた……。私は凍へるばかりになつて躊躇り、毛裏の外套の中で殆んど麻痺してゐた。さうして誰かが私の身體に蔽ひ被さるやうに突つ立ちながら、聲高に私を罵つたり、右足で蹴つたりして、私を起してゐた。